

俺ガイルSS　やはり俺  
の球技大会は間違っ  
ている。

紅のとんかつ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

やはり俺の青春ラブコメは間違っているのSSです。

SS初投稿です！

文章力が無くキャラもこれじゃないかもしれないかもしれませんが、よかつたら読んで頂けたら幸いです！

日常を過ごす奉仕部に再びお調子者の彼が訪れ、依頼を受ける話です。

追記 色々小説の禁則事項等、友人や読んでくれた方々に指摘を受けて修正中です！

他にも何か気になる点がありましたらご指摘ください！ 可能なかぎり修正します



# 目次

切り風)

序章 やり過ぎすはずだった球技大会は

俺を逃がさない

プロローグ お調子者は再びその扉を

叩く 1

その1 俺達の挑戦が始まり、厳しい

訓練が幕をあげる。 8

前章 特訓は何故こんなに辛いのか。

その2 特訓は辛く、やはり辛い。

33

その3 特訓は進み、チームは歩み出

す。 62

中章 俺たちの試合はこれからだ(打ち

その4 そして試合開始の笛が鳴る。

107

その5 彼は彼なりの本気があり、そ

の生きざまがある。 140

その6 そして後半戦へ。 167

その7 最後の力を振り絞り、その

シュートは放たれる。 190

終章 戦いの終わり

その8 試合は終わり、そしてその依

頼は終わりを迎える。 221

エピローグ それから俺は少しだけ変

化した日常に戻り出す。 244

番外編 球技大会の慰労会はやはり間違った

番外1-1 慰労会 251

番外1-2 やはり慰労会はただでは  
すまない。 275

番外1-3 王様を廻る権力争いは、  
どうやら違うらしい 297

番外1-4 慰労会は俺にしては後味  
良く終わりを迎える。 347

番外2 球技大会 サイドE

番外2-1 平和な変わらない日常の  
私の一つの間違い 377

外伝 2-2 そして始まる第2の矢

外伝 2-3 突きつけられる真実 406

外伝 2-4 そして私は 453



序章 やり過ごすはずだった球技大会は俺を逃がさない  
プロローグ お調子者は再びその扉を叩く

冬の冷たい風が窓に吹き付けカタカタと音を鳴らす。

その音と紙をめくる音だけが静かな部屋の中に響いていた。

場所は奉仕部部室、部屋の中では奉仕部部长“雪ノ下雪乃”と部員の“由比ヶ浜結衣”  
“そして同じく俺”比企谷八幡”、いつもの部活メンバー三人が難しい顔をしながら百  
近い枚数の紙束を読み上げている。その三人を腕を組みながらどこか緊張したように  
見つめている“材木座義輝”がケホケホとわざとらしい咳払いをする。その動作に奉  
仕部三人は鬱陶しそうに顔を上げた。

「私の新しい小説、戦国の鎮魂歌はどうであるかな？　今回はしっかりと完結させて

持ってきた自信作なのであるのだが……」

……今日奉仕部でいつものようにまつたりとすごしていた所に嵐のように現れたコイツは、前の作品を酷評されたにも関わらず、懲りずに自作小説を奉仕部に持ち込んだ。ちなみに今回の作品はタイムスリップして戦国時代に飛んだ主人公がなんだかんだで戦国時代を生き抜く、何回も煎じられて味がしないレベルの良くある話だ。渡された紙束に栞を挟み、雪ノ下は材木座に真っ直ぐ向きなおし口を開く。

「まだ最後まで見た訳ではないから総評という訳ではないけれど……」

材木座はごくりと生唾を飲み込み次の言葉を待つ。しかし雪ノ下から放たれたのは名前の通り冷たい言葉だった。鋭い目線を材木座に送り、ため息と共に評価を口にする。

「つまらないわ。前回に引き続きルビがおかしい、何故脱ぐのか解らないヒロイン。それに歴史の勉強が足りないとしか思えない。戦う地名や年号が違うだけでなく、何故か性別が変わっている武将までいるわ」



「そ、それは話にオリジナリティを出す為に……」

「それにたまに使われる四字熟語やことわざ、まるで使い方を間違っている。四字熟語の意味位今なら簡単に調べられるのだから、しっかりと調べてから使いなさい」

「うぐつ……」

材木座は助けを求めるとに俺を見る。

「所々見たような台詞や展開が多すぎるのが気になる。このキャラとの戦いなんて何処かの奇妙な冒険まんまじゃねえか」

「ギクツ……」

「バレた!？」

そんなリアクションを挟みながら仰け反ると、最後に悲しい顔で由比ヶ浜を見た。

「え、ええつと……、特徴的なタイトルだね♪」

「グハッ！」

三人のそれぞれの言葉を喰らい材木座はぐったりと椅子に背を預ける。

そんな材木座を見ながら雪ノ下はため息をつき、葉を取り続きを読み始めた。

お前最後までしっかり見てやるつもりなんだな……。正直俺はもうお腹一杯なんだが。

由比ヶ浜もうえ〜っというような顔をしている。だが雪ノ下が全部読むというなら俺達も読まないと駄目なのだろうな。ハア……。

材木座は自分の小説をブツブツ言いながら見返している。

……まあ前回と違ってしっかり完結した話を一本作ってきただけ前より格段に前進したと言えるだろう。内容は正直雪ノ下の言う通り面白いとはいえないが。

由比ヶ浜がしぶしぶ紙束をパラパラ流し読みを再開する。

俺も仕方なしと紙束を広げようとしたその時、部屋の扉の小窓に人影が見えた。

コンコンツ……。

奉仕部の扉が叩かれる。

一日に二人も来訪者が来るとは珍しい日もある物だ、そう思いながら扉を見ると、これまた珍しい人物が入ってきた。着崩した制服に派手な色のシャツ、校則的にどうなんだ？ といった着こなしをした見るからにチャライ感じのクラスのお調子者、戸部翔だった。

「ども、入りまゝす」

「あれ〜？ とべつちじゃん」

「こんちわ。いや〜、今日も寒いね〜。マジ凍死しちやいそうだわ〜」

制服の上着の襟を引っ張り、肌が出る部分を少しでも減らそうとしながらさっさと扉を閉める。

「どうしたの？ とべつち部活は？」

「いや今日は顧問が来れないとかで休みになったんよ。それで丁度良くつかさ〜。そ

の、実は相談があつて、前みたく三人に聞いてくれたらなうつて思つて……」

……！

これはチャンス、そう判断した俺と由比ヶ浜は二人で“カツ！”と目を光らせる。

「いいよいよ！ 相談乗るよ〜！」

戸部の話に由比ヶ浜が嬉しそうに紙束を床において答える。俺も紙束を置いて戸部に頷いた。

いやクラスメイトが困ってるなら話位聞いてあげないとな。マジ話聞いただけだけど。いや本当相談に乗るの大切だよな。

「待ちなさい」

しかしそれを良しとしない我が部の部長。紙束を指で叩きながら俺達を制止する。

「戸部君。悪いのだけれど今は彼からの依頼の最中なの。先にそちらの依頼を終えてからで構わないかしら？」

「あ、うん大丈夫大丈夫！ んじゃここで待ってて良い？」  
「どうぞ。椅子なら教室の後ろに積み重ねてあるのをご自由に」

そして俺たちを一瞥し、再び雪ノ下は紙束に目を戻す。

……この紙束をどうしても読み終えないと駄目なのね。ゆきのんマジ真面目。  
折角訪れたチャンス逃した俺たちは陰鬱な顔で席に座り直し読書と呼ぶには辛い  
作業に戻った。

# その1 俺達の挑戦が始まり、厳しい訓練が幕をあげる。

材木座の小説をようやく読み終え大きく伸びをする。雪ノ下はもう読み終えたように、指摘する箇所を簡条書きでまとめていた。由比ヶ浜はまだ唸りながら小説を流し読みしているみたいだ。

その隣には戸部鼻歌で良く聞くJ-POPを口ずさみながら材木座の紙束をペラペラと流し読みをしている。

途中で戸部が“皆何読んでの？”と首を突っ込み、材木座の自作小説だと伝えた所“面白そう！俺にも見せて！”と詰め寄り、材木座は困惑しつつも戸部に差し出したのだった。

やめときゃよかったのに。

由比ヶ浜が読み終えるのを待つてたらキリがないので、読み終えた俺と雪ノ下から感想をつける事にした。雪ノ下のは感想というより指摘、指導といった感じだった。辛辣な物言いに戸部が軽くヒいていた。俺からはパクるならうまくやれ、と一言だけアドバースを出しといた。回りから凄く白い目で見られたが気にしない。

由比ヶ浜からは一言がんばってね。

なんでがんばってという言葉は時と場合によつては凄い距離を感じるんだらうか。俺が中学の時の委員長に、クラスで一人でいる事を心配され話しかけられた時いかに一人でいる事が有用か説いた所、話を一通り聞いてから一言がんばってね、と言われた。あの時、俺は彼との関係に一線引かれた気がした。現にアレから話かけられる事無かつたし。

三人から感想を聞いて材木座はがづくり項垂れていた。俺も由比ヶ浜も雪ノ下もぐったりしている。

こうして本日一人目の依頼は終わりだ。

お疲れ材木座。

そうして暗い空気が流れている中、戸部が紙束を持ち上げながら材木座に話しかけた。

「いやでも小説書けるってマジすごくない？俺はそういうの無理だからリスペクトだわ」

材木座の耳がびくりと動く。

「俺小説とか初めて読んだし、最初の方しか読んでねーけど、このタイムスリップ？　つてのマジ新しいし！　主人公のヨシテル君の右手でどんな能力も無効に出来るとかオリジナリテイつてのあると思うわー。ぶち壊すつて台詞もカッケーし！」

お前マジで言ってるの？　と戸部を信じられない物を見るような目で見てしまった。ソレどう考えてもただのパクリ……。

しかしようやく誉められ、途端に元気になる材木座。立ち上がり高々と笑い出す。

「ふ、フハハハ！　そうであろう！　お前は選ばれた見る目を持つ者のようだな！　物語の真意を読む事の出来る目を！　フハハ！」

急にテンションを上げまくる材木座に、戸部が「お、おう。」とひいてる。

……まあ戸部はラノベとか見ないだろうし、知らない奴からすれば「新しい」と感じるだろう。確かに読み手によって見方を変えれば評価は十人十色、知らない事は新しい。本ネタを知らない人ならソレが最初でオリジナル。



「皆の衆、感謝する！モチベ高いうちに修正してくるぞ！完成品を楽しみにしておれ！ではサラバ！」

ドタドタと材木座が部屋から出ていった。

え、何また持つてくんの？

ふう〜つと三人が溜め息をついた。

雪ノ下がカタツと椅子を下げ、立ち上がる。

「紅茶を入れるわ。由比ヶ浜さん、戸部君はいかが？」

由比ヶ浜がありがと〜つとお礼を言い、戸部がうすつと頭を下げる。俺は？

仕方なくさつき買っておいたマツカンを鞆から取り出した。プルタブを開いた所で

雪ノ下が紅茶を持つてくる。

見ると俺用の湯飲みにも紅茶が入っていた。

気まずい感じに目が合う。

「……」

「……い、いただきます」

だつて俺には聞かなかつたじゃん？

雪ノ下が席に付き、皆紅茶を一口飲み一息つく。……うまい。

寒い教室で作業をし冷えきつた体に温かい紅茶が染みていく。思わずふうと息をはいてしまった。それは皆そうだったようで、四人共タイミングが合ってしまった。

「……それで、戸部君の相談とやらは何かしら？」

そしてようやく二人目の依頼に入る。もう今日は終わりでもいいんじゃないかな？ 駄目かな？ 駄目だね。

「あ、うん。それな。……実はさ、体育の話なんよ」

どこか言いづらそうに口を開く戸部は後頭部に手を組みながら椅子に寄りかかる。ぎしつという音が静かな空間に響く。

体育……？このタイミングで体育の相談となると……。

戸部の言葉に最近の出来事を考え、思い当たるフシが頭に浮かんできた。

「球技大会か？」

「おおそれそれ！ 流石ヒキタニ君！ 話解るわ〜！」

俺の簡単な推測は当たり、戸部が喜んだ。

いや、ヒキタニって誰だよだから。

「……………それで球技大会が何なのかしら？ ヒキタニ君」

「……………んフツ……………」

雪ノ下さん解って言ってるよね？ 由比ヶ浜も今笑ったよね？

ちなみに球技大会とは体育の一貫で、2クラス混合で多数決で決めた球技を大会方式で争うというイベントだ。マラソン大会もやってそんなのまでやるとは狂気の沙汰だと思わないか？

嫌な事を思いだし、さつきとは違う重いため息が出そうになる。そんな俺の心情は構い無しに戸部の相談が続く。

「……その相談なんだけど、その、球技大会って、その、今の学年でやる数少ない見せ場ってか、イベントトってか、解るじゃん。こう、なんていうかさ？」

いやわかんねえよ。その行事が嫌で嫌で仕方ない俺にとってマジで興味無いイベントだし。

ついでにお前に興味が無い俺にはお前の言いたい事は解らん。本当今日は材木座の自作小説といい、興味が無いオンパレードだな。戸部の次の言葉を待つ。

「つまりそういう事なんよ」

……………。

は？ 説明終わり？ マジでわかんねえよ。

雪ノ下も同じくイラついたようで少し目が怖い。

「相談に乗って貰いたいなら、相談した相手に解るように言ってくれないかしら？」

「いや〜！ もう伝わるっしょ！ マジ恥ずかしくてヤバイ相談なんだけどさ！ みなまで言わせないで欲しいのよ！」

なんなのクイズなの？

なんか照れた態度も男にやられてもイライラするからやめてほしい。雪ノ下も俺と同じ気持ちのようだ。

「相談したいのは貴方でしょう戸部君。その相手に理解を求めたいならハッキリしなさい帰るわよ」

戸部がびくついたその後ろで由比ヶ浜がぼんつと手を叩く。

「解った！ 姫菜に球技大会でかっこ良い所見せたいって訳だね！」

「それぞれ！」

戸部が両手で由比ヶ浜を指差し笑う。

なにそれゲッツ？古いな。

後ろで雪ノ下は感心する。

「……よく解ったわね」

「え〜？ だつて前に来た相談の事もあるし今ので解るじゃんつ」

いやわかんねえよ。リア充は言葉が足りなくても何故か会話が成立する。もう通訳とか必要になつたじゃないの？俺はもうリア充語通訳雇わないといけない。

雪ノ下はこめかみを押さえている。

俺も同じポーズをとっていたのでポーズをさり気無く変えた。

ようやく相談内容が解つた所で、ようやく相談の中身を聞ける。戸部は少し寂しそうな顔で語りだした。

「……ほら、来年は違うクラスになるかも知れないからさ。……少ないチャンス、活かさなきゃって思つて……」

「……そうだよね」

どこか悲しそうな表情で戸部は前かがみに座り直し、腕を前に組む。その戸部の言葉に由比ヶ浜が何か共感していた。共に頷き、俯き寂しそうな顔を浮かべる。

しかし、俺はそこで疑問に思った事があった。

「それで、なんでそんな相談を俺達にするんだ？」

戸部が「ん？」とこちらを見る。

「そんな相談なら友達にでもすれば良いだろ。なのになんでわざわざ奉仕部まできて相談するんだ？前の事、忘れた訳じゃないだろ？」

俺の言葉に雪ノ下は顔を歪め、由比ヶ浜はハツとなる。

前の事、つまり修学旅行の事だ。あの時俺は戸部から相談を受け、そしてその告白を台無しにした。

戸部の決心を知らながらその告白を俺が奪った。にも関わらず何故また俺達に相談する？

正直、馬鹿なのかとすら思う。

しかし戸部はなんの抵抗も無く返答した。

「……前ここに来た時、三人とも本気で話を聞いてくれたじゃん。……相談した友達は、やっぱ俺にはマジな空気を求めて無いんだわ。だから茶化されるだけでさ」

笑顔で後頭部を右手でさすりながら笑う戸部。その笑顔はどこか寂しそうに見える。その様相になんとなく俺も戸部の気持ちが出来てきた。

確かにそうだろうな。

人は皆、その人間に一度キャラを付けると、それを演じる事を暗に強制する。

優秀な人間には優秀な立ち回りを。

ぼつちにはぼつちらしくわきまえた立ち回りを。

そして戸部はお調子者で馬鹿な立ち回りを周りから求められているのだろう。

だから何時時だか由比ヶ浜が言った、友達の間でマジな空気は作れない。

真面目な空気は楽しい空気を壊すから、マジになんなよと本当の気持ちを誤魔化す。そんな欺瞞に満ちた生活を強制される。

雪ノ下も由比ヶ浜も、思う所があるのか黙っていた。静かに戸部の次の言葉を待つ。



「……あの告白は、確かにひでえって思った。思ったけど、それまで俺の話を聞いてくれて、ダメ出ししてくれて、遠回しに援助してくれてたヒキタニ君は本当だしさ。隼人君も気まずそうに誤魔化しちゃう中そういう事してくれたのは……俺は嬉しかったんよ。……いや、それに海老名さん可愛いから、途中で好きになってもしやあないっしょ！」

「……」

戸部は俺の思惑も海老名の依頼も知らない。だから戸部には裏切り者のように見えても仕方ないのに、コイツはそう思っていないのだろうな。人懐っこい笑顔で仕方なさそうに笑う。

それが、少しだけあの時の後ろめたい気持ちを楽にさせてくれた。コイツの軽い人間性に気分を軽くして貰う日が来るとは夢にも思わなかった。

そのまま戸部は腕を組みながら頷き、そして口走る。

「それにさ！ 今はヒキタニ君彼女いるし、ライバルじゃ無くなったしさ！」

「……は!？」

戸部が何かを口走った瞬間、この部室には時空の歪みが生じたのか、時が止まったような感覚を覚えた。

え? 何それ怖い? そんな呪文聞いた時無い。俺は静かに震えていると、ガタツと椅子から立ち上がった由比ヶ浜が俺の胸ぐらを掴む。

「ヒッキー!! いつの間にそんな事になってたし!!! 私聞いてないよ!? 相手誰? いろはちゃんでしょ! いや、サキ? まさか……平塚先生なの!？」

「知らない知らない、何その人選。特になんで先生入ってんだよ」

ぶんぶんと俺を振り回し真っ赤な顔で俺を問い詰める。苦しい苦しい。

「いつの間にそんな事になったのか知らないけれど随分急なのね、私には関係の無い話だけだ……」

冷めた目で俺を見つめ、言い放つ雪ノ下。  
目が怖い気がしますよどこか。

「とべつち！ 相手誰だし！ 誰!？」

凄まじい剣幕で叫ぶ由比ヶ浜に心底ビビる戸部、ひいつ！という悲鳴と共に椅子から落ち、手を落ち着いてと伸ばす。

「い、いやいや誰って、ゆいつしよ?」

……。

「は?」

「は、はああああ!？」

わちやわちやと由比ヶ浜の落ち着きが無くなり急に手を離すから俺が地面に崩れ落ちる。

「ななな何言ってるの!!? ひ、ヒッキーとなんて、そそそそんな訳無いじゃん!」  
いやいやそんな否定しなくても。  
そんなに嫌なん? 傷つくわ。

「つ、付き合うとか、ま、まだだし! 戸部っちテキトーな事言うなし!」

由比ヶ浜の矛先が戸部に向かう。戸部は不味い事を言った自覚はあるようで焦って誤魔化しだした。

「いやだってクリスマスとかさく、……あ、解った雪ノ下さんの方か」

「……は?」

「おい馬鹿やめろ」

氷の刃のような目線でまばたきしつしない雪ノ下。その氷結の魔眼で戸部を射抜いていた。

「私がこの死んだ目をしたヒキガエル君と？ 冗談は彼の顔だけにしてくれないかしら  
本当笑えない冗談だわヒキガエル君と私が付き合うなんてどういう理論かしら何を  
もってそう思ったのかしら無責任な事を言わないでまったく困ったものね私と彼が付  
き合う？ 何を言ってるの第一クリスマスと一緒にいたから付き合ってるなんて貴方  
達はなぜそんな短絡的に考えるのかしらそういうなんでもかんでも恋愛に結び付ける  
のは本当にイライラするわまちがっている客観的から見ても彼と私は恋人になるなん  
て事無理だという事は伝わると思うのだけれど解るかしら解るわね戸部君」

凄いい剣幕に戸部があわわと後ずさる。

お前いくらなんでも嫌がり過ぎだろ。

泣くぞ。マジで。

「い、いやクリスマスと一緒にいたからクリスマスデートだとばかり！ ……あ、もしか  
してあの時一緒にいたザイモクザキ君の彼女？」

「あ？」

「ひ、ひ、ひ！」

「……………ンフツ……………」

二人からプレッシャーをかけられ、短い悲鳴を上げて体をさらに仰け反らせる戸部。やるな、学校で俺を吹かせた奴は多分お前が初めてだ。

その後凄まじい罵倒と怒りに戸部はしこたま攻められるが割愛。一言でまとめるなら酷かった。

—————

30分後。

ふう。

しばらく騒いだ後、既に冷めきっていた紅茶を飲みながら落ち着き、ため息をついた。どんだけ怒ってたんだ、戸部の元気が無くなっただろうが。コイツの場合これ位で調度

良いけど。

そして落ち着いた空気の中、雪ノ下が俺を一瞬見て、戸部に向き直り優しく呟いた。

「……今回の依頼、受けるわ」

その言葉に由比ヶ浜も頷き、俺も無言。

「マジで？」

「勿論だよ！ 頑張ろう！」

由比ヶ浜も微笑み、戸部に両手を掲げた。

雪ノ下は二人には聞こえない位の声でぼそりと言う。

「私達は……もうあの時とは違うもの」

……やり直しをするつもりは無いし、出来るとも思っていない。だが、確かに前のやり方とは違うもので、やってみようと思う。

そう心の中で意気込んでみる。

「それで、球技大会では何の競技をやるのかしら？」

そして戸部の相談の主題に入った。

「……バスケだ」

雪ノ下の質問に返してやる。なぜバスケになったかと言えば冬、雪が降っても出来て人気があった種目だったからだ。

「そう、チームは決まっているの？」

「うん！決まったよ！」

「それがまず問題なんよ」

戸部は項垂れながらあからさまに暗くなる。

俺は何故そうなったか解ってる。



「チームが、ヤバイんよ」

由比ヶ浜はムツとしたように戸部を見る。

「チームの何が問題なのかしら？」

「俺と材木座がいる」

雪ノ下の質問に変わりに答えてやった。

これがヤバイチームの理由だ。

その言葉に雪ノ下は眉をしかめる。

「隼人君達とあぶれちゃってさ。ハア、マジないわ」

そう、その戸部が組んだチームとは余り物チームだったのだ。

何故そんなチームになったのか、それはチーム決めの日に遡る。

俺は好きな奴でチーム組め、という

“俺生徒が楽しいようにしてやってるわ”

的な感じの満足げな体育教師によってぼっちにとつての悪魔の呪文を食らってしま  
い、いつものように材木座と集まっていた。(2クラス合同なので、交流も兼ねて2人、

3人づつという制約はあったが)

周りがどんどん楽しくチームを作る中、いつもなら二人いれば問題無かったのに五人で組まなくてはならない状況に、俺達はなすすべなく余っていた。二人でキョドる姿は相当キモかった事だろう。

それを見かねた天使、じゃなくて戸塚がチームに加わってくれた。救いの声に思わず俺と材木座は跪ひざまづいたまでである。

しかし無情にも三人では足りず、タイムアップとなつてしまった。

そこにチーム決めが決まらなかった俺達に、教師から他に組んで無い奴がいると告げられる。それが運悪くその日欠席していた男達、その一人が偶々風邪で欠席していた戸部であつた。

戸部のいつものメンバーは戸部が居なかつた事でスムーズにチームを組んだ葉山、大和、大岡、そしてもう一つのクラス二人で組んでいて見事に戸部はあぶれてしまったのだ。

こうしてリア充には辛い”余り物チーム”への所属が決まったのだつた。

「いやマジ余りチームとか無いわ、本当チームもう一回組み直しして欲しいわ……」

へいへいすみませんね。俺らなんかと一緒で。

大袈裟に落ち込む戸部にジトーつと目線を送っていると、そこで由比ヶ浜が立ち上がり戸部に怒鳴りだす。

「ねえとべつち！ さつきからヒツキーとかに失礼じゃない!？」

「あ、いやそういう意味じゃないって!」

戸部は弁解をするが解つてる。戸部に悪気はない。俺も戸部に興味無いしお互い様だから気にすんな。

しかしこのチーム決めは失敗だけではない。

「でもまあ葉山と違うチームになれたのは良いんじゃないかねえの」

「何故?」

訪ねる雪ノ下に答えてやる。

「いや簡単だろ。今回の目的は戸部をかつこよく目立たせる事だろ? 葉山の横に戸部を置いたら、どうよ? どう考えても引き立て役にしかなんねーだろ?」

「そうね。いつもの付け合わせにしか見えないわね」  
「二人も失礼だっ！」

実際事実だししようがないだろ。

戸部もあゝって納得してるし。

「それでもチームが簡単に負けていたら、それはそれで格好悪いのではないかしら。比企谷君はバスケット経験はあるの？」

「スラムダンクを全巻読んだ」

「漫画じゃん!？」

由比ヶ浜スラダンの凄さ知らないの？

スラムダンクマジ面白い。

何回も読んだ物だ、つまり何回も経験したような物だ。違うか。  
スラムダンクという単語に戸部は反応する。

「あゝ、アレ面白いよね。マジ三井カッケエ」

「は？ リョータだろ？ マジカッケエ」

「そのスラなんたらのはもう良いから、話を進めましょう」

雪ノ下がハアッと溜め息をつき制止する。

何？ お前もスラムダンク知らないの？ 漫画今度持ってきてやるから見とけよ。

「ちなみに別クラスは中2さんでしょ？ もう1人は誰なの？」

「あゝ、城山だ」

「あの柔道部の？」

その柔道部のだ。

あの件以来気まずいんだが、あいつもあの日休みで余ってしまったらしい。  
雪ノ下が考え込んだ後口を開く。

「人選は解ったわ。じゃあ、後はやる事をやるだけね」

「やる事？」

嫌な予感しかない。

俺はもう察しがついていた。

「あら戸塚君の時を忘れた？ 私のやる事は一つ、死ぬ迄走らせて死ぬ迄練習、よ」

戸部と俺はゲツと声をハモらせた。

前章 特訓は何故こんなに辛いのか。

その2 特訓は辛く、やはり辛い。

学校の体育の時間。

この日は球技大会に向けて、チームごとのバスケの練習にあてられた。チーム毎に別れて練習を始め、今は俺達も円を描くように広がりパスの練習をしている。

……。

シュっ……パシッ。

……。

周りはワイワイと楽しそうにパス練習をする中、我がチームはとても静かだった。寒

い体育館が更に寒く感じるような感覚でランダムにパスを出していく。  
戸部が気まずそうに話しました。

「……いや、今日も寒いっしょ！」

「……そうだな」

「うむ」

「うん」

……。

「い、いや、マジ寒いわ」

会話が無くもくもくとパスが回される状況に耐え兼ね、頑張つて会話を試みようとする気や気温の話題を戸部がふつて四回目、チームの城山も材木座も戸塚も一言しか返せずにいる。

戸部はその様子にまた焦つたように会話を試みた。



俺はそんな戸部を気にせず葉山達のチームを観察していた。

葉山達は俺達とは違い、大和も大岡も、良く知らない別クラスの、えくと、A君B君も楽しそうに話をしながらパスを回している。

「でさ〜！　そこでつまらないエラーしちゃったから皆からブーイングの嵐でマジやばかったんだよね！」

「ああ、そういうのヤバイよな」

「でも最終的に試合は勝ったんだろ？　ならよかったじゃないか」

ヘラヘラと話ながらパスを回す彼らは話ながらもボールが回る速度が速く、その様子から既にレベルが高いのがうかがえる。

パスする相手では無く、話をする相手に顔を向けているのにもかかわらずパスはしっかりと相手の胸元に飛んでいき、出された方もパスをしっかりと受け止めていた。

比べてこちらのチームはどうだろうか。

「メテオ・ドライブ・スロー!!」

「あ、おっとと！」

材木座の無駄に力の入った暴投に、戸部は頑張つて手を伸ばすもボールはあさつての方向に飛んでいった。

「ふふふつ、私の必殺のパスは何人にも止められん」

いやパスは取れなきやダメだろ。

偉そうにふんぞり返る材木座をジトリと見つめ、ため息をひとつ。

このように、俺達はパス回しが五回も続かないのだ。ついでに会話のキャッチボールも続かない。

チームワークも寄せ集めだけあつてバラバラだった。順番通りに決まった相手にしかパスを回せないのだった。

ふと目を上げると城山と目が合う。すると城山は何も言わず目を反らしてしまった。……あの件以来城山とは話をしていない。

先輩との約束だつてある。進んで話をする相手では無いし、別に構わないが。

こぼれ球を取りに行つた戸部が中々戻つてこない。なので目だけで探して見た所、戸部は葉山チームに話し掛けられ足を止めていた。

「お、戸部！ そっちはどうだよー！」

「いや、ぼちぼち？ そっちは楽しそうでマジうらやまだわ〜！」

「一緒に組めなくて悪かったな。チーム決めた時、同じクラスは三人迄って知らなくてさ。わざわざ解散という訳にもいなくて。次は、一緒にやろう」

「そうだな」

「いや、しようがないっしょ。休んでたのは俺だし。例えチームが違っても、心はいつも一つだぜっ！」

「うわクサッ！」

ワハハハッと笑いあう奴等。青春してるね〜。

戸部が俺達の視線に気付きやべっといった感じに走ってくる。その時葉山がこちらを見ていて、爽やかに手を挙げてきた。俺も手を軽くあげ答えてやると再び盛り上がり無しの練習に戻るのだった。

パス練習が終わり、それぞれドリブル組とシュート組で別れて練習をしている。

俺もドリブルしながらゆっくり走っていると由比ヶ浜が歩み寄ってきた。

「ヒツキー、ドリブル超上手いじゃん！ 経験者みたいだよ！」

由比ヶ浜の讚美に少しむずがゆくなりながら何故ドリブルが得意かを教えてやる。

「中学校の時からパスの相手やらしてくれる奴がいなくなてな。一人で立つてると教師が比企谷と誰か組んであげなさ〜い、と非常に惨めになる事をクラスの皆に言われる。だから一人で出来るドリブルを頑張ってる風に練習して、あえて一人でやってるオーラを出して対策をしていたら、ドリブルだけは上手くなつてな」

由比ヶ浜がハハッと苦笑いで返す。その後励ますかのように元気な声で笑いかけてくれた。

「で、でもドリブル出来るって事はボール運びとかで大活躍じゃん！ ヒツキー凄いね！」

ふっ……甘い、甘いな。

「ドリブルは出来ても、相手がいなかったから誰かを抜くなんて練習、まるでやった事が無いんだ。さらにパスもあまりした事がない。つまり、ボール運びすら出来ないな」

「え、ええと」

「さらにいえばぼっちが体育館に数個しかないゴールを使つてたらひそひそ文句言われるだろ？さらにフォームがキモいとか笑われる始末だ。だからシュートも出来ない。唯一出来るのは全員参加の試合に出て、せめて下手な所を見られないように目立たないよう隅で立つてて、逆に目立つちやうぐらいかな」

そんなもつてバスケット部でも無い意識高い系男子に、ちゃんとやれよと怒られる迄ある。

「……なんかごめん」

謝らないでくれよ。むしろ笑つてくれ。

……でもまあ案外このチームは悪く無い。

ガンっ！

ゴールの方を見るとリングにボールを叩き込み騒ぐ男が一人。戸部がリングにぶら下がりながら戸塚にVサインを出す。

「やっべ、ダンクとか出来ると思わなかったわ〜！今の凄くね？」

「うん、凄いね！僕ゴールに手すら届かないよ！」

戸部は運動部だけあって、能力が高かった。伊達にトップカーブな訳ではない。葉山が凄すぎるだけで、あいつも運動だけは出来るんだ。

戸塚だつてテニス部部长だ。やはり動きは軽い。ドリブルにパス、シュートまでそつなくこなしていた。

そしてパス練を終えて離れていった城山へと視線を移す。そこでは城山がゴール下でシュートの練習をしていた。

そこにボールを持って余所見をして歩いていた大岡がドンと城山にぶつかり尻餅をつく。

「あ、悪い」

倒れた大岡に手を伸ばし軽々しくと立ち上がらせる城山。

柔道部だけあって、体格も筋力も凄く、当たり負けをしない優れた肉体を持っている。こうしてみれば余り物チームは悪く無い、風邪休みのお陰で集まった、ポテンシャル事態は高いチームなんだ。

勝ちを十分狙いにいけるだけのものはあると、思う。そんな事を思案していると、クラスの女子がわつと沸いた。

その騒ぎの中心は葉山だった。

さつき戸部がダंक決めたのに騒がれなかったにも関わらず、葉山がシュートを決め、途端歓声が沸き上がっていた。

「というかあいつ3P迄来んのかよ……。」

「いや、隼人君マジ半端無いわ〜！ 今の軽く5点位入るつしよ〜！」

「いやいやそんなシュート無いって」

葉山に犬みたいについていきやべえやべえ言う戸部。凄く嬉しそうに笑っていた。

「マジかなわないわ〜！隼人君マジ超人つしよ〜！」

……。

その様子を遠目で眺めながら、俺は不安がよぎる。確かに葉山は凄い。凄いんだが、今俺が感じた問題はそこでは無かった。

「いや、やっぱり隼人君すごいね〜。とべっちだって凄いんだけどね」

ワイワイはしゃぐ葉山達の姿を見て、俺は不安を抱いてしまった。

—————

日曜日の朝、比企谷家にて

日曜日の朝は最高だ。

起きたらヒーロータイムから視始めてプリキュア見て、また二度寝してとダラダラ  
ゴールデンタイムを過ごすのは他では得難い安らぎがある。

しかし、今はそのゴールデンタイムを奪われてしまっていた。

戸部が奉仕部に来てからというもの、暇を見てはバスケの練習をするようになってしまっただ。そして休日である今日もこうして朝から練習という文化部でありながら、休日練習が発生してしまった。家の玄関で靴ひもを結ぶ為に玄関に座ったら腰が上



らなくなってしまう。

マジで、マジ行きたくねえ……。

本当何回サボってしまったかと思っただかわからない。しかしそれを雪ノ下は絶対に許さないだろう。罵倒される自分を想像してハア〜と大きな溜め息をつく。

すると背後からトントントツと階段を下りる音が聞こえてきた。振り向くと我が妹小町と目があう。

「……なに、でかけんの？」

勉強疲れか覇気のない顔でたずねてきた。

「ああ。休日の朝から外でバスケという、とても健康的な生活をおくろうと思ってる」

あえて前向きに言う事で、小町から讚美なりちよつとした激励を受けモチベーションの回復をはかろうと試みる。

兄という物は単純だ。妹の簡単な激励で頑張ってしまう物なのだ。

「ふうん」

しかし妹から返ってきたのはいつものポイントとかの余裕を一切感じられない、たんたんとした一言だった。

その余裕の無い様子に逆に激励してあげたくなっちゃった。

最近余裕マジ無さすぎでしょう？

小町はそのままリビングに入っていく、俺も観念して立ち上がりドアを開く。

「お兄ちゃん」

リビングから顔だけ出した小町に呼び掛けられ、顔だけそちらに向けてやる。

「帰りになんか甘いもの欲しい」

……へいへい。

可愛い妹の為買ってきてあげましょう。

手で了解を合図すると小町は小悪魔っぽく微笑み、一言“頑張つてね”と声をかけリビングに入っていった。

兄という物は単純だ。妹の簡単な激励で頑張ってしまう物なのだ。少しだけ、少しだけ自転車をこぐ足が軽くなった気がした。

—————

市が運営する体育館に集まり、俺達はバスケットを練習していた。

この体育館は雪ノ下が調整してくれたお陰で球技大会までの期間しつかり練習出来る場所として確保出来ていた。

いや本当助かるわ〜（白目）

その雪ノ下を監督とし、俺と戸部はボールをドリブルしながらのシャトルランをやらされていた。

「ひ、ひいい。も、もう駄目だ……」

本日何回目かもわからない弱音を吐く。

その弱音に雪ノ下は冷たくいい放った。

「本当に駄目ならそんな事も言えなくなるのよ。つまりまだ余裕があるみたいね比企谷君。1往復追加よ」

ひいひい！ と戸部と二人で声をあげる。

雪ノ下から出されるメニューは確かに俺らが出来る範囲で調整されているし、水分補給の為にスポーツドリンクや足を冷やす氷等、雪ノ下と由比ヶ浜で用意してくれている。

さらにいえばずっと由比ヶ浜が頑張れ〜と応援してくれている。女の子に応援されるなんて男にとっては嬉しい事だろう。でもどんなに環境が整つていようとキツい事には変わらない。

逃げたい、楽したい、休みたい。

シャトルランを終え地面に転がる。

俺も戸部も息切れしながら天井を見上げた。

「いや、マジ雪ノ下さん厳しいっしょ！ 部活よりキツいんだけどー！」

「格好良い所を見せる為には他の人より努力しなくてはならないのは当たり前でしょう。これでも貴方は部活もあると遠慮している方なのよ？」

雪ノ下の言う通り戸部は本来の部活に参加をした上で雪ノ下の強化訓練に参加している。

両方を両立するなんてすごいなー。

マジ片方しか参加してない俺がこんなへばってるのにこう軽口叩けるとかマジ凄と思う。由比ヶ浜からタオルが手渡され、汗をぬぐう。

「でもヒツキーもちゃんと着いてって凄いじゃん！」

「そうね。戸部君が部活に出ている間の個人レッスンも受けているし、貴方にしては真面目にやっている方じゃないかしら」

自転車で毎日通学してたお陰で運動不足にはなかって無かったからかな、なんとか練習にはついていってると思う。マジ逃げたくて逃げたくて仕方ないけど。

しかし、俺だって前の件をなんとも思っただけ無印じゃない。今回位少しだけ協力してやらん事も無いってだけだ。少しでも決意を胸に秘め、俺は息を大きく吐いた。

「さて、休憩は終わりね。次はパス練習に移るわよ」

やっぱり止めた。もう無理、逃げる。

少しの決意なのであつという間に吹き飛んだ。マジで練習厳しすぎでしょう？  
ヨロヨロと出口に這っていく俺。

速攻で決意を捨てる、そんな俺に優しい手が差しのべられた。

「大丈夫？八幡……」

……あれ？疲れすぎて幻覚かな？天使が見える。

入口付近までこそそこそ這って逃げていた俺の目の前に、入口から漏れた光を背にした  
大天使が屈んでいた。

「あ、さいちゃん！来てくれたんだ！」

「うん。部活で遅くなっちゃってゴメンね？」

そこに現れたのは、芸術品のような愛らしい大天使トツカエル、もとい戸塚だった。  
コートの下はジャージを着込んでいてすぐに運動が出きる体勢。喜び歩み寄ってきた  
由比ヶ浜に小首をかしげ手を合わせた。

「ううん！ 協力嬉しいよ！」

「彼は、貴女が呼んだのかしら？ 由比ヶ浜さん……」

「うん！ 出来るだけ本番のチームで集まってチームワークとか身につけた方が良いと思ってる！」

戸塚の登場に目を丸くしていた雪ノ下と戸部が戸塚によつていく。戸部は戸塚の手を取りブンブンと上下させた。

「マジ？ 戸塚付き合ってくれるの？ マジ優しいわ〜！」

おい戸部、戸塚に付き合うとか軽々しく言うんじゃねえ。シバくぞ。

色々な気持ちを込めた瞳で戸部の後頭部に念を送る。

「僕の為にもなる事だし、全然大丈夫だよ♪ 僕も前、奉仕部の皆に鍛えて貰った事あるしね。戸部君、八幡！ 頑張つて球技大会勝とうね？」

両手でガッツポーズを取り前かがみになるその姿に、俺は体の疲れやら陰鬱な気持ちやらが一気に消し飛んでしまった。やべえ、逃げたくて仕方ない練習だったのに、今な

ら頑張れる気がするぜ！ トツカ・セラピー、マジ効果的だわ。

「いやマジチームワーク良いんでないの？ いける気してきたわマジで！」

「チームワークと言うなら他の人も全員揃えばもつと効果的なんだろうけど……」

「でも誰も城山君の連絡先知らないし、そんなに親しい訳でも無いしね……。そういや中2さんは？」

「あいつは声かけたけど、執筆が忙しいって断られた」

由比ヶ浜が「えく！」とガツカリしている。

しかしまあ、たかが1球技大会で休み迄練習を強要するのは違うと思うし、こればかりは材木座は悪く無い。由比ヶ浜もそれを解っているからそれ以上なにも言わない。

「……でも皆マジでありがとね。こんな事に付き合わしちゃって」

襟足をかきながら戸部が言う。

「いいえ。奉仕部がそういう活動をする部活というだけよ。貴方達が休日に他校と練習試合をするのと同じだわ」

「それに友達じゃん！ 手伝うのは当たり前だよ」



二人は笑顔で答えた。

俺も口にはしないが雪ノ下の意見には同意見。面倒でかつたるいが、これが依頼なんだ。別に文句を言うつもりは無い。何これ俺社畜候補すぎ。確実に親父の血を引いてる。

戸部が本当ありがたいわ〜と照れながらバスケットボールに走っていく。戸塚がそれを追いかけて二人でパス練習を開始した。

遠くでボールを回す二人を眺め、そして雪ノ下と由比ヶ浜は俺の周囲に円の形で寄ってきた。思案顔で雪ノ下が腕を組む。

「しかし、今回の球技大会で海老名さんへのアピール、うまくいくのかしら？ たかがバスケットボールの試合で活躍した位で、誰かの心を振り向かせる事が出来るとは思えないのだけれど……」

確かにな。しかも相手があの海老名だ。まあ、難しいだろうな。というか、無理だろ。脈があるならまだしも、相手はそういうのをひたすら避けている。そういった相手を一回のサプライズごときで振り向かせるなんて出来やしない。

「……多分とべつちも解つてると思うよ。でもさ、後少ししかチャンスは無いなら全力

で頑張らせてあげたいな……」

……。

なんだか、今回の戸部の依頼には思うことがあるのか寂しそうな顔をする事の多い由比ヶ浜の横顔が俺の視界に残る。

俺はなんだか、そんな由比ヶ浜の顔を見ていられなかったのか、つい先の話へとシフトさせる。

「……まあ、無理かどうかは戸部の問題だ。俺達はいいつの望むチャンスを作ってやる手伝いをすればいいだけだろ。いつも通りな」

二人がうんと頷き、俺もパス練習をしている戸塚達に向かい歩き始めた。

—————

平日 学校の教室内部。

場面は変わり、体育館の練習から次の日の休み時間の喧騒の中、俺はいつものように一人で頬杖をつき机に座る。

大きなあくびを手で隠し、目をこすった。

いや、やっぱ体が疲れてるわ……。

普段使わない筋肉を使ったから筋肉痛もするし、何より眠い。今日の今までの授業、殆ど落ちてしまっていた。

横目で戸部の方を見ると、やはり疲れているのか机で涎をたらしながら眠っていた。

きったねえな……。

戸塚の方を見たら戸塚も同様、こくりこくりと船を漕いでいる。するとぼたつと涎をこぼしそうになり、慌てて起きて恥ずかしそうに口を拭く。

何あれ可愛いな……。

教室の後ろの方ではいつも通り女王三浦が従者を侍らせてたたずんでいる。

ぐったりと寝ている戸部を見ながら、三浦は怪訝な顔をしていた。

「最近、戸部静かじゃない？　なんか殆ど寝てるしさ」

「何か疲れてるみたいだよ？　やっぱ戸部が大人しいと寂しいな」

葉山の言葉にグフツと海老名が笑った。

しかし話題をふった三浦は既に興味を失っており、再び携帯に目を戻す。「いや、静かで良いんじゃない？ 戸部は少し元気無い位で調度良いって」

……どんまい戸部。

女王の興味はもはや携帯の画面に移っていた。戸部に対する興味なんてそんな物であつたようだ。ここまでそれなりに関係のある三浦ですらアレだ。俺の戸部への興味なんざ天井のシミの数のの方が気になるレベルだと解つていただけだろう。

女王の言葉にプツッと取り巻き達が笑い出す。

「ははっ確かに」

「ていうか涎きつたねえwww」

三浦の言葉に乗つかる大和と大岡に苦笑いの葉山。そして葉山は微笑ましそうに戸部を見ていた。そこで由比ヶ浜がフォローの為か余計な事をいい始める。

「でもとべっち最近頑張ってるんだよ！ 色々ときー！」

「……………」

「色々って何さ?」

三浦の問いかけにギクツと後ずさる由比ヶ浜。余計な情報は与えなくてくれよな。マジで。ただでさえ敵に回したくない連中なのに、戸部が練習、なんて知れたら”じゃあ、あーし等もどつかで遊びがてら練習しとく?”。みたいに戸部の練習にかこつけた集まる口実にされる。

そしてその口実のお遊び練習すらアイツ等にはさせたくない。

なんとか誤魔化してくれ、とテレパシーを込めた目線を送ると由比ヶ浜があゝつ、とか言っている。あ、コレ駄目っぽい。

しかし、なんと三浦は特に疑問に思うこと無く再び携帯に目を戻す。

「まあ良いけど。戸部だし」

「そうそう! とべつちだしっ!」

どんまい戸部。

お前のどうでも良さが功を制したぞ。ていうかお前ら友達ですよね?

もしかしたらマジで俺の方が戸部の事思ってるんじゃないや無かろうか、と戸部のただの知り合いである俺がそう思ってしまった。

その時、わははと笑うトップカーストの様子をぼんやりと眺めていると、急に海老名がこちらを見た。ビクツと目を反らそうとすると海老名は三浦達に「ちとゴメン」と一言断り、此方に歩いてくる。

え？ 何？

何見てんだコラ的なあれだったら嫌だな、なんて思っていると海老名が隣にきた。

「熱い視線を感じたよ〜？ もしかして隼人君に熱視線でも送ってたのかな？ そういう意味深な視線を送るなんて、腐適切だと思えます！」

止めてくれ……、と困っていると三浦達の方をチラツと確認すると、本題つといった風に口元に人差し指をおく。しゅつと唇を動かす動作に目を奪われた。

そういう男心をくすぐる動作止めてくれないですかね……？

「ヒキタニ君。また、私が困っちゃう事してるでしょ」  
背筋が寒くなるような声音で一言告げる。

でしょ。と確信している事を解らせ、尚且つ虚言や誤魔化しは言わないでという風に。

「優美子達もいるから静かくな声で目的だけ伝えるね？前と同じ、私は今の関係が大事な。だから、とべつちに変な事はさせないで。お願い」

先程とは違い、優しく、丁寧で理解を求めるような声音で、目を真つ直ぐ見ながら伝えられた。急な事に俺は少し戸惑うも海老名が言いたい事は解った。

……あれから戸部は戸部なりに沢山のアプローチをしていた。当然俺が知らない所でもあいつなりに努力していた事だろう。

だが、海老名の心を変えるには至っていなかった、という事だ。

戸部がいかにソレを求めた所で海老名はソレを拒絶している。

それより今が大事だから。

俺は脳裏に奉仕部と、そこで過ごす皆の事を思い浮かべる。

「……言いたい事は解った。今も変わらず戸部の気持ちより今の時間が大事って事だろ？ ……その気持ちは解る。だから、安心しろ。別に今回は戸部が海老名に気持ちを伝える事が依頼じゃない」

俺の返事に良かったという風に微笑み、仲間の元に振り向こうとする海老名。

……その背中に一言だけ言っておこう。

「だけど今回の活動をきっかけに、あんたが〃心変わり〃するかもしれないけどな」

圧倒的ドヤ顔で海老名を見上げてる。

海老名はキョトンとした顔で俺を見た。

……やらかした？



調子に乗りすぎた事を悔やみかける俺に対し、海老名はとても可愛らしい笑顔で笑いだす。

「あはははっ！ そうなったら仕方ないね！」

そして海老名は笑いながら三浦達仲間達の所に戻っていった。

……戸部は前回とは違う。

自分の気持ちを伝える事に全力なんじゃない、自分を好きになってももらう為に今回は頑張っている。だから、いつか海老名が今より戸部を選ばないなんて決まっている訳じゃない。

だから今度は、今回は戸部の依頼を達成するために動く。

変わらないとは限らないんだ。

一番大切にしたい物が。

三浦は「何話してたの？ めっちゃ笑ってたじゃん」と海老名を迎え入れると海老名は「面白い話」と笑いながらはぐらかしていた。

そしてロングホームルーム開始のチャイムが鳴ると共に俺はいつものようにだるそうに机に突っ伏す。

—————

その日の放課後、教室の黒板の前で俺達は立ち尽くす。

黒板には球技大会のトーナメント表。

そして俺達余り物チーム（いつの間にか

チーム名がチーム・ヒキタニ）の対戦相手に、最も俺が見たくない名前が書かれていた。

“ 葉山チーム ”

「……………」

「そういう事なんよ」

「マジかよ……………」

想定しうる、最悪の事態に俺は黒板に石化させられてしまった。

### その3 特訓は進み、チームは歩み出す。

市運営体育館。

「という訳で一回戦の相手は葉山チームとなった」

……………。

休日である今日、俺たちはまた練習の為に体育館に集まった。寒々しい体育館が、俺の発表をうけ静寂で包まれる。

「いや〜、まいったね（笑）」

「いや笑えないよとべっち……………」

ジト目で戸部を見る由比ヶ浜に続き俺もジト目。因みになぜこうなったのか、それは

戸部が原因である。

トーナメントで相手を決める際、本来ならばクジ引いた戸塚が見事シード権を獲得してたんだ。

しかし戸部の奴が元々葉山チームと当たった文化部チームに交換してくれないかと頼まれた。普通なら断る所だが、文化部チームが葉山チームと戦うのは無理と言い、仲良しで運動神経が良い戸部君ならと説得し、さらに嫌がるチーム相手するのも気が引けた葉山からも頼まれた物だから、戸部が笑顔で了解したのだった。

話を聞いた雪ノ下はあきれ顔で、由比ヶ浜も戸塚も苦笑いだった。

「相手チームの情報は何？ 葉山君以外の」

「え？ 大和と大岡と……」

戸部を制止し、俺から雪ノ下が欲している方の情報を伝える。

「ラグビー部の大和と野球部の大岡。後は別クラスでバレー部〇〇とサッカー部〇〇だ」

「運動部のエース級が集まったわね。他のチームとのパワーバランスは大丈夫なのかし

ら？」

「好きな奴で組め方式でやったんだ。上位カーストが固まるに決まってる」

現にチームによつては全員文化部とか酷い所もある。教師の気分のせいで憂うつなチームは多い事だろう。

その中で俺たちは運良く運動部が半数を占め、まだ幾分マシだったにも関わらず今回の対戦表によつて一気に不憫なチームへとなつてしまつた。しかも本来はその最悪は避けられていたにも関わらずだ。寝てしまつていた手前、俺からは文句は言えないが、なんで戸部、そんななんの特も無い条件飲み込んでしまつたし。お陰で俺たちのチームは一気に沈みきつた空気となつた。

「いやでもさ！　山王倒した湘北みたいに、最強のチーム倒したら超燃えね？」

暗くなる空気に耐えきれず立ち上がり発言する戸部。拳を振り上げ、俺たちの顔色を見渡した。

「いや、無理だろ……」

強い弱いもあるが、何より問題なのは絶対的なヒーローである葉山が相手という事。引き立て役というレベルじゃない。

葉山チームがシユートを決めれば喚声が上がリ俺達が決めれば悲鳴が上がる。

人気のある戸部や戸塚がいる以上ブーイング迄はいかないだろうがアウェイ感は凄まじいだろう。

「それにこっちはバスケ不得意な奴が二人もいるんだぞ。なあ材木座」

「ふむん。まずドリブルも出来ない……」

前回来なかったから、今回は声をかけてないのだがそしたら何故か来た材木座。

ジャージに指出しグローブ、ロングコートと謎な格好をしている。俺の言葉に腕を組んだままため息を一つ。

そんな時、的外れなフォローが入った。

「いやザイモクザキ君山王の河田弟みたいで強そうっしょー！」

「いや違うだろ」

「うむ、我は誰かといえは流川である」

「それもねーよ」

材木座すげえな。起きながら寝言が言えるんだ。

戸塚は俺たちの話に嬉しそうに入って来た。

「僕は赤木君が好きだな」

「戸塚、意外にチョイスが渋っ！」

「は？　ゴリ最高だろ。山王戦で昔思い出しながらチーム見て泣く所とかやべえよな戸塚！」

「俺は花道がボールの為に机に突っ込んだ時とかその後の根性とか胸アツだったわ」  
「だからスラなんたらの話はいいつて言ってるでしょう話を進めなさい」

でも戸塚もスラムダンク読むんだな、趣味合いますね！

新たな戸塚との共通点に思わずテンションが上がる。自分の大好きな漫画を気に



なるあの子が好きなんだなんて言ったら、それだけで物凄く嬉しいよね！

そんな風に幸せを感じていたのについて会議を忘れてしまった為、雪ノ下に怒られる。なんだよ、雪ノ下も読めば良いのに。

「……とりあえず、正面からいつでも勝てる訳が無いからな」

本題に戻した所で会議が進むはずもない。何故なら俺たちは作戦だなんだを立てれるレベルでは無いからだ。そうなるやれる事は決まってくる。

「……ひとまずやれる事をやりましょう。せつかく四人もいるのだからポジション分けをして、そのポジションでの練習。その後チームプレイの練習をやるわ」

そして対戦チームが決まったの会議はとりあえず保留とし、雪ノ下の指示で各人ポジション練習に入る。練習の振り分けは雪ノ下が各人の能力や自己申告で分けていく。

戸部には雪ノ下がマンツーマンで叩き込む。

運動神経だけは良いが、考えてのプレイが苦手だった戸部は意外にも吸収が良く、教

えれば教えただけ覚える。体で覚えるのは得意だとの事。ならばここは雪ノ下に一任した方が効率が良いだろう。

材木座には戸塚が付きドリブルから教えている。戸塚も部長として後輩に指導している為、初心者に教えるのに向いていた。

由比ヶ浜は皆のサポートの為、タオルや氷の準備を頑張っていてくれている。

そして俺は中途半端に知識とドリブル技術があつた為戸塚の指導対象から外れてしまい、誰かに教えるほど上手くも無かつた為、雪ノ下から渡された個別メニューをひたすらこなす事になった。

くそう……、材木座が羨ましい。

こんな事なら由比ヶ浜に自慢気にドリブルを見せるんじやなかつた。

仕方なく、1人で入りもしないシユート練習をしていた。これは学校では人目が気になつて出来ないからな。

「いや、意外に本気でやってるんですね」

そして特訓でもぼつちを發揮する俺の前に、何故かいる奴から感心の声があがる。

「それで、なんでお前は来たんだよ」

脇に座りながら冷やかしを入れる後輩に突っ込みをいれる。それを受けた後輩「一色いろは」はアハツと笑った。

可愛らしく暖かそうな運動に適した服装でゴール下に立っている。

「いや暇だったから奉仕部に顔出してみたら、由比ヶ浜先輩からなんか球技大会の練習やってるとか聞いたんで、先輩が練習とかマジウケる……、じゃなくて応援したくなっただけですよ」

「冷やかしじゃねえか」

練習を見られるのって、なんか凄く恥ずかしいんだぞ？ 相手が異性なら尚更だし、相手が一色となつてはさらに尚更だ。明日から何を弄られるか解つたものじゃない。

一色に呆れながらシュートをほおる。

ボールは宙を空振り、地面にバウンドした。

そのボールを、一色は何も言わずに受け取り、投げ返してくれた。……まあボール拾

いしてくれるんなら助かるけどさ。

手伝いをさり気なくしてくれる一色に意外に思いながらも練習を続行する。現に投げたボールを返してくれる人が居るだけでとても効率的に練習が出来た。

「にしてもなんでこんな練習してるんですか？たかが球技大会にこんな努力先輩らしくないと思うんですけど」

2球目を投げる。ボールは再びリングにかすりもせず地面にバウンドし、一色の方に飛んでいく。

「……依頼だ。それしか言えない。」

一色からボールを受けとり、3球目。

また外す。

「まあ戸部先輩がいる所見て、戸部先輩が海老名先輩にかっこ良い所見せたいつて所ですかね」

何お前エスパーなの？ 私エスパーですから！

一色からワンバウンドでボールを受けとる。

四球目。再び外れ一色の所に。

「当たりですか？ まあ戸部先輩アピリまくってますもんね。脈とか無さそうなの  
に」

正解、とか言う訳にはいかない。

しかし、やはり周りの目から見ても戸部がアピールしているのは解るのだろうな。

でも誰も応援はしてくれなかったのだろう。

葉山でさえ、海老名の事を考えて応援が出来ないんだから。

そうして考えてみると戸部も大変だな。

誰からもバカでお調子者な所だけしか求められないというのも。

再びボールは外れ一色がキャッチ。

「……さつきから先輩のボール入りませんね。もしかして私からパスされたいが為わざとボール取らせてますか？ やり方がコスイですごめんなさいまだ付き合えませんから今回は諦めて下さい」

流れるように俺をフツつてくれる一色。もう俺何回目か解らないなコイツにフラれた数……。

……しっかし本気でシュート、入らねえ。やってみて始めて解る三井や神の凄さ。

ただシュートしただけでもこんな難しいのに、激しい試合の中でシュートをバシバシ決めるって、凄すぎだろ。体力的な問題やら敵の妨害やらあるのに。

彼らの凄さを体感してしまい、感心してしまっていると、一色から俺のシュートについて指摘が入った。

「正直フォームとかマジキモいですよ。なんかビョーンって音とかしてそうでウケます。さっきから雪ノ下先輩見る度笑い堪えてますし」

なんだと……？

雪ノ下の方に目をやると何か？という風の顔をして、すぐ戸部の個人指導に戻っていった。

いや俺と目があつた時点でめっちゃこっち見てたって事じゃねえか。  
ゴールに目を戻すと一色がシュートを放つ。

一色の放つたボールはなんと一発でリングをくぐっていった。

なん……だと……？

「なんだ、簡単じゃないですか。あ、いや今はわざと外して難しくつとか言った方が先輩のポイント高いですかね？」

小町みたいな事言いやがって。

お前が俺のポイント稼いだって意味ねえだろ。

でも確かに今のはポイント下がったマジで。

俺の立場が無い。

一色の投げたボールを拾いに行くと一色は戸部の方を見ながら小さく溜め息をつく。

「まあ戸部先輩も良い人なんですけどね。恋愛対象にされにくい人ですよね」

耳だけ向けながら俺は再びボールをシュート放つ。

「戸部先輩、面白い人だっけ言う娘はいても好きだっけって人見た事無いですね。軽いし」

「まあ、そうだろうな。お前から見てもそんな感じか？」

「私ですか？ まあ戸部先輩の事は嫌いじゃないですよ。頼めば大体なんでもやってくれますし。良い人ですね」

お前それ〃都合が〃良い人じゃねえの？

それならお前の中で俺も良い人に分類されてそうで嫌だな。

「それに私の告白、手伝ってくれましたし、私個人としては力になってあげたいですけどね。結果が見えてても。」

「……わざわざ顔出したのはその為か？」

「……暇潰しですよ。ま、結局雪ノ下先輩が付きつきりで指導してるからいらなかったでしょうけど」

球技大会は学校行事だ。

なら生徒会だって少なからず仕事があるはずなのに、わざわざこうして練習に顔を出して手伝いをしてきている。

なんだコイツ、良い後輩じゃないか。

「……な、なんですかその温かい目。止めてください、そんな目で見られてもキモいだけ



ですよ。フォームと一緒に」

髪をクルクルさせながら目を反らす一色。

何そんなに俺のフォームキモい？

さつきから雪ノ下と由比ヶ浜の視線も気になるし、そんなにヤバイならシユートは出来ないマジで。

そんな話をしていると反対側のゴールから胸が熱くなる声の叫びが聞こえてきた。

「メテオ・ドライバー・シユートお！」

見ると戸塚と材木座がシユート練習をしている。あっちも苦戦してるみたいだな。

にしても材木座が技名叫ぶとなんか心地良いのがな……。あいつ本当声だけは良いな。胸をアツくさせる。

そして俺もまたシユートを放つが見事に外れてしまった。

「……マジ勝ち目が見えねえ」

思わずため息が出る。

大会当日、葉山チームの蹂躪シヨウが始まると思うと本当憂うつだ。

「まあいいんじゃないですか？ たかが球技大会、ですよ。」

そういい、俺から受け取ったボールで再びシュートを決める一色。

そうは言ってもな。確かに俺もそんな意識だったし、寧ろさつさと負けて終わりたいとすら思っていた。だが依頼として出されてしまったては、そんな風に適当には扱えない行事になってしまったんだ。本当、依頼じゃなかったら、学園の一イベントとしての参加だったらこんな頑張る必要なんて無いのに。

……ない、のに。

「……そうか」

俺は一色の言葉を受け、頭の中で愚痴っていて一つだけ、勝つ為に武器になりそうな物を見つけた気がした。

「どうしたんですか？先輩。一人でニヤニヤして。キモいですよりアルに」

「一色、ナイスアドバイスだぞ」

そういうと一色に微笑みかけた。

え？ え？ と一色がキョドっていたがほうっておいて、俺は策を練り始めた。

人が強敵を乗り越えるのはいつだって策略と決まっている。

俺達のチームの強みを並べる。

戸部や城山、戸塚という余り物チームにしては優秀な手札。

チームのブレイン兼監督に雪ノ下が付いた事。

由比ヶ浜や一色という優しいサポーターの存在。

そして最大の武器はこの“努力”だ。

いや努力って大切だわ。

勝つ為の意思って奴が強みだわ。

揃いつつある手札を使い、葉山たちでは出来ない策をぶつけてどこまでやれるか。

ヒーローに見せ付けてやろうと見付けた武器に思わず強気な態度になる。

そして俺は不適に笑いシュートを放ったのだった。

びよ〜ん。

「だからフォームキモいですって」

—————

それから試合迄一週間、暇を作り練習を重ねる俺達。

やっていたらやっていたなりに、それなりに上達をやっていった。

「戸部君、相手を抜く練習なのに相手に気を使いすぎではないかしら？ ファールするよりいいけど、それでは相手を抜けないわよ」

「い、いや雪ノ下さん相手に当たってくとかやばいっしょ！ 女の子相手にとか本気出すとか……」

バシッ。

「げっ！ ボールが……」

「そんな事は私を止めてから言いなさい。優しいのでは無くてそれではヘタレよ」

「……oh」

日曜日 体育の授業。

材木座とドリブル練習。

「スパイラル・ステップ！」

ドタドタっ！

「フハハッ！ どうだ！ 我の突撃を止められまい！」

自信まんまんでラグビーみたいにボールを抱え走る材木座。

「それトラベリングだから」

「トラベリング……？ 技名に頂きだな」

月曜日。

由比ヶ浜の所に休憩で集まる俺と戸部。

「やべ、飲み物切らした。ヒキタニ君それ一口頂戴♪」

両手を広げパタパタさせる戸部。

何その動き、ウザいな。

「嫌だよ、自分で買ってこい。なんでリア充は飲み物の回し飲みとか普通に出来るの？」

「いいでしょう！ 一口貰うね！」

「あ、テメツ……」

椅子に置いたドリンクケースを持ち上げ、飲み始める戸部。しかし“ウツ!”と目を広げ口を離した。

「甘っ!!!」

「ドリンクケースにMAXコーヒーは流石に無いよヒツキー……」

「あ? 疲労回復に良くてカフェインで頭もスッキリで、スポーツにめっちゃ向いてるっ  
ての」

マツカンの有用性が由比ヶ浜に伝わらず残念だ。

—————

火曜日

体力錬成中。

一息付く戸塚に一色と由比ヶ浜がドリンクやらタオルやら渡す。

「どうぞ、タオルです戸塚先輩」

「あ、ありがとう一色さん！」

首の回りを吹き、額にポンポンと汗を拭き取りふうつと艶やかな息をつく。

その姿を真剣な表情で見つめる一色と由比ヶ浜。

「……え、ええと。どうしたの？ 一色さん」

「戸塚先輩って、動作一つ一つが本当可愛いですよ……。見習います」

「うん。マジ女子力高いよね。しかも自然体でやるから凄いなだよ」

「えく!？」

—————  
水曜日の体育館。

雪ノ下の指導を受ける俺たち。

「比企谷君。パスを出す時はしっかりと相手を見て出さない。だから変な所に飛ぶの

よ」



「いや仙道みたいにフェイントをだな……」

「仙道君並みの技術が貴方にあつたらやりなさい。貴方ごときが仙道君のマネとはおこがましいわよ」

空中のボールを弾く戸部。

「ゴリ直伝！ ハエタタキ!!」

「戸部君、今のはキャッチ出来たのではないの？ 出来るならしつかりボールを保持する。出来ないなら可能なかぎり味方のいる方に飛ばしなさい。赤木君ならそうしてるわ。赤木君の台詞を借りるなら、それが出来ない以上ハエタタキをやるには10年早いわ」

練習中不安になる戸塚。

「僕、ヒヨロヒヨロしてるから役に立てるか不安だなあ」

「何を言っているのかしら。かの強豪の海南では才能も無くヒヨロヒヨロしてた神くんは内に秘めた闘志と練習量で見事レギュラーを取ったのよ？ 見習いなさい」

「……雪ノ下、スラダン読んだな」

「うむ、あれはかなりハマってるな」

「正直俺らより詳しいよね、雪ノ下さん」

「ゆきのんが何言ってるかわかんないよ……」

木曜日

練習の帰り コンビニの前で男だけで話。

「ヒキタニ君さ、俺の事たまにリア充言うけど、ヒキタニ君はもつとリア充してるよね」  
「は？ 何いってんだ俺位ぼっちを極めた奴いないっての」

その一言に真顔の材木座。

「爆発しろ」

「え？」

「爆発しろ」

—————

金曜日

再び体育館

指導の合間の雪ノ下とサポーターの一角。

「ふう……」

「ゆきのんお疲れ様！ スポドリいる？」

由比ヶ浜から差し出されたドリンクケースを受け取り微笑み返す雪ノ下。

「ありがとう由比ヶ浜さん。それにしても、彼等も中々上達したわね」

「先輩のシユートは相変わらずキモいですけどね」

「……ンフツ……」

「……!?!」

雪ノ下が急に顔を反らし顔を隠した。

「ゆ、ゆきのん今笑った？」

「何を言っているのかしら由比ヶ浜さん。私がそんな事でヘラヘラする訳が無いでしょうっ。」

そんな事を言う雪ノ下にジト目を送る一色。

ニヤリと悪そうな顔を見ると、ボールを拾い雪ノ下の前で止まる。

「モノマネ、先輩のシユート」

びよ〜ん。

「ソフツ！ ちょよ、やめ、止めてよ一色さん！ ウフフツ！」

「ゆきのんが笑ってる！ 珍しい！」

「……なんか女子達楽しそうっしょ」

「ガールズトークかな？ 微笑ましいね♪」

「……なんか馬鹿にされてる気がする。」

—————

土曜日、練習後。

皆で体育館前の自販機のジュースで一服。

「んでき、ヒキタニ君って結局誰が好きなん？」

「は？ 何言ってるんだよ」

ワクワクしながら戸部が良く解らない質問をしてくる。

由比ヶ浜↑耳がダンボ

雪ノ下 そわそわ。

一色 じいー。

「いやヒキタニ君誤魔化すの無いっしょ！ 俺も言ったんだからさ！」

「アホか。お前は聞いてないけど言ってきたんだらうが」

「んじゃ今いる中で誰が一番可愛い？ それ位教えてよ〜！」

「戸塚」

「……………え？」

「え？」

「……………」

「もう八幡！」

「……女子が怖いのである」

—————

日曜日。

数々の練習を乗り越え、明日俺達は試合の日を迎える。

今日の練習は明日に備え、最後の調整のみという事で軽めに終わった。そして解散となる予定だったが由比ヶ浜が明日の健闘を祈願してお昼は皆で食べようという提案を出してきた。明日の為にというなら早く帰って休みたかったがなんと戸部が奢るといので喜んで参加させて貰う事にした。

ノリで物を言う物じゃ無いぞ？

もう撤回はさせないけどな。

「んじや何食べに行く？ ステーキ？」

「せんぱい！ 高い所行きましよ！ 高い所！」

「俺の胃袋は宇宙だ……」

奢りという単語に胸を踊らせる俺一色材木座。盛り上がりながら店を探す。

「ほ、ほどほどにしてちょ……」

「み、皆容赦無いね……」

「良い機会だから戸部君はノリで余計な事を言うのを気をつけるようにしなさい」

色々意見が飛び交ったが最終的に天使、戸塚により吉○屋の牛丼（並）で手をうつ事に。

しかし○野屋は大人数で話ながらとなると難しい。だからテイクアウトして部室で食べる事になった。流石に牛丼（並）だけでパーティだとアレなので女子組は近くのコンビニで何か買って来ると別れる。男四人、牛丼を買って合流場所で待機していると戸



部が襟足をいじりながら材木座に話かけた。

「ザイモクザキ君にはまだお礼言つてなかったよね。なんてか、あんがとね？　こんな事付き合まして」

「う、うぬ？」

戸惑う材木座。上位カーストの人間にお礼言われると何故か焦るよな。そしてなぜか嬉しい気持ちがかいものだ。

だが、確かに材木座がこんな訓練に付き合うとか意外だったな。

「最初来なかったのに、何故かあれから休まず来たよな。材木座にしては真面目に」  
「う、うむ。最初言われた時は正直面倒で休日バスケットとか意味解らんと思わなかったのだから。そんなのに参加するとかバカなの？　と八幡を見下したまである。」

お前……。しかも俺の口癖迄真似しやがって。

「正直面倒で堪らなかったのだが……、戸部某は私の小説を誉めてくれた。今まで、クラスの人気者どもは私の小説を奪い見ては皆の笑い者にして、黒板に張り出された時はリアル少し泣いた。正直戸部某に見られた時も、同じ事をする輩と決めつけていたのだが、戸部某は、励ましてくれた。その事を思い出したら何やら参加しない事に罪悪感が出てきてな……」

「材木座君……」

コイツ正直だな。最初は忙しかったけどお前の為に参加した、とても言っておけば良いのに。

協力を仰がれて、何も抵抗も無く力を貸す奴もいる。それはとても良い奴なのだろうな。だが、材木座みたいに嫌で嫌で、正直一回サボって、でもそれでも協力を名乗り出るのも、それも〴〵本当の優しさ〴〵なのだと思う。

「ザイモクザキ君……マジありがとおお！」

戸部が材木座に飛び付きハグをした。

「うむ、戸部某い！」

ガシツ！

うくん、由比ヶ浜と雪ノ下がやるとユリユリしくて見目麗しいが、コイツ等がやるとキツツイ。

正直、ドン引き。

「よっしや、ヒキタニ君！ 戸塚！ カモオン！」

……………。

すると戸部が片腕で材木座を抱えながら俺達に手を広げた。

いやいやいやいやキツツイわマジで。

何そこに飛び込めつてののか？冗談でもキツツイつて。すでに周囲の視線が痛々しい。

「うん！ 戸部君！ 材木座君！」

まさかの戸塚が戸部達に飛び込む。

戸塚あ！ そんな、NTRなのかこれは！

戸塚が戸部と肩を組み、俺に手を広げ、そして手を伸ばしながら、少し照れたように微笑みかけてきた。

「八幡……きてて？」

その時、俺の中の何かがガシャンと崩れ落ちる。

「行くぞお……！」

ガシッ!

そして男四人、円を抱き合った。

チームヒキタニイ! イエイイエイ!

イエエエエ!!!

俺たちは輪になった。そして、外見だけでも心を一つにしていた。こんな事もたまには悪く無いな! (隣の戸塚を眺めながら)

そしてその男達の包容を遠目で見つめて絶句している三人の女の子がいる事に俺達はまだまだ気付いてはいなかった。

□ ↑雪ノ下

□ ↑由比ヶ浜

□ うっわあ……」 ↑ドン引き一色

—————

部室

コンビニで買ってきた菓子や飲み物、そして戸部の奢りの牛丼（並）を並べ、食事会が始まった。

雪ノ下が手を合わせるとそれを見た由比ヶ浜も続いて手を合わせる。

「じゃとべつち！ 頂きます！」

「頂きます」

「おう！ 遠慮しないで食べてよ！」

胸を叩き誇らしげにする戸部。

「牛丼（並）で遠慮も無いけどな（笑）」

「我足りないから別で特盛も頼んだ。フハハッ」

各人牛丼を口に入れる。

すると雪ノ下が目を見開き感嘆の声を上げた。

「……美味しい」

「ゆきのん吉野〇初めて?」

「ええ。普段は行く事が無いから」

まあ、確かにお前が牛丼屋に入って行く姿はちよつと想像出来ないな。  
すると戸部が自慢気にする。お前が凄い訳じゃないけどな。

「吉〇屋はやばいっしょ! 美味くて早いし安いしで!」

「まあデートとかで言われたらヒキますけどね。先輩とかやりそうだから言つときま  
す」

「なんでだよ〇野屋最高だろ?」

一色の心無い突っ込みに心からの疑問を返す。

由比ヶ浜がハハッと苦笑い。

「その、美味しい、安いは解るのだけれど、早いとは何かしら？」

雪ノ下の疑問に戸塚が笑顔で返事をする。

「注文してから来る迄だよ！ 大体3分かからない位だよね♪」

「私は複数頼むからもつとかかるが、五分はかかった事無いな」

戸塚と材木座の言葉に雪ノ下が驚いた。

「そんなに？ スタッフが優秀なのかしら？ こんなに美味しくってそんなに早くて安いなんて……にわかには信じられないわね」

「ゆ、ゆきのん凄い食い付きだね」

「私は松〇派ですけどねー」

「吉野〇食ってる時に別の派閥の名前出すとか……」

一色をジト目で見る。

そうして皆で〇野屋談義をしながら食事をしていると、雪ノ下が箸を置き、ゆつくりと話を始めた。

「……今回の依頼は、新しい事を発見する事が多かったわ。この吉野〇の味、スポーツのマネジメント、スラムダンクの素晴らしさ」

皆も雪ノ下の話に皆耳を傾ける。

一色だけ「スラムダンク？」と反応していた。

おいおい一番大事な所はそこだからな。

「そして人にスポーツを教え、共にやる楽しさを知った。やって、良かったと思っているわ。皆、練習お疲れ様」

雪ノ下が軽く頭を下げると俺達も下げる。

流石部長、まとめ上手っすね。

雪ノ下のまとめに戸部が拍手を初め、続いて由比ヶ浜が。しだいに皆で拍手をしていた。

今まできつかったけど、こうしていると少しやって良かったと思えるから不思議だな。

大人が宴会やるのはこうやって纏めたいからなのかもしれないな。



「まだ終わって無いですけどね。海老名先輩に格好良い所見せれるといいですね」  
「それな。いや、マジ明日緊張するわ」

戸部がアメリカドラマみたいに手を広げ、首をふる。戸塚が戸部を可愛く、可愛く励ます。

「大丈夫だよ！こんなに練習したんだから、明日は良い結果が出るよ！」

「そうとは限らないわ。それに結果を出しても海老名さんに何も届かないかもしれないもの」

雪ノ下の言う通り、運動会で活躍してモテるのはせいぜい小学校迄だ。だが戸部は決意したように立ち上がる。

「……確かに、海老名さんは何も思わないかもだけど、行動しなきゃそれも変わらないままだし、諦める理由にはなんないっしょ！」

「とべっち！ とべっちにしては良い事言った！ そうだよね！たとえどんなに反応無かったって、止まってなんかいられないよね！」

だべ？だべ？と返し調子に乗る戸部。

ドや顔やめろ。

……嫌な予感が甦る。

その予感を確かめる為、一つ質問をしておくか。

「戸部」

戸部は今牛丼を食い終えたようで空を置いた。  
ん？　ときよとんとする戸部翔。

「明日は葉山を止めれるか？」

俺からの言葉に戸部は固まった。

菓子を口に運ぶ手が止まる。

「お、俺？　いや、隼人君はいくらなんでも無理っしょ！」

いやいや！　と冗談でも言われたような態度で手を振る戸部。その姿に雪ノ下がた

め息ながらに釘を刺した。

「何を言っているのかしら。城山君は見てないから解らないけど、今チーム一番の戦力は貴方なのだから、守備になったら葉山君に当たるに決まってるでしょう」

「い、いや、でも隼人君は……」

雪ノ下から言われた事で、どうやら冗談の類ではないことをようやく察した戸部は無理アピールを始める。はつきり無理とは言わず、態度でアピールを。

この反応は予想通りだ。

だが色んな意味で、お前は葉山とぶつからなければならぬ。ここで下がられちゃ困るんだよ。

「確かに葉山君は凄いいけど、戸部君だって負けてないよ！」

「そうだよ！ あんなにめっちゃ頑張ったんだから出来るよ！」

皆から励まされる戸部。しかし顔色は変わらずいや、いや、と唸り続ける。

その戸部に俺からも大きい釘を刺しておいた。

「今のうちに負けてもいいように、そうやって予防線はるな」

「うっ……。いやヒキタニ君厳しいわ」

「大丈夫よ。貴方、誰に鍛えて貰ったと思ってるの？ちゃんと教えた通りやれば、それなりに効果はあるはずだわ」

師匠雪ノ下に言われ、困ったように苦笑いを浮かべた後、やむなく戸部は頷いた。

「……よっしゃ！了解、やるだけやってやるっしょ！」

そういうと再び立ち上がりお茶を一气する。

宴会じゃねえんだからそのノリやめろ。

……しかし、まあ。戸部の葉山に対する反応でなんとなく俺の嫌な予感当たる事を確信した。

「……浮かない顔ね」

皆が騒ぐ中、雪ノ下と由比ヶ浜が心配そうに見ていた。

「……まあな。どうやら一番の敵は葉山じゃないみたいだね」

「それってどういう事？」

「……ま、もしもの時はなんとかするさ」

俺の言葉に由比ヶ浜も雪ノ下も表情を堅くする。

「……なんとかかって、どうするの？」

「いつも通り、最低の方法だ」

心配そうな由比ヶ浜に苦笑いで笑い返す。

そして雪ノ下は厳しい眼差しで俺を見つめていた。

「……また貴方はあのようなり方をするつもり？それではまた……」  
「大丈夫だろ。今回はお前らも、あいつ等もいるしな……」

今回は一人じゃない。雪ノ下や由比ヶ浜、一色やチームメイトまでいる。こんなに作業を分担出来る奴がいるんなら、俺のやり方だつてフォローは効くだろ。

……などと考えていると、俺は自分が口にした言葉に違和感を覚えた。俺、今何を言った？

おそるおそる、二人を見ると二人とも目を丸くして俺を見つめていた。

「ま、待て、今の無し……」

みるみる顔が熱くなるのを感じる。二人から目を逸らして腕を突き出した。

「ヒッキーらしくない！ アハハっ！」

俺の誤魔化しも聞かず、元気一杯に笑う由比ヶ浜にクスクス笑う雪ノ下。

ぐおおお……。また俺の知らない黒歴史が刻まれた！

見れば他の奴等もニヤニヤして見ていた。き、聞かれたあ？

すると一色と材木座がキリツとした顔で物真似してきやがった。

「今回はお前らも、あいつ等もいるからな！ キリッ！」

「あいつ等もいるからな！ ドヤッ！」

「おい馬鹿マジやめろ止めてくださいお願いします」

頭を抱えて悶える。

こ、コイツ等あゝ！

「いやあヒキタニ君マジ熱いわゝ！」

「うぜっ」

「俺にだけ辛辣っ！」

皆してゲラゲラ笑いやがって……、クソッ。

「本当、忘れてくれ頼むから……」

「嫌よ。忘れないわ」

クスクス笑いながら雪ノ下は髪を払う。

「………忘れないわ」

………ケツ。

明日俺達の球技大会が始まる。

本当、青春っぽい事やると録な事がない。

続く



中章 俺たちの試合はこれからだ（打ち切り風）

その4 そして試合開始の笛が鳴る。

球技大会当日。

体育館が二つのコートに分けられ、ハーフコートで試合が行われる。初日は男子、二日目は女子にわかれトーナメント形式で様々な球技が学園の学年・クラス全員参加で行われる。他のクラスではテニス、女子ではバレー等様々だ。

俺等のクラスといつもの合同の隣のクラスはチーム混合でバスケットボールが行われる。

そこで俺比企谷八幡は何時ものようにぼっち力を発揮し、同じくぼっちの材木座と二人でチームを組めずにおどおどしていた所、天使のような天使の笑顔、天使戸塚がチームに加わってくれた。

残りは風邪で欠席した戸部、そして何故かは知らないが同じく欠席していた柔道部城

山の五人でチームを組み参加する事となった。

俺はかったるいイベントに辟易しながら何時ものように奉仕部ですごしていたら、チームメイトとなつた戸部翔が現れ一つの依頼を持ち込んだ。

依頼の内容については今年、残り少ない二年生生活の中、同じクラスの女子である海老名姫菜にかつこ良い所を球技大会で見せつけたい、という事だった。

こうして奉仕部部长は格好良い所を見せるならそれ相応の力が必要と判断し、部活終わりの夜や朝、休日等を利用した強化訓練が行われたのだ。

俺と戸部は鬼コーチによりしごかれ、由比ヶ浜の協力を戸塚、材木座、一色という協力者も得て訓練を見事乗り切り、そして今日という日を迎えたのだった。

そこに立ちはだかるはりア充の国の王子様葉山隼人率いる運動部のエース級軍団である。

はたして、我々は奴等を乗り越え勝利する事が出来るのか、八幡達のこれからの活躍を祈つて！　いくぞお！

EDテーマ♪

「……何をぶつぶつ言っているのかしら比企谷君」

雪ノ下の冷たい声に、ベンチに寄りかかり現実逃避する俺が現実に戻される。

嫌だ、戦いたくねえ。

だって相手は学園のヒーローなんだよお？

勝てっこ無いよお……。

そんな俺のすがるような目線に雪ノ下は舌打ちした。

え？ 何この子、怖い。

……因みに他の選手についてだが、

戸塚はそわそわと小刻みに震え、

戸部はあーっ、あーっとブツブツ歩き回り、

材木座は旅に出るとトイレの個室に閉じ籠り、

城山は静かに椅子に座ってるように見せ掛けて尋常じやない貧乏揺すりをしている。

もう精神病棟にしか見えないチームヒキタニだった。

「昨日はあんなに決めておいて情けない男達ね」

「それを言うなし」

因みに今日は男子の試合で、雪ノ下も試合は明日らしく、今日はフリーに応援してて

良いのだそうだ。

由比ヶ浜には海老名さん達をバスケの試合を見に来てくれるよう、頼みである。まあ、葉山がいる時点で三浦が引き連れてきそうだけだな。

「……はあ、んじゃ行ってくる」

「何処へ行くの？ 試合開始迄20分きっているわよ？」

「仕込みだよ」

そういうと俺は立ち上がり、相手チームの方を睨み付ける。

悪いが、俺たちの方が実力的に劣っている事は自覚している。ならば手段を選んでいられる立場じゃない。依頼達成の為になんでも使わせて貰うぞ。

「相手チームの飲み物に何か仕込んだり、人を雇って怪我をさせたりしては駄目よ」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ。そんな事は考えるだけでやらねくよ」

「考えはするのね……」

雪ノ下が困ったように眉をひそめて首を振った。

あくまでルールは守るさ。体育祭みたいな事は御免だからな。ルール違反はしない、だが汚い事はする。

そして葉山チームを見やり、足を向ける。歩き出す俺の袖を掴まむ指。少し心臓が鳴った。頬を掻きながら、俺はゆっくり振り向いた。だからそういう男心をくすぐる動作はやめて欲しい。そう伝えるべく振り向くと、

「ヒキタニ君、マジ怖くなってきたっしょ！」

やばーい、そんな風に首を振り俺にすがる戸部だった。離せ馬鹿。スタートをくじかれてしまった。雪ノ下に乙女な戸部を押し付け俺は向かう。

相手チームの、弱点を突きに、な。

「あれ？ 比企谷？」

相手チームのベンチに現れた俺に葉山は目を丸くする。葉山はチームメイトと一緒にストレッチをしていた。足を伸ばし、足首を回す。

「準備バッチリだな」

「ああ。怪我をする訳にはいかないな。そつちの戸部にもしつかりやらせといてくれよ？ 部活は今日も普通にやるから」

にっこりと笑顔を向けてくる。

相変わらずコイツの笑顔には花がある。見る者を魅了し引き付け、男の俺ですら魅力的という事が嫌というほど伝わってきた。

三浦や一色、その他女子が引き付けられるのも解る。

思わず葉山の顔をジロジロ見てしまっていた。

葉山も頭に？マークを浮かべているような気がした。

「……少し良いか？」

親指で少し離れた所に誘導する。

一緒にストレッチしていた大和と大岡が眉をひそめた。

葉山はわかった。と一言返し、皆にストレッチを指示すると一緒に少し離れた場所へと移動した。

「それで？　今回はなにかな？」

葉山は困ったようにたずねる。

確かに俺が葉山に話しかける時はろくでもない話ばかりだからな。今回もそういう話だと察したようだった。そうだね、そういう話でごめんね。

「……今回、戸部は俺達と一緒に沢山練習をしてきたんだ」

唐突な話で葉山も疑問符を再び浮かべた。

「それで最近疲れてたのか。部活が終わると直ぐにいなくなつたし、妙に付き合いが悪かったのも納得だな」

「雪ノ下にたっぷりしごかれてな。本当大変だったが、戸部はかなり頑張ってたよ。今回の球技大会は戸部にとって勝ちたい物みたいだね」

俺が出す戸部の評価にしては少し高めだが、嘘は言っていない。俺の言葉を受け葉山は表情を固め、沈んだ声で聞き返す。

「……姫菜を振り向かせたいが為に、か？」

「さあな。なんにしても戸部はどうしても今回の試合は勝ちたい、そしてその為にな

り努力をした。そちらはこの後の部活の方が大事みたいだけだな」

先ほどの準備体操の時の言葉を引き合いに出すと、葉山の顔がさらに険しくなった。

「わざと負けろ、と言いたいのか？」

葉山の返しに俺は腕を振って否定するかのように振舞った。ニヤリと微笑みを浮かべながら。

「そうじゃない。ただ戸部の努力を伝えたかっただけだ」

「……相変わらず嫌な奴だな君は」

苦笑いを浮かべる葉山に「試合、頑張ろうな」とだけ言い振り返る。

後ろで葉山がどんな顔してるかは知らないが、俺は伝えるべき事は伝えた。

自分のチームのベンチに戻ろうと歩を進めていると、戸部が此方に向かってパタパタ



歩いてきていた。

「ヒキタニ君挨拶行くなら声かけてよ！ もう終わった感じ？ 宣戦布告とかしたん？

ヒキタニ君意外に熱いわ〜」

「俺は終わった。お前も五分前には戻れよ」

戸部とすれ違いながら、俺は葉山達のベンチを後にする。

「いや〜、隼人君マジ本気になんないでね！ 俺もう緊張しまくりんぐでさあ〜」

「緊張し過ぎで怪我はするなよ。部活休む言い訳にはさせないからな〜」

部長きびしいわー！ という戸部の大きな声に大和と大岡もよってきていつもの葉山組が完成していた。

いつものメンツが揃った事でより一層騒がしくなる。まるでいつもの教室のように。

「お？ 戸部、戦線布告か？ やる気満々だな」

「戸部には負けられねえな！ 言っとくけど、負けた奴は勝った方にジュースだかな〜！」

アハハと笑う仲良し達。

戸部も緊張が和らいできたようで良かった。

楽しそうな彼等を尻目に、試合の準備体操でもやるかと腰を回した。

—————

とうとう試合開始五分前。

俺達は準備体操を終え、最後に各人の動きを確認していた。

「という訳なんで城山はゴール下メインで頼むわ！」

「わかった」

「ジャンプボールは宜しくね！ 戸部君」

「かしこまり〜」

見渡すと会場にはかなりの人数が集まっていた。

恐らく葉山目当ての連中が殆どで、此方のチームを応援してる奴なんて殆どいないだろう。

こうして見ると本当葉山は女子に人気なんだな。男子もかなりの人数来ている。

サッカー部なら解るんだが、他クラスで他の部活の連中とかとどうやって仲良くなってるんだろうな。

相手のチームのベンチを見ると葉山達は楽しそうに談笑し、その横に由比ヶ浜達を見付けた。

すっかり海老名さんも連れてきてくれたみたいだった。三浦が葉山にエールを送っている。

由比ヶ浜が此方に気付くとグツと拳を握り合図してきた。軽く手を上げ返事をする。

「いや海老名さん来てるっしょ……。やべー、マジ緊張する」

「……戸部なら大丈夫だろ」

「ヒキタニ君、今までに無い位優しいわー」

「気休めだけどな」

「ばっか、俺はいつも優しいっての。」

優しいから誰にも迷惑かけないようにあえて一人でいるのだから！

そして横にいる不自然な奴に視線を送る。

「お前はなんでここにいる？」

「私だけじゃ無いですよ。私の他にも葉山先輩目当てで二年生の応援に来てる人沢山いますから。ほらあそこらへん一帯一年生……」

え〜？ と首を傾げながら一色いろはは的外れな返答を返してくる。

「いや、だからなんで此方のベンチいるんだって話」

葉山目当てなら葉山側にいかね？ 普通に。

「ふっふっふっ。甘いですね先輩。葉山先輩のベンチはあっちですけど、ゴールはこっちなんですよ！ つまりこの試合はどう考えてもあちらが押し寄せになるのは目に見えてますから、あえてこちらを陣取った方が葉山先輩の勇姿が間近で見れる訳です！」

「お〜い、此方に敵応援してる奴が紛れ込んでるぞ」

スラダンの豊玉応援席で湘北応援する徳ちゃんかお前は。

「まあ、練習付き合ったりもしたんで、愛着もあるんですけどね。ま、頑張ってくださいね？ 先輩方！」

……全く最初からそう言え。

戸塚も戸部も、ありがとうと御礼を言い材木座がテンパっていた。

「我、女子に応援されたのリアル初めて……」

「いろはすく、ありがとく！ 良い後輩持ったわく！」

「頑張ろうね？ 八幡！」

おう、頑張ろうか。

ヒキタニチームは顔を引き締め、監督（雪ノ下）の方に振り向いた。

「カントク！ 一言ください！」

「……監督になった覚えは無いのだけれど」

少し戸惑う雪ノ下を囲むように円になる我がチーム。

「……まず、貴方達は色々足りない所が多いわね。戸塚君はパワーが足りないし、戸部君は集中力、材木座君は結局ドリブル出来なかったわね」

戸塚があはははっ、と頬をかき、

戸部があれく？とひきつり

材木座がクベツと悲鳴をあげる。

「比企谷君は最後迄シユートがヒキガエルのジャンプみたいだったわね。城山君は、緊

張してるみたいね。急な指示に対応してくれて助かるわ」

城山がうすつと頭を下げる。

何俺のシユートそんななの？

ていうか試合前に士気下がる事言うなよ。

「色々あつたけど、それでも貴方達は私のしごきに着いてきた。それはとても立派な事だし、誇つていいわ。だから、今までの苦勞をこの試合にぶつけてきなさい」

おうっ！ とチームが答える。

材木座が吼え戸塚が笑い、戸部が気合いを入れ城山は……変わらぬ。

俺も、まあ気を引き締めていきますか。

雪ノ下がぼそつと頑張つて、と言つていた。

俺にしか聞こえなかったかもしれないし、皆に聞こえたのかもしれないがとりあえず、適当に頑張るわ。

—————

試合開始の笛が鳴る。

それと同時にうちの戸部と相手の大和がジャンプボールを行った。

ジャンプほぼ同時、しかしパワーでラグビー部大和に押し負けこぼれ球を大岡が拾う。

「かっつー！ 大和マジ大人げないっしょ！」

大和があはははと笑う。

ボールは大岡が運び走った。

大岡は思った以上に素早く、すぐにゴール下に行きシュートを放つ。しかしシュートが外れボールがリングをバウンドする。

「リバントー！」

「させないさっー！」ガンツ

落ちてくるボールを掴むためゴール下に陣取っていたが、なんと葉山はその上からそのバウンドしたボールを押し込んでしまった。

ワアアアア!!

いきなりのスーパープレイに会場が沸き上がる。此方としても葉山チームの想像通りのハイスペックさに少し戸惑った。

大岡からハイタッチを求められ葉山が答える。

パチンツという音と共に再び歓声が上がった。  
すげえよ。

いや本当ヒーローみたいだな。

しかし、そこがお前らの弱点だ！

大岡がハイタッチを求めた時点で俺は戸部にパスを出し、葉山が気付く頃には相手ゴール側の戸塚にパスが出されていた。

ジャンプボールの後後ろに下がっていた大和に阻止されかけるが、戸塚のシュートは見事に入る。

相手も会場も唖然としていた。

そう、これはバスケット部の大会とは違う、ただの学校の行事でありリア充の思い出作りだ。ならば奴等は面白おかしく参加し、葉山目当てで来た観客は試合の妨げにすらなる応援を送る。葉山君こっち見て〜！ とかな。葉山見たさに別クラスや違う学年からも集まったんだ。



だが俺達にはそんな事関係無い。

お前達は空気を読んでチームメイトからの仲良しアピールや観客のエアールに答えるんだろうが、俺達にはそんな物は無い！

寧ろ俺が戸部や戸塚とハイタッチなんてしたら響きを買うだろう。

だから徹底して俺達は空気を読まない。

観客の応援も無い！それがお前達と俺達の差だ！……俺らが下みたい。

「比企谷君らしい作戦ね」

ベンチでは雪ノ下が呆れていた。

「いや、ある意味観客を味方につけてますね」

「でも確かに相手チームが勝手にやっているのだから此方に非は無いわね」

更に俺達はお前達の唯一であろう練習時間の体育中、ずっと観察しリサーチし続けた。

大岡はドリブルが上手いがシュート等点数を稼ぐ手段が苦手、大和は逆にドリブルがあまり出来ないが持ち前の体格が厄介者。

残り二人は運動部という事で警戒してたが、実は殆ど部活をサボって、放課後教室でいつまでも残って遊ぶタイプのリア充だったからか、動きに他の奴ほどキレがない。

お前らは相手チームをリサーチだの、たかが球技大会でやるはず無いよな。

そしてその対策でポジションを組む事も、その練習もたかが楽しい球技大会でやるはず無い。

葉山が大岡にパスを出す。それを戸部がカットした。

「うわっ、戸部ビビったしー！」

「わりいけど、ジューズは頂きな！」

戸部からのパスを受けると戸塚にパスして、戸塚はシュートを決める。まずは一点取り返した。いい調子じゃないか。

「パス早いな」

急に葉山に話しかけられて少し驚く。

まあ良いけどな。葉山が俺に話しかけてる間抑えてるのと同じだ。出来るだけ食いつかれるように挑発的に話す。

「言つたろ？ 練習したつて。お前らは大変だよな。部活に付き合いかもあるんだからな」

「……お前が練習なんて、似合わないな」

苦笑する葉山。確かに俺自身も似合わないと思うよ。だけど今回は本当に、初めて本気で練習したんだ。スポーツに対してチームの作戦を考えたのも初めてだし、なんならチーム戦も初めてだ。何故なら今まで形式で体育とかで組まされた寄せ集め、本気でやる理由は無い。そんな俺がこんな慣れない事してるなんて、驚いているのは俺も一緒だ。

だけど、だからこそこの苦労を無駄にしない為にも色々策略を巡らせる。

試合は上々の立ち上がりだった。

初心者ボールに集まる現象を利用し、引き付けてから高速でパスを回し、前に出しておいた戸塚と、体力の塊戸部を中心に点をとらせる。そして此方のゴール下には城山を陣取らせ中に入れない。

オフエンス・リバウンドは無駄に運動量のある戸部に取らせて俺はひたすら練習したパスやドリブルでボールを運ぶ。

学校のイベントで楽しみに来てる奴等とは違う、しっかりとした作戦やそれに特化した練習をしてきた俺たちはその辺り上手いき、しっかりと点数を獲得していった。

そして材木座には必殺技を伝授してある。大和の前で体を広げて密着する材木座を見る。

「ふしゆるゝ、ふしゆるゝ」

「こいつ、近……、なんでずつと俺から離れないんだよ、近づ、うざっ」

必殺〃ボンビー擦り付け作戦〃

あいつには一人、葉山の次に厄介だった大和に試合の展開関係なく張り付きまくれと言つてある。いわゆる見よう見まねスツポンドイフェンス。

材木座は結局ドリブルは出来なかったしシュートも成功率が低い、あの暑苦しい男がずつと近くで体一杯広げて付きまとわれたら、そりややりにくいだろう。邪魔でウザいだろう。イライラさせたらもうけもの。バスケット経験者なら抜けたらうが、お互いバスケット初心者だ。ラグビーと違って吹っ飛ばせないしな。材木座の体格は立派な武器だ。

お前らの楽しいバスケットは無い、空気を読まない俺たちの作戦を喰らうがいい。

とそこで視界の脇で戸塚に怯む大岡がいた。

「う、はあ……、はあ……」

「う、ううっ！」

「えい！（ヘソチラツ）」シュート

「く、くそっ、やりにくい！」

あそこの弱体化は予定外だったが、

だが仕方がない、その気持ちは解るぞ大岡。

確かに俺も戸塚をやつつけられない。

さて、葉山も大人しいし、今のうちに点を取っておかないとな。

城山から受けたボールを戸部にパスをして点数と相手選手を見わたした。

一方、葉山ベンチでは三浦、海老名、由比ヶ浜が心配そうな顔をしている。

「……なに、隼人負けてんじゃん。ヤバくない?」

「だね、なんかとべっち超点取ってるじゃん! 運動出来るよね〜! (チラツ)」

……………。

「そうだね、がんばってるね」

(……なんか、全然伝わってないのかな。全然反応が無いよ)

—————

試合が進み12対16でこちらが有利。

相手が此方の奇策に慣れられる前に一策投じるか。

再び城山がりバウンドで取ったボールを受けとる。

「戸部っ!」

シュートの為葉山チームがこっちのゴール付近に固まっている、今がチャンスだ。

コート中央にいる戸部に合図を送る。

比企谷「イ、イッ (変顔)」

葉山「ビクッ」

戸部「……………！ イ、イツ！（変顔）」

よし……………！

ゴールめがけて思いっきりボールを投げ飛ばす。

ボールはコート中央を越えた辺りで下降してバウンドした。

戸部はボールを拾い上げゴールに走り、リングに飛び上がる。

「……………！ いっけえとべっち!!」

ダアン……………。

……………。

戸部はロングジャンプしたのち、ゴールには届かず、綺麗に着地した。

ドッ……!!

「戸部えwwwwwwだっせえwwwwww」

「今完全に行つたと思つたらwwwwww」

会場が一気に笑いに包まれた。

「い、いや、カッコ悪い!! 今決めたと思つただけどなく!!」

頭を抱えて悶える戸部は恥ずかしそうに会場に向けて悲鳴をあげた。俺も悔しい気持ちがあつた。

折角のチャンスが……!!

因みに今のは戸部のミスでは無い。

本当はしっかりとゴールまでパスが届き、アリウープさせるつもり作戦だったのだ。スラムダンクみたいに。

戸部はゴールに走り出していたのに、ボールが届かず戻らせるハメになってしまい、助走や時間を大きくロスさせた。



つまり俺のミス。

実際やると遠くからゴール付近にボール投げるの上手くいかねえな……。

「……今の顔、ズルくないか？ 変顔で驚かすなんて」

葉山が苦笑いしている。

確かに俺が変顔したら今までに無い位真顔になったな。

「は？ 何言ってるんだ？ 俺は戸部に微笑みかけただけだぜ？ 人の笑顔を反則呼ばわりとはひでーな」

さらに言えば試合中顔芸してはいけないなんてルールは無い、何故ならスラムダンクでやってたんだから間違いない。

え？ 相手に失礼に当たる行為をしてもファウル？ ……今のはただの笑顔だつてば。

「……あんな作戦出した覚えは無いのだけれど。いつの間にアリウープなんて練習した

というのかしら。見よう見マネで出来る訳無いでしょう。宮城君を甘く見てるわね」  
「でも惜しかったですね。試合もリードしてますし、予想が外れて大健闘じゃないですか？」（宮城君？）

「まあこれ位は当たり前だわ。私が鍛えたんだから」フンスツ  
自慢げに胸を張る雪ノ下に苦笑いを浮かべる一色。

「……でも、一つ気掛かりね」

「どうしました？」

「なんでも、無いわ」

雪ノ下からポジションの指示が出される。今の勢いをころさないよう全体的に前に出るよう言われた。その指示を前の戸部に伝え、点数を見る。

……練習、やれば一応出る物なんだな。

その後戸部がシュートを決め、再び点差を広げる。

会場の予想が外れ、どよめく。

まさかこんな余り物チームが葉山チームにリードするなんて思わなかっただろう。

最初の歓声に比べ、葉山チームは活躍が少ない。若干気まずい空気が流れている位だ。

だが今はこれでいい。

このままりードしながら戸部にボールを集めて得点を取らせまくれば、嫌でも戸部の勇姿に会場の目が集まる。さっきの珍プレーだって、戸部には魅力に変わる。目立って笑いを取って、その上得点王となれば十分過ぎる位見せ場を活かせたと言えるだろう。

そんな時葉山にボールが渡った。

途端に葉山応援コールが沸き起こる。葉山は片手でコールにわらいかけ、応えると会場の女子がさらに沸き上がった。

マークに付いていた戸部がふう、と息を付くと瞬間、葉山の姿勢が変わり低い姿勢に変わる。

ダンッ……。

………!!

一瞬の出来事で目が追い付かなかったが、葉山は低いドリブルで戸部を抜き俺の前に突き進んできた。

俺は咄嗟に腰を下げ手を広げたがまるで俺の手をすり抜けたかのように後ろに走り去り、立ち塞がる城山の前に迫る。

「な……………」

「うお……………」

葉山は飛び上がりゴールにボールを叩き込もうとする、城山はそれを阻止する為に飛び上がるも葉山はその上を取り、ダンクでボールを叩き込んだ。

ガアン……………!

テンツ……………テンツ……………。

体育館は静まり返り、ボールが弾む音だけが響いた。

そしてワンテンポ遅れて会場がワツと沸き上がった。

「す、すげえええ!! 三人抜いた!」

「しかもダンク決めた! 格好え!!」

五月蝿い位の歓声の中、俺たちは少し固まっていた。

「……………試合はわざと負けるなんて事はしない。君らは十分強いし、上手い」

自陣に戻りながら葉山が話しかけてくる。

「だから、変な工作なんかしなくたって君たちが実力で勝てるって事に俺は賭けるよ。俺は戸部の事を信じてるからね。そもそも、俺は君にだけは負けたく無いんだ」

そういう葉山にじとりと睨む位しか返せなかった。

「は、八幡」

ボールを拾う俺を心配そうに戸塚が話しかける。

「すぐに取り返すぞ」

ハッキリ言つて想像以上だ。

いかに運動神経が良かろうと、バスケ初心者の球技大会に、これ程上手く、ガチな奴がいると思つてなかった。

点数はこちらがリードしていたが、今の1プレーで見事空気をつかさらつてしまった。

「……全く、嫌な奴だ」

俺はコートにボールを投げ入れ、また走り出す。

パシッ！

なに………？

いつものように高速でパスを回そうとパスを出したら、葉山によってボールがカットされた。

「ステイール!?!」

「いつまでも慣れない訳無いだろ? 大岡っ!」

葉山のボールは大岡に回されそのまま葉山はゴール下に飛び込む。

「うむっ!? くっ」

城山も素人なりにスクリーンアウトを頑張るが葉山は軽々しいステップで内側に入ると大岡に合図を送る。

大岡はシュートするもリングに弾む。

しかしまたも葉山がそのまま叩き込んでしまった。

お前も素人のはずなのになんだその動きは。

葉山のハイスペックさは知っていたつもりだし油断したつもりは無いが、こんなに早く対応してくるなんて。

「やったな隼人君!」

両手を上げて葉山に寄っていく大岡。

「まずは戻ろう！　すぐ次が来るぞ！」

指示を出され“おう！”と元気良く守備に戻っていく大岡。

もうスキは見せない、か。

流石は空気を自在に操るゆとりの国の王子様だ。

さっきのプレイと今の指示でチームの士気や動きだけでなく、本気で追い上げて良い空気を作ってしまった。

他のチーム相手ならそうはいかなかっただろう。ムキになってキャラを崩したく無いだろうしな。

だが葉山が居れば話は別だ。いつだって、学園カーストトップの人間がその場の空気の支配権を持っていくんだ。

今は学園ヒーローチームが格好良く逆転する空気になった。

「がんばれ〜！　葉山君！」

「いけ〜!!　大岡あ！」

こうなる前に、点差を広げて追い上げるのが馬鹿馬鹿しくなるようにしたかった。

こう早く変えられるのは、不味い。

思考する俺の前には戸部と葉山が話をしている。

「い、いや〜隼人君マジ格好良すぎでしょう!!」

「いやお前にはやられたよ。これからはそうはいかないぞ?」

「いや〜、本手加減してほしいわ〜!」

.....

あれから試合は進んで、葉山達がどんどん点数を入れてきた。どちらも素人である以上ディフェンスは不得手であるし、こちらも点をそれなりに取り返したがもはや勢いは止められず逆転を許してしまった。

材木座の張り付きも体力が続かず、葉山の次に厄介な大和が自由になってきたのもあり、此方の圧倒的不利な状況だ。

「戸塚!」 シュツ。

「あ!」



戸部の放ったパスを戸塚が取り損ない相手ボールになる。  
そしてそのまま大和が決め、前半が終了した。

……前半終了のブザーが嫌に耳に残った。

その5 彼は彼なりの本気があり、その生きざまがある。

ハーフタイム。

短い時間だが動きっぱなしだった俺達に僅かな休憩が与えられ、俺もベンチに座り一息つく。

ルールブックによれば、休憩は10分。しかし休憩終了と同時にジャンプボールでありスタンバイの時間と合わせると休憩時間は長くない。

ハアと溜め息をつき、チームの様子を眺める。

此方のチームの士気は低く、目に見えて体力の限界が近付いていた。点差は八点、相手の能力も士気も高い今この差は絶望的だろう。こちらが入れても、当然相手にだってチャンスはあるのだから。

ようやく望んでいた試合展開に喜ぶ観客達。ウエーブまでやっている奴等もいた。やはり想像通り、誰もこつちが勝つ事なんて望んでいないのだ。

皆口数は少なくベンチに座り込み飲み飲み物を飲む。

「おい戸部！ さっきのダンクもどきマジ笑ったよ！ 流石戸部だわwww」  
「いやそれ酷いっしょ……。マジ恥ずかしかつたんだから」

相手チームに話し掛けられて返事を返す戸部。

お前本当凄いな体力、良くそんな元気出せるな。

しっかし、このままだとマジこれで終わりだな。まだ策はあるにはある、あるんだが……。

それらの作戦の全てが今のままではあの葉山隼人には通用しない事を俺は理解してしまった。

—————  
ハーフタイム 葉山サイド

三浦や海老名、由比ヶ浜からタオルや飲み物が配られ、そしてチームは楽しそうに談笑している。

「隼人お疲れ。はいこれタオルケット」

「ああ、ありがとう優美子」

「お疲れ様隼人君！ いや、接戦だね！」

「ああ、戸部も本当良い動きするし、手強いな。たまたま上手くいつてるけど、油断したらヤバそうだ」

葉山の言葉に海老名は感心したように頷く。

「へえ、あの戸部っちがね」

「ね！ な、なんか格好良くない？」

由比ヶ浜がそれとなくアピールするが、しかし途中で大岡達に茶化されてしまった。

「え？ ま、あの戸部だしな」

「……ま、ね」

「……」

「いやでも戸部は本当に凄いつて。これは、俺も負けてられないな」

（あんなに活躍してたのに、もう隼人君の活躍で霞んでるのかな……。ヒツキー、まずいよ）

—————  
比企谷サイド

それぞれがドリンクを飲み、タオルで汗を拭く。

表情は暗く、誰も喋ろうとしない。ただ一人を除いて。

「いや！ マジ隼人君相手にコレは善戦っしょ！ 大健闘だつてマジでさ！」

戸部は皆を励まそうと必死に明るく振る舞っている。

確かに、前半だけ見れば大健闘だ。だが、この消耗で後半に挑めば結果は見えている。

皆それを解っているから、または余裕が無いから意気消沈しているのだろう。「……まあ、相手が隼人君だし、しようがない所もあるしさー!」

相手が凄すぎた。そう言つて落ち込む皆をなんとか元氣付けようと頑張るも、戸部の投げかけも響かず皆俯いてしまつてゐる。

「でも僕がミスしちやつて、点数取られちやつて。ごめんね、皆!」  
「いや戸塚もマジ頑張つてるっしょ! 戸塚のせいじゃないつて!」

暗くなる戸塚をオーバーリアクションで励ます戸部。

手を振り回し、楽しそうな笑顔を作り、気にするなど体全体で伝えにくる。皆全力で頑張つてくれている。それが解るからこそ戸部は必死なのだろう。

しかし、必死に皆を元氣付けようとする戸部に冷たい一言が放たれた。

「そうね、戸塚君は頑張つてくれているわ。本当に頑張りが足りないのは、貴方じゃないの? 戸部君!」

戸部の背後から投げかけられた雪ノ下の一言にビクツと固まる戸部。

雪ノ下の方に顔を上げる。そこには悲しそうな顔をした雪ノ下が腕で自分を抱きながら戸部を瞳で射抜いていた。

「戸塚君も材木座君も、あの比企谷君ですら練習の成果を出し健闘をしている。城山君も、柔道部でありながら素晴らしいプレーをしているわ。でも、貴方だけが本気でやつてない。前半戦を見てて、それだけは解るわ。そうでしょう？」

戸部がオロオロと狼狽え、そして襟足を引つ張りながら下を向いた。

その気まずい空気を感じ、戸塚が立ち上がり、戸部と雪ノ下の間に入る。

「戸部君は頑張っているよ！だって、前半の点数のほとんどは戸部君が取った物だし、やっぱり一番上手だし、手加減なんてしているように見えないよ！」

……まあな。

戸部は動いているし、なんならうちのチームで一番活躍している。意図的に活躍の場を作っているのもあるが、それを活かして決めているのも戸部だ。けど、雪ノ下はそう

は思っていない。戸部は、まだやれる事を知ってる。

「相手チームに話し掛けられてはへらへらと返事をして、プレーが遅れる。葉山君がコールを受ければ、葉山君のプレーを止めるのを躊躇う。そして大和君や大岡君と勝負になれば一歩下がってしまう。これのどこが全力だと言うのかしら？ 本番の緊張を含めても、明らかに集中もしていない。そんなに周りの目が気になるの？」

それもその通りだろう。

相手チームに話し掛けられたらそれが速攻のチャンスだろうと返答してしまう。そして相手にやられれば照れ隠しで必要以上に話をする。さらに周りが葉山達の活躍を求めれば、それを止められない。

「確かに、この試合の作戦では貴方の負担は大きい。でも、貴方がこの試合での活躍を望んだのだから貴方も本気で……」

「違うな、雪ノ下。これが戸部の全力だ」

そこまで言い切った雪ノ下の言葉を遮り、俺から反論を伝えた。

俺の言葉に眉をしかめる雪ノ下。戸部もきよとした顔で俺に視線を向ける。



「……貴方迄そう思うとは意外ね。今までの練習成果や戸部君の相手チームへの態度を見て、彼は全力でやって無い事は明らかでしょう？ 彼はもつと出来る、力のある人間よ」

「そうだな。俺達のチームのキー・マンとしてはかなり致命的だろう。だが、それを含めて戸部の全力なんだ。俺や雪ノ下みたいなやり方は出来ない」

俺の言葉に戸部が目を泳がせうつつ向く。雪ノ下の表情も険しくなり、表情で俺の意見に否定的である事は伝わってきた。

雪ノ下がこの試合で勝とうとするなら、それはもう圧倒的な力でねじ伏せるんだろう。この後の相手や周りとの関係を気にせず。

俺がなんとかしてこの試合で勝とうと思うならそれこそ今以上に、人目を気にしないで相手チームを貶めるなり汚い手を使うなりする。相手に恨まれる事を厭わず。

だが、俺達のやり方をするのは相手や周りを切り捨て、周りにどう思われても良いぼっち、もとい孤高な人間にしか出来ない。

「相手やギャラリーに気をつかい、空気を読みながらプレー、それが戸部の本気だ。社会だつてそうだろ？ 周りに気なんか使わないで好き勝手やったら会社は回らない。適当

な所で落ち所を見極め、上司や同僚の顔を伺いながら頑張んなきゃならないんだ」

ソースは親父の愚痴。周りを気にせず全力を尽くしていればいいならば、それは簡単な話なのだろう。だが人が集まるならば、そこに一定以上のコミュニケーションや気遣いといった今後の関係性を含めて考え、物事を進めなくてはならないから大変なんだ。

沢山の人間関係の中で生きる戸部にとっては、俺たちとは比じゃないほど重要な要素だ。

「だから戸部は全力。むしろ大健闘だろ俺達」

しかも大和や大岡は課外活動からの付き合いで、あんなネガキャンメールまで出回った。葉山のお陰であの問題を乗り越え、親しくなったにしても、いつ壊れるか解らない。そう思っても無理はない。

ラインで返事が遅れただけで既読無視と軽蔑され、好きな人が被るだけで終わってしまふ現代の友情において、それは今後の学園生活そのものに亀裂が入りかねない。

俺の言葉は周りに伝わったのか、皆目を反らす。

しかし、雪ノ下だけは表情を変えず、真つ直ぐ俺と戸部を見つめる。戸部も雪ノ下の視線に気付き、少し慌てた後、気まずそうに微笑む。

「い、いや、なんか、空気悪くしてゴメンね？ そりやムカツクよね。皆俺の為に頑張ってくれてんのにさ！ うん、マジで試合、次で挽回すつから！」

明るく楽しげな話し方に、手を大袈裟に使い表現する。人好きそうな笑顔を振り撒く。しかし雪ノ下は微笑み一つ浮かべない。

「確かに？ 隼人君には御世話になりまくりだし、なんか試合始まって改めて思ったけど、誰も俺らの勝ちなんて見に来てねえよ！ みたいな空気がヤバいじゃん？ だから、ちと気負けしてたけど、でも今の雪ノ下さんの激励とか、ヒキタニ君のカバーでなんか気合い入ったわ！ マジ！」

こちらのベンチには戸部の声だけが響きわたる。戸部以外の誰も声を出さない。雪ノ下は視線を逸らすことなく戸部が喋るのを黙って見つめた。

「……い、いや、でもだからなんての？ マジやってやるっつか、その、俺に、マジは

求められて無いのは解ってるつつくか、この試合でさらにつつくか……。ゴール入れたらがっかりされるし、隼人君にボール取られたら皆喜ぶし……」

戸部は全力だ。

この試合だけじゃない。

毎日、毎日生きてる中全力で人との関係を守ってる。

ヘラヘラおどけて、友達が女に挟まれて困ってたら睨まれても割り込んで、後輩のワガママを見下す事なく対等に聞いてやって、好きな子が出来ても雰囲気壊さない為に友達にだって真面目にならない。

それは人と関わるのを怖れて人と離れた俺達と違い、全力で仲間の空気を守ってきたんだ。だから、だからこそギャラリーの反応が堪えるんだ。

雪ノ下のまっすぐな視線に耐え切れず、戸部の躍けて笑顔で、声もやかましくて動きもせわしなくて。そんな風に取り繕う戸部が、話している内にどんどんお調子者の仮面が、メツキが音を立てて剥がれ落ちていくのを感じる。いつものうっとおしい笑顔は、どこか痛々しい嘘笑いに変貌していった。

「なんてーか、なんてーか、いや、ハハッ。……なんか怖くなっちゃって……」

……。

戸部はどうとう俯いて黙ってしまった。

真剣な眼差しに、雪ノ下の凜とした態度に自分の態度が映り込み、それに耐え切れず目を逸らしてしまったかのように。

一色も戸塚も、何も言えず俯いている。

俺も、何か言った方が良いのか、と言葉を頭の中で選んでいた。

そして何も言わずに俯いてしまった戸部を、それまでただ見つめていた雪ノ下が両手で顔を優しくあげ、目を見る。逸らすことを、取り繕う事を許さない、という風に。

「戸部君」

その呼びかけは、さっきまでと違い、どこか優しい、まるで姉が弟を、母が子供に語りかけるような声音だった。

「誰もイラついてなんかいないわ。私達にまで怯えないで頂戴。貴方が何をしても今になつて見捨てるなんて真似、私達がするわけ無いでしょう。貴方が相手チームだけじゃなく、私達やギャラリー迄意識してて、不器用ながらも他人を氣遣う人物という事はもう解つているわ。でもね、人の顔だけ氣にして、物事に本氣になる事も無くヘラヘラしているだけの人が魅力的に見えると思うの？」

「……………」

今回の根本的な依頼、好きな人にかつこいい所を見せたい。その最大の目的を雪ノ下は戸部に対して訴えた。

その言葉に、戸部も、そして俺もハツとさせられる。

まあ、そうだ。

確かに、薄っぺらいな。

いい人で終わる。

これはやはり、相手に自分の汚い所を見せるのを恐れ、上部だけ優しくしているだけ

だから、お互いの距離が深くなる事が難しく、それなりに良いだけの関係で終わるのだから。

しかしいい人で終わる人は、怖がってはいるが手を抜いている訳じゃない。全力で、好きになって欲しいから良い事をし、嫌われるかもしれない本音を隠す。彼等だつて全力で頑張っている。

だが、それはやはり欺瞞的な部分も多い。

だから相手に踏み込んで開いた心の分しか親しくなれない。

戸部はそれを踏み越えなければならぬ。

そう雪ノ下は言うのだろう。

「あ、あの〜」

静まっていた空気の中おずおずと手を上げる一色いろは。

「私も思うに、やっぱり好きな人に自分の魅力を伝える為には、アプローチつてその都度やり方変えないといけないと思うんですよ。戸部先輩の明るくノリが良い所は、もう伝わっているとします。だから、今度は、たまには、格好良い所を見せるのも良いと思

ます。私も」

一色もまた、戸部に乗り越えて欲しいと言葉を送る。

「だから今さら戸部先輩が滑つたりノリが悪かった位で誰も嫌いになつたりなんかしませんよ？ 空気を壊しまくる私が言うんですから間違い無いです♪ ……だから私達の事も、葉山先輩達の事も信用してください」

コイツらはあくまで、戸部に戦えと言う。励まし、支えると伝える。

俺は戸部のやってる事は間違つてないと思つてる。

人と仲良く、嫌われなくするのは難しい。毎日顔を合わせ、努力をしてようやく仲良くなれるのに、嫌われるのは言葉一つで十分だ。

俺は人と繋がる事を放棄した。だから何かを言える立場じゃない。俺にはコイツらみたいに優しい言葉を贈れない。

そして戸部の今までの頑張りを否定したくない。今まで、必死に皆の顔を伺い伺い、生きてきたコイツを否定したくない。だから、俺は戸部に対し何かを言う事なんて出来



かった。

だが、雪ノ下は真っ直ぐに戸部に伝え、一緒に戦おうと言っているのだ。

そして、雪ノ下は俺に視線を送る。その視線を、俺は自分の視線とぶつからせてしまった。

ため息を付く。

わかったよ。確かに本来の依頼は戸部をこの試合で魅力的に見せる事だ。

あいつらが戸部をどう思ってるかなんか知らない。大和も大岡も、会話すらまともにした事無いからあいつらの気持ちは解らない。

……だから、俺は事実だけ伝える。

「なあ、体育ん時のマラソンの練習、覚えてるか？」

俺は、戸部が振り向くのを待って、そして続けた。

「……マラソン練習してる時、俺がお前に声をかけただろ？　そんな時、結構長話してたのに、大和や大岡はお前を待ってたな。あんな面倒で疲れるマラソンで、お前をわざわざスピード落として待って、お前という時間を取ったんだ。それは確かだろ。そして、葉山にかんしては何も言う必要は無い。葉山が誰かを頼るのも、葉山を助けた事がある奴も、俺は戸部しか見ていない」

「……うん」

「これらも含めて、あいつらがどう反応するか考えろ。あいつらはお前が態度変えて空気を読むのを止めたら、離れていく奴か？」

どう感じるのかはお前の勝手だからな。

「うん、そりや、隼人君も、大和も大岡も、俺は信じてるよ？ けど皆がさ！ 隼人君達の活躍期待してっし」

「そうか、ならギャラリードもか心配なのか。だけどな。ハッキリ言うとお前が思うほど誰もお前の事を気になんてしてないし、お前もあいつらの事好きな訳じゃないだろ？」

「え、あ、いや、まあ……」

「だったらどっち優先するかなんて決まってるだろ？ お前も一丁前に恋する男なら、好きな人の為に周りを切り捨ててみるよ。両方手にいれるなんて無視の良い話なんてない、海老名に振り向いてもらう事とあそこのモブ達、どっちが大事なんだ？」

「き、切り捨てつすか……」

俺の言葉が強すぎたのか戸部が後ずさる。

しかし、いつまでもウジウジする戸部にとうとう戸塚が両手を握り一括した。  
俺の言葉の意味を解りやすく解説しながら。

「戸部君は海老名さんと観客どっちが大事なの！」

戸塚の言葉にハツとなり、俯かせた顔を上げ返答した。

「それは海老名さんっしょ!!」

ハッキリと戸部は言いはなった。

顔をあげ、会場中に聞かれるかもしれない声で。

ヤバそうに会場を見渡すも、騒がしい会場内では誰もこちらに気付いてはいなかつ

た。

ほっと、戸部が胸を撫で下ろす。

「……あはっ」

「ハハハッ！」

皆、戸部の見事な手のひら返しに、思わず笑いがこぼれ出た。

「ならそれで良いんじゃないの？」

「大切な物を見失ってはダメよ。それ以外の物を排除してでも、ソレを守らなくては。」

「……あいつらより、海老名さんが好き、か」

戸部は騒ぐ観客を見渡して一瞬何かを考え、そしてニカッと笑った。

「……ごめん！ちよつとネガツちやつたわ。マジ目が覚めたつしよ」

相変わらず薄っぺらい態度に薄っぺらい返事。

だが、ようやくいつもの戸部が帰ってきたような気がした。

「いや皆マジごめんだわ。でも、皆が励ましてくれたから、怖いモン、もう無いわ！」  
パチンツパチンツ

そのウインク止めろ。

目障りだから。

「…………いや、皆に相談、してよかったわ」

そして戸部は後半も頑張ろうと騒ぎだす。

悩みも葛藤も、すぐに切り替え騒ぎ出す。

なんとも軽薄な態度だが、そこに俺には無い強さを感じた。

葉山の言うムードメーカーが元気になり、皆でワイワイ騒ぎだす。

もう今の笑顔には影も無く、明るいお調子者のソレに戻っていた。

「それでは後半の動きを説明するから戸部君と戸塚君のオフエンス組からこつちに来て貰えるかしら？」

「うん！」「オス！」

もう大分時間を食ったが、ようやく試合だけを考えて望める。

俺はやれやれとベンチに座り込むと隣に城山が静かに座っていた。

「……」

「……」

気まずい。

しかし、考えるに今一番気まずいのはこの城山ではないだろうか。そう考えると何処かバツが悪かったのてつい謝罪をしてしまった。

「悪いな。関係無いのに巻き込んで」  
声をかけられると思つてなかつたのか意外そうな顔をしたあと「いや・・・」と返事を返してくれた。

「……今回も部活の依頼か？」

「まあな」

「……そうか」

……。

真面目、もしくは無口なんだろう。こちらを見る事なく、城山は俺と語数の少ない会話をを行った。

こちらのコミュニケーションと相まって会話が続かない。気まずいのと罪悪感で包まれていると城山から意外な提案が出された。

「俺も手伝う。勝てば良いのか？」

風邪で休んだお陰で巻き込まれただけなのに、まさかの前向きに手伝うという提案



だった。……なんのつもりかは知らないが、それは非常に助かる提案だ。

「最低でも良い勝負がしたい。いいのか？」

「お前達には俺も借りがあつた。部活を助けてくれたらう」

まあ、確かにそうだが、お前にとって尊敬する先輩をこき下ろすようなやり方だ。寧ろ恨まれていても文句はないくらいだが、借りと思つてくれていたのか。

「……やり方はともかく、事実助かつた。だから、感謝はしている」

「そうか。助かる」

城山は力強く頷いて返してくれた。

何がなんだか解らない中巻き込まれ、それでも文句を言わず付き合つてくれた。そして積極的に力を貸してくれる事を約束してくれた。

コイツも大概良い男だな……。

そうしていると戸部が作戦会議！ と騒ぎ出した。

「よし！ 後半の作戦はどうする？ なんでもやるつしよ！」

「ん？ 今なんでもやるって言ったな？」

「…………へ？」

サーツと顔を青くする戸部。

しかし、俺はその軽々しく口にした言葉を待っていた。

「そういう事なら良い作戦がある。出来ることならやりたくなかったが、仕方ない。城山も手伝ってくれるらしいからな」

「な……………に……………？」

手招きで全員を集める。皆びくびくしながら円になった。

…………ボソボソツ。

「本気……………か？」

城山が脂汗を浮かべる。

「手伝うんだろ？ ならやってくれ」

戸部がひきつる。

「めっちゃ恥ずいんだけど」

「なんでもやるんだろ？ 男に二言は無い（でも虚言はある）」

材木座が口を開く。

「我は……」

「お前はやれ。俺も嫌だがやる」

戸塚が困った顔をしている。

「僕は……」

「戸塚は見てていいぞ！俺らが毒をかぶるから！」

「いや、やるよ！」

俺の提案に雪ノ下は呆れている。

「……相変わらず小賢しい男ね。」

「小、はいらねえよ。賢いでいいだろ。後、雪ノ下は試合中の指示頼むな」

「ええ。それについては考えがあるわ。一色さん、手伝って頂戴」

「えゝ（汗）」

さて、色々あったが休憩時間が終わった。

ここから、俺達の小賢しい策の始まりだ。

## その6 そして後半戦へ。

後半まで後1分。

観客達も前半の試合展開に満足し、楽しそうに話をする。

後半何点差つけるか、どんなスロープレーが出るか盛り上がっている。葉山のチムも立ち上がり、試合の準備に動き出した。

ベンチでも三浦や海老名から葉山に激励が送られる。

「んじや、隼人後半も頑張つて」

「ああ、ありがとう」

「大和君も大岡君も頑張つて！ ……男達がお互い汗を足らしながらぶつかり合う、デユフフｗｗｗｗやっぱりスポーツ物は良いよね」（笑）」

「擬態しろし」

「ははっ……、ほどほどにね」

由比ヶ浜は点差を見て溜め息をつく。

(ヒツキー、大丈夫、かな……)

「「「オオオオオオ!!!」」」

「ビクッ

会場に獣の咆哮のような声が響き渡る。

皆声のする方を見ると、ヒキタニチームが肩を組みながらコートに突撃してきた。

「!!?」

「うわああ! なんだなんだ!」

「どしたんだ?」

「「「オオオオオオ!!!」」」

ドドドドドッ!

葉山チーム側コートで止まるとダツシユで円陣を組始めるチームヒキタニ。

あまりの出来事に会場は静まりかえり、葉山達は由比ヶ浜を含めて固まった。

すると田陣の中からボソボソと話し声が聞こえてくる。

「ヒキタニ君、や、ヤバイ超はずい」ヒソヒソッ

「うるさい俺もはずいんだ黙ってやれ」ヒソヒソッ

「……うう……」

「いいから早くしてくれ、早く」ヒソヒソッ

「う、うむ。コホンッ」

「絶対絶対葉山チームに勝つぞ!!!」

「「オオオオオオ!!!」」

………シーン。

「なに………あれ………?」

「わ、わかんない………」

「戸部達、何やってんの?」

ザワザワザワザワ。

会場はざわめき、どうすれば良いのかという空気が流れる。

「ひ、比企谷?」



ビィイイ!!

「!?」

そこで鳴り響いたのは休憩終了のブザーだった。

「……………いくぞ。」ボソッ

四人は頷く。

「へいへい!! 休憩終了だぞ! 早くコート入ってこぬか!」

……………!

急に材木座のヤジが葉山チームに投げられる。

そこから一斉にチームヒキタニからヤジが飛ばされた。

「そうだよ! 他の試合もあつて時間無いんだから早くコートに来てよ!」

「そうダゾー!! (裏返し)」↑城山

「おらおらジャンプポールだぞ! 戸部はもうスタンバイしてんだぞ!」

急に飛ばされるヤジに葉山チームは混乱しているっ!

「は？へ、は？」

「比企谷……」

—————

啞然とする会場、そして葉山チームを見渡しながら俺はニヤリと笑う。作戦の成功を確信して。

今俺たちは葉山チームに対しヤジを飛ばしている。

そう、後半開始は休憩終了のブザーと共にジャンプボールをして試合開始をするルールブックに書いているし、それがマナーだからだ。

にもかかわらず、葉山チームはジャンプボールをスタンバイしてないどころか、誰一人コートに入っていない。これは重大なマナー違反だった。

こちらのチームはもうコートに入り、戸部はジャンプボールのスタンバイも終わっている。審判さんだってボールを準備しスタンバっている。

なのに葉山チームは未だにベンチにいるとかどうなってるんだ？

「くつ、皆！ ジャンプボールは俺がやるから早くコートに！」

葉山の号令で焦りながらコートに入る葉山チーム。俺達はその間もヤジを止める事はしない。

「ほ、ほらほら！ 他の試合もあつて時間無いんだから、早くジャンプボール、ジャンプボール！」

「そうダゾー！」

「お、お前らが訳わかんない事してつから遅れたんだろ！」

当然ながら相手チームから文句があがる。しかし、その答えは用意してある。

「は？ 俺達はただ試合前に円陣組んでエールしてただけじゃないか。体育会系じゃ当たり前だろ？ それにブザー前には静かにしてたし、時計を隠したりなんかしていない。お前らが勝手に俺達のエールを鑑賞してただけだ」

大岡はぐぬぬつと悔しそうだ。

俺は一切間違つた事は言っているつもりは無いし、ルール違反だつてしていない。寧

ろグレーゾーンなのは葉山達の方だ。

そこで戸部から注意を受けてしまう。

「皆やめるっしょ！ そんな汚い言葉は止めて、試合に集中しようぜ！ キリッ！」

うわゝ、戸部さんスポーツマンみたいでかっこいいわゝ。

てか口でキリっとか言うな。

これでヤジを飛ばす俺らの中で戸部は混ざってない事をアピールする。

そしてヤジも言葉を選んでいた。

誹謗中傷はしていない、ただ、マナー違反について文句を言ってるだけだ。

だが相手が誰であれ、非難されるのは気持ちの悪い事じゃ無いよな？

自分に非があると感じてても、俺たちの行動に腹を立てたとしても、どっちだろうとハーftimeに受けた激励や心の準備を吹き飛ばすには十分だ。

「ほら審判さん、もう相手もコートに入りましたしジャンプボールを」

急ピッチで準備を開始した葉山チームがスタンバイし、ジャンプボールの体制に入

る。

「くっっ！」

「おっしやー！」

ジャンプボールは完全にスタートを挫かれた葉山が遅れ、戸部が弾いたボールが俺達のゴール側に飛ばされた。

「……!?」

そのボールはスタート時点で俺達が占領しまくっている葉山ベンチ側、そこには俺達四人がしきつまっていた。

「よし、ボール来たよー！」

「確保！」

「↑大岡

「ふぬうううう!!」

「取ったぞお！」

急かされた葉山チームはコートに入るもポジションニングが甘かった。ゴール下は大

岡しかおらず、スタートから四人でゴール下を確保した俺達四人に牧のごとく取り囲まれ大岡は何も出来ない。

ボールを確保した城山がボールをゴールに叩き込み、俺達はシュートにいった城山以外でダツシユで戻る。

「ナイツシユー!!」

「ナイツシユー! 城山!!!」

「ナイツシユー」

「ウオオオオ!!」

必要以上にテンションを高めるチームヒキタニ。チーム内での励まし、咆哮。勢いをどんどんつけていく。

「……? なんだコイツら、急にテンション超高くなりやがった」

「な、なにあれ〜?」

とうとう観客側にも不自然さが伝わった。

人と接してゐる際、テンションを合わせるといふ事は重要だ。楽しいであろう話をしてゐる時には明るく、怒られたらシムンとする。

人が無意識に行うコミュ力の一つだろう。

これに落差があると人は一気にさめる。

面白い話をしたと思つて、ふん、しか返つてこないとテンション下がる。

真面目な話をして、マジうけるとか言われるとテンション下がる。

好きな子に愛を囁いても相手がなんとも思つてなければ皆に曝されてテンション下がる。

誰の体験談かな。

だからお互いのテンション管理はコミュニケーションではかなり大事と言える。

どうだ？

相手だけめっちゃ必死だと、超ひどくだろ、テンション下がるだろ。前半やった、相手の空気を読む能力を利用した戦術の応用編だ。

開始のタイミングを戦国時代の武士達の如く声と勢いで出鼻をくじき、なんだか解らないうちに相手だけめっちゃ勢い付いている、うわ相手にしたくね。

勿論これは皆の笑い者になる。

特に俺や材木座みたいな奴がこれをやるとそれはもうゴキブリを見るかの如くだ。

だが、戸部の御笑いキャラなら後から笑い話にする事は十分出来るし、戸部には汚い所はやらせてない。

それに、葉山ならどうせ間もなく“本気でぶつかり合う熱い戦い”に変えてくれるし、後の戸部のフォローだってしてくれるだろ。

だから、この勢いのうち相手に息を尽かせないまま策をぶつけていく。

「落ち着いて、とにかく一本取るぞ！ 相手の勢いに誤魔化されないで、楽しくやろう！」

葉山がディフェンスに下がりがら周りに指示を出す。

そこに俺が立ちふさがった。

「……後半は比企谷が俺のマークか。色々小細工してくれるな」

「人間はいつだって、勝てないと思われる相手にだって、作戦や工夫を尽くして勝利を掴むんだよ」



前半はゾーンだった俺達だが、後半はマンツーマンでいく。

オフェンスに力をさかせたい戸塚と体力切れの材木座は……、ええつとA君B君に、大和には城山、消去法で葉山には俺を。

そして一番の狙い所、大岡 v s 戸部だ。

戸部がドリブルをしながら、大岡と牽制しあう。

「いや全くなんだよお前ん所のチーム（笑）すげえなある意味」

「……」 ダムダム。

「何、お前も大変だな。大丈夫なん？」

「……」 ダムダム

「……ええと、戸部え、反応無し？」

ダンツ！

「え？」

戸部は大岡がきよどつた隙を見逃さず、その一瞬で大岡を抜き去る。

「!？」

ガアン！

戸部は渾身のダंकを叩き込み、定位置に向かって走り出す。

「……ごめん大岡。俺ちとマジだから、後でね」

通り過ぎる一瞬で戸部はフォローをし、それ以上話す事なく次のスタンバイを始める。

「な、は？　おいおい待てよ、おっい！」

戸部が急におどけるのを止め、真剣にプレイを始めた時、その変化で一番混乱するのは誰か。

それは雪ノ下いわく風見鶏大岡だろう。

読み通り大岡はひきつつた笑いで、おどおどし始めた。

人の顔色を伺う大岡だから、普段明るい友人の変化に付いていけず、寧ろ内心何か怒らせたのではないかと不安になっているかもしれない。

「あー！」

バシッ!

混乱した大岡が苦し紛れに葉山にパスを出す。それがそれを葉山にやられたように戸部がスティールをかます。

「速攻!」 シュッ

戸部はボールを戸塚にパスをし、戸塚の放ったボールは見事ゴールネットをくぐる。

「あ、わ、悪い隼人君」

「気にするな大岡。次取り返そう」

悪いな大岡。多分お前も良い奴なんだろう。

お前の優しさに潰け込むように悪いが、今回は戸部の味方でお前の敵なんだ。だから、容赦なくお前の優しさという穴を突く。

「戸部があんなに本気になるなんてな。また君が何かやったのか?」

葉山と向かいあい、マークすると話しかけてきた。

「何もしていない。あいつが凄いだけだ」

「……そうか」

……グッ!

ザンッ!

「……」

葉山が俺を置いてボールを持つ大岡にヘルプにいかうとするが、体重を前に乗せたタイミングで進行方向に割り込み、葉山の邪魔をする。

「悪いが、今大岡に楽をさせる訳にはいかないんだ。ピンチになったら、あいつはまずお前を頼るだろ? だから、俺はただひたすらお前にまわりつく。ボールを持ってようが持つてなかるうが、な」

前半材木座がやったなんちやってストップンディフェンスだ。

「……厄介だな」

葉山のキツイ目線から、反らす事なく真正面から見据える。

油断なんかしたら一瞬で置いてかれる。

大岡を追い詰めるまでは、絶対コイツを自由にはしない。後半終了まで体力が続かなくても良い、俺の全てでコイツを止める。

俺の得意分野も使ってな。その名も、口撃だ。

「…………お前さ。進路調査の時教室で大岡に少しムキになったろ？」

葉山は俺が話し出した瞬間、右から抜こうと一步を踏み込む。

俺はなんとか反応し、再び進行方向に割り込んだ。

「…………だからなんだ？」

「あの時、戸部に空気を變えて貰いたくて、話をふったんだろ？ お前が誰かを頼つたのを俺は初めて見た」

葉山は体制を變え、背中を俺に向ける。

俺は審判に見つからない程度に裾を引っ張つてやる。

「…………く、お前！」

「デイスティニーん時お前が一色と三浦に囲まれて困つた時、戸部がお前を助けにいったろ？ お前を助けた、いや、そもそも完璧超人のお前を助けようなんて考える奴、俺は戸部しか知らない」

グ……………!

葉山が裾を引っ張られるのを嫌がり、回ろうとした時を見計らい葉山の足を向く方向をねじ込む。

「キャンプも一緒、部活も一緒。俺の知る中で、お前が学校の男友達で一番大事なのは戸部だろ?　そしてお前を一番に思ってる男友達も俺から見ただ所戸部だな。なあ、その友達が今本気になって勝ちたいと願ってるんだ。どう思う?」

「く、お前な……………」

こうしているうちに俺達のチームは得点を重ねる。葉山は俺の言葉に、大岡は戸部の態度に翻弄され、振り回されていた。

「……………くう!」

「……………ぬんっ!」

大和もゴール下で城山により中に入れず、ボールを持ったまま何も出来ずにいる。

前半、城山は体格に恵まれた自分を自覚し、相手に怪我をさせないように気を向けていた。

しかし今は球技大会に全力を尽くしてくれている。城山も戸部と同じ、本気になってくれたのだろう。大和はやけばちシュートを放つも城山によりカットされた。

「やるな城山！」

「……お前もな！」

やだあ、なんかあそこだけ温度が違う。むさくるしい。

二人共デカイから威圧感半端ない。

城山は戸部にパスを出し、戸部はそれを受けとるとゴールに走り出す。大岡が頑張つて追いかけるが追い付かず、再び戸部によるダンクが叩き込まれた。

「……よし！」

「戸部先輩！」

急にコート外から声をかけられたと思うとそこには一色がいた。すると一色は指でコート内を指し戸部を誘導する。

「次は大岡先輩にボールを集まるよう誘導して、そこからプレッシャー？ をかけて  
いって下さい！」

「おう！」

急な指示に戸部はなんの疑問もなく応じる。

一色、お前監督みたいな事出来たんだな、と驚いていると一色が携帯を片手にウイン  
クしてきた。

見ると雪ノ下も携帯を片手に戸塚に指示を出している。

なるほど。考えがあるってこの事か。

確かに前半雪ノ下はメガホンを使っただけだがその指示がコート全体に届く事はな  
かった。

その為主力で常に走り回らなければならなかった、特に指示を迅速に出したい戸部へ  
の指示が遅れがちだった。

これならフルコートで伝達が可能で作戦から実行迄のラグをかなり解消する事が出  
来る。

「……三浦先輩に見付かったら怒られますし、葉山先輩にこんな所見られたら点数下  
がっちゃうんですけどね」



一色は戸部への指示が終わるとがこそそこそこコートを移動し、可能な限り小さい声で伝えられるよう勤めていた。

それ、多分焼け石に水だと思っただけ。

葉山側のコートから由比ヶ浜達の応援が聞こえる。見れば跳び跳ねながら全身で応援している由比ヶ浜と楽しそうな海老名がいた。

「とべっち！ 凄いよ！ 凄い凄い！」

「とべっち、かっこ良いよ！」

「……よっしや！ 次いこう！」

戸部は歓声に片手を上げて少し答えると再び走り出す。その態度は前半とはうって変わり、凛々しい物だった。

俺も、再び葉山にこびりつく。

次々と点差を埋めていく俺達に会場は混乱をしていた。

「……とべつち、本気だね」

「……」

由比ヶ浜の言葉に、海老名は反応を返す事なく試合を眺めていた。その視線は、いつもヘラヘラと薄っぺらい笑顔を浮かべる男の、必死に戦う姿だった。

すると観客の中から不穏な声がしてきた。

「ねえ、相手必死すぎない?」

「……!?!」

聞こえてきた声は、何か人を馬鹿にしたような声音で悪意に歪んでいた。

「ね? 葉山君の活躍見に来たのに、全然見れないし。何あれ、隼人君に対抗するつもりなのかな? ちよつとマジになりすぎだよね」

「ちよつとヒクよね。相手、正直面子ビミョくだしね」

「わかるわかる〜！ 戸部は軽くてヘタレで眼中に無いし、戸塚は女みたいで全然ときめかないし、後は知らない人ばっかじゃね〜？」

葉山を見に、わざわざ他のクラスや学年から集まった女の子達が戸部達に批判の声を上げていた。

体育館の中の、陰険な言葉に由比ヶ浜は胸を締め付けられた。

その7 最後の力を振り絞り、そのシュートは放たれる。

後半開始からしばらくたった。

「リバウンツ！」

後半に入り、追い詰められていたはずのチームヒキタニによる追い上げにより、一回ゴールを決められながらも、なんと同点に迄あと2点、という所まで追い上げていた。

そして今、再び点差を広げようと放たれた葉山チームのシュートのリバウンドを狙い、ゴール下で城山と大和が競り合っている。

後半、何分経過したのか。

それを今の俺に見る余裕は無かった。

「……ハア……ハア……」

もう喉がカラカラだ。冬だつてのに体が熱い。

相手チームのエース、葉山隼人を邪魔し続けた俺の体力はもう殆ど残っていないかった。

こいつ、どういう体力してんだ……。

俺は葉山を睨み付ける。

後半が始まってからありとあらゆる手を使って葉山を妨害してきた。その成果あり、後半葉山は前半ほど驚異的な活躍をしていない。

だが、コートを縦横無尽に走り回り、こちらが少しでも油断すればあつと言う間に抜かれ、置いてかれる。

俺は後半ボールに触っていない。

ただ、葉山の周りに引っ付いているだけだ。

だが、そんな状態で走り回っているにも関わらず葉山に疲労の様子は無かった。

なんちやつてスツボンディフェンス。

これ、すつげえスタミナ使うな……。

山王の一ノ倉、やっぱあいつも王者山王だ。

今さらだけどすげえよあいつ……。

疲れきつた体を押しして、腰を落として張り付く。

「……もう限界だな」

……!?

葉山の一言を認識する頃には、葉山は既に俺を抜きゴール下へ移動していた。

……くそつ……。

無理だと解っているが、精一杯やろうと葉山に手を伸ばす。しかし、俺の手が葉山の妨害になるはずもなかった。葉山はシュートの体勢に入った。

「ウホホホッ！」

……!

突然の奇声に意識が戻される。

そして俺が伸ばした手の先を見ると、シュートの為に飛び上がった葉山と、その

シュートを後ろから叩き落とした男の姿が入った。

「ゴール下のキングゴング三世!!!」

「戸部!」

弾かれたボールは城山の方に飛んでいき、見事ボールを奪い返した。  
反対コートへ皆走り出す。

そして戻りながら俺の肩を叩いていく戸部。

「ヒキタニ君! あとは任せるっしょ!」

そして戸部は皆の後を追った。

「比企谷君」

肩で息をする俺の背後から雪ノ下の声が響く。

「……お疲れ様。後は貴方は葉山君マークを外れ、大岡君について頂戴」

そうして俺は時計と点数を見た。

「やっと終わった、か」

ようやく、俺が葉山に付くノルマが終わった事を確認した。大きく息を吸い、呼吸を整える。

「ええ、お疲れ様。貴方にしては良く頑張った方じゃないかしら？」

雪ノ下の労いに俺はいつも通り、減らず口で返してやる。

「まだ終わってねえし。それに俺にしてはってなんだよ。寧ろ全体で見ても超頑張ってるし俺」

雪ノ下は少し微笑むと、再び試合に集中した。

……ふう。

俺も気分を入れ換え試合に戻っていく。

もうクタクタだ。だが、一仕事終わったという事実が、少しでも元気を与えてくれた。

次のマーク対象者の前にいき、再び体を広げる。そこには俺と同じように消耗しきった大岡がいた。



「……………く、……………う……………」

大岡の背はまるくなり、息をするたび肩が上下している。目も誰かみたいによんどんでいた。

……………やれやれ、御互い大変だったな。

マークする敵とはいえ同じような苦しみを味わっていた大岡に少しの親近感を感じざるおえなかった。

自分と同じ苦労をしている人間を見ると何故か励まされる。

心が暖かくなり、大岡に“お疲れさん”と心の中で労いつつ、俺は再びスツポンもどきを開始した。

……………ぐい。

「ヒキタニ、すそ引つ張んな」

ワアアアア!!

とうとう葉山チームが追い付かれ、葉山チームへの応援が熱くなる。

「は・や・ま! は・や・ま!」

ボールは葉山が確保、そこに戸部が立ち塞がる。

「隼人君! 悪いけど、負けねえから!」

戸部の宣戦布告に、葉山は困ったように微笑み、そして回転しながら戸部を抜こうとする。

戸部は回転に惑わされる事なく、ボールに手を伸ばし弾いた。

葉山はこぼれそうになるボールを器用に拾い、確保する。

「……部活もこれ位真面目にやれよな」

やむ無く葉山は大和にボールを戻し、そしてボールをリターンして貰おうと走り出

す。

「俺はいつも真面目っしょ!」

葉山を追い、大和と葉山の間に入るように走り出す戸部。  
そして大和からのリターンを見事カットしてみせた。

きやあああああ!!

会場から悲鳴が上がる。

葉山がやられるのを会場の殆どの人間が望んでいない。中にはブーイングを出している奴もいる。

「葉山君頑張って〜!!」

「きやああああ! 負けないで〜!!」

「戸部引っ込め!」

おお、怖い怖い。

しかし、前半気になって仕方なかったであろう会場の声はもう戸部には聞こえていないようで、そのままゴールに走り出した。

だがその先には葉山チームAがスタンバイしていた。後ろには葉山が立ち塞がる。挟み撃ちの形になった。

戸部はとつさにゴール脇に待機していた戸塚にパスを出し、左回りに相手を避ける。

「戸部君！　お願い！」

相手を抜き、戸塚からのリターンを受け取ると、戸部はゴールに飛び上がった。

ダンツ………！

会場に鈍い音が響く。

ゴールリングにボールが入る事はなかった様子だ。そして……、

「痛っ……」

そこにあつたのは戸部が覆い被さる形で倒れ混む葉山の姿だった。

会場から悲鳴があがる。

「葉山君大丈夫!? ちょっと戸部、葉山君に何すんのよ!」

「マジありえないんですけど! ひどくない?!」

「葉山君怪我してない!? 可哀想〜!」

やれやれ、今のワンプレーで戸部にヘイトが向けられてしまった。

……随分な言われようだが、今のプレイは戸部が飛び上がった後に割り込んだ葉山のファウルだ。現に戸部にフリースローが与えられた。

しかし、それが会場の熱気に油を注いだようでさらにブーイングが激しくなる。

「ハアアア!? なんで戸部のフリースローな訳え!? おかしくない?」

「葉山君可哀想〜！」

「意味わかんないんだけど！」

ギヤアギヤアとすさまじいブーイングが始まってしまった。ルールや結果がどうではない。

あいつらは葉山の味方で、葉山のサポーター気取りなのだ。

「は、隼人君、ごめん。大丈夫？」

戸部が葉山に手を伸ばす。

葉山は手を取り、微笑み返しながら立ち上がる。

「今のはどう考えても、俺が悪い。すまなかった」

立ち上がると、葉山は会場の誤解を解こうと今のプレイを説明する。

しかし会場のブーイングは暫く止まらなかつた。なんとか誤解を解こうと試みた葉山が何を言っても葉山君優しすぎ、と返してくるだけだつた。

今の会場は何を言っても一度言った言葉を引つ込められないのか、葉山の味方をしたのか解らないが止まる気配が無い。

そのやりとりをやれやれという気分で見つめていると、ゴール下にある葉山ベンチにいた由比ヶ浜の様子が目に入る。

由比ヶ浜は、会場のブーイングに負けないように俺達を必死に応援してくれていた。……その声は、どんなに周りも煩いにも関わらず耳に入ってきた。

—————

葉山チーム ベンチ

由比ヶ浜・サイド

時計が止まり、数分後。

ようやく会場が落ち着きを取り戻し、戸部のフリースローの準備が始まる。

ゴール下にぞろぞろ待機する両チーム。

「とべつち、大丈夫かな……」

戸部を心配する由比ヶ浜。

三浦も観客の一部に呆れていた。

「隼人が何言っても聞きやしないしき。本気に隼人の味方なのかって言いたくなるよね。ねえ、姫菜」

「……そうだね」

……？

心ここに有らざる様子、海老名に二人は疑問符を浮かべた。

そうしていると、由比ヶ浜にとって信じられない言葉が耳に入ってきた。

「ていうかさ、ありえなくない？　なんで戸部のフリースローな訳え？」

「倒されたの葉山君じゃんね？　マジありえない」

「誰も戸部の活躍なんか見に来てないってのね」

「!?」



由比ヶ浜達の後ろで他クラスや他学年から集まったと思われる女子達が内緒話、というには大きすぎる声で文句を言っていた。

今までも材木座や比企谷に対し、小馬鹿にしたような声が聞こえてきた。必死すぎ、みたいなの。しかし、今は葉山に突っ込んだ事で戸部が攻撃対象になっちゃった。

「戸部さ、葉山君の金魚のフンのくせに張り切りすぎだよ。それで葉山君に迷惑かけるなんて信じらんない」

「ていうかさ、いつも葉山君に付きまとうのつてさ、おこぼれ目当てなんじゃない？」

「ありえる〜！」

あまりの言葉に由比ヶ浜は戦慄した。

拳を握りしめて、小刻みに震え、息を飲んだ。

しかも彼女達の話は、もはや試合中のプレイの話ではない、悪意に満ちた笑い話へと変化していた。

「でもさ、葉山君と戸部だと、ブランド品とセール品って感じしない？」

「あるある！ 正直、戸部ってなんか言えげなんでもやるじゃん？ 安売りしすぎだよ  
ね〜！」

あんまりだ。

戸部の優しさを馬鹿にした。今、必死で頑張ってる彼を侮辱された。葉山との友情を馬鹿にした。

噂話をする女子達に振り返り、由比ヶ浜は息を吸い込んだ。

「あんたたちさ……!」

「煩いなあ!!!」

しかし、由比ヶ浜が怒鳴るより先に、誰かの怒号が鳴り響いた。

突然の覇気のこもった怒鳴り声に、女子達や由比ヶ浜は止まり、そこにいた三浦ですらびくついた。

「い、今のだれ……?」

「わ、わかんない。超怖くなかった?」

誰かも解らぬ怒鳴り声にざわめきだす。  
そして由比ヶ浜は声の主に振り向いた。

「ひ、姫菜……」

海老名は表情を変える事無く試合を眺めていた。割れ関せず、という風を装って。

「今の声、海老名さんじゃない？」

「マジ？ あんな声出すの？」

だが、とうとう声の出所がバレ、注目が集まってしまった。ひそひそと海老名を指差しながら話をする。

海老名は何も言わず、平然とした顔で前を見続けた。

だが、彼女の手はかすかに震えている。

「姫菜……」

由比ヶ浜が海老名の手を取り、握りしめる。

海老名はその手を優しく握り返し、コート場の彼らをただ見つめていた。

その様子に、三浦が大きな溜め息をついて髪を払う。由比ヶ浜はただ、その手を握ることしか出来なかった。

「煩いっつったのが聞こえなかった訳え？」

再び響く怒号。

その声は、由比ヶ浜から先ほどの反対側から響き渡った。

その主は悪口を言っていた女子らに振り返り、腕組しながら睨み付ける。

「え？　え？　三浦さん？」

急に向けられた敵意にひそひそ話をしていた女子達がびくつく。

三浦はそのままその女子達に向かっていき、壁を叩く。

「あんね？ あーしも隼人の応援だけどき、戸部だって一応あーしの友達なんだよね？ ソレを悪く言われるとあーしだってムカつくに決まってんじゃない？ わかる？ わかるよね？」

ひい、という声を出して怯む女子達。

しかし、その中の一人が反論を始めた。

「い、いや別に、私達も葉山君を応援したかっただけで……」

勇気を振り絞り対抗したのであろうその言葉に、三浦の額にビキツとした何か走る。

「あ!?! 煩いって言うてんの！ わかったかって聞いてんだって!」

有無を言わせぬ三浦の威圧の前に女子達は無言でコクコク頷いた。そしてさくつと蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

彼女らが散っていくのを、そして周りのヒソヒソと話をしていた連中が静まるのを確認すると、三浦はふん、と鼻を鳴らし髪を払う。そして海老名達の横に戻ってきた。

「…………たくっ」

「優美子！」

由比ヶ浜が三浦に飛び付く。

嬉しそうにはしゃぐ由比ヶ浜に照れ、頬をかきながら引き剥がす。

「別にあーしもムカついただけだしっ……………」

照れながら髪をくるくるさせる三浦は海老名の隣に戻っていった。

「……………」

「……………」

海老名がボソリと呟き、三浦は微笑んだ。

そんな時、コートの中では戸部のフリースローが放たれた。

パシユ！

リングをくぐり、ネットをくぐる音が鳴り響く。

そして、見事ゴールを決めた戸部が拳を天井に掲げ、微笑んだ。

「入ったあ!! やった入った! ヒキタニ君!」

「良いから戻れ! 次来るぞ!」

フリースローが入ったのが嬉しかったのか、やべー、やべー、言いながら走っていく戸部。

その笑顔は前半とうって変わって、試合そのものに真剣に、そして楽しそうに笑っていた。その笑顔は、普段の彼のソレとはどこか違って見えた。

「……こつちの事なんかまるで知らないで、はしゃいでるね」

由比ヶ浜が微笑み、二人の顔をみやる。

「まー、戸部だし、いいんじゃない?」

「そうだね。戸部っちだしね」

女の子三人は優しい笑みを浮かべながら、再び応援を開始する。

「ヒッキー！ とべっち！ 頑張れ〜！」

「隼人も負けんな〜！」

その応援席にはもう、先ほどのような悪意の声は無い。ただ、純粹に、コートの上の選手たちを応援したいという気持ちの籠った声援だけが響き渡った。

—————

時計を見る。

残り、三分つて所か。

点は同点、前半からは考えられない健闘ぶりだ。

ボールを持った葉山に、戸部は必死にディフェンスを繰り広げる。



葉山が抜こうと戸部の後ろのゴール下に目を配る。

しかし、そこには城山によってガードされた大和と戸塚にガードされた葉山チームのAによってゴール下は溢れている。

ボールに集まる初心者の方、それにより葉山の折角の運動能力がいかせず攻められずにいた。

「隼人君、俺もうキツいわ……」

「それは俺もだよ……」

もういくらなんでも戸部も葉山も限界だった。

二人共肩で息をしている。

お前らが限界なら、俺はもう限界突破してるつての。だから……。

パシッ。

「……なっ!?!」

お喋りしてる間に俺がボール貫つてくぞ。

さっさと終わらせたいからな。

背後から近付きボールを掠め取る。

「くっ！ 比企谷！」

よし、とうとう葉山を出し抜いた。

後ろから近付く俺に気付いた戸部が葉山に話し掛けた所を狙った。

葉山が此方に気付くも、もう戸部が邪魔に入る。

いやキツイ。キツくてやばい。

だが、折角のチャンスに飛び付かずにいられなかった。得意のドリブルでゴールに向かい走り出す。

後少して試合が終わる……！ あと少してこのキツイ戦いが終わる！ そう思うと自然と元気が沸いてきた。

これはアレだな。試合が終わったらカラカラに乾いた喉を潤す為にもマツカン2本を一気に飲んじやおうかな。やだ、そんな贅沢した事ない！ 歯と一緒に脳もとろけちやいそう！

「いかせるか！」

……あ、

物思いにふけた一瞬をつかれ、大岡によってボールを弾かれてしまった。

やるな、大岡。俺の意識の隙間を狙うとは……。

だが、大岡が弾いたからこそこっちボールからだし比較的ゴールにも近い。ここからならチャンスはまたあるだろう。

そう見切つて大岡にボールを取られないように大岡の前に出てボールを追うのを妨害する。

「ふんがつ」

……ん？

そんな俺の考えを欠片も知らないボールに突っ込む1人の男の姿が、視界をよぎりコートから飛び出した。

……お前、コートから出たボールを追い掛けた花道がかつこよかつたって言ってたけど、今それやんなくても良いだろ。出ても、こっちボールだし。

そして飛び出した男は空中でボールをキャッチし、俺を見た。

「……ヒキタニ君！ 後、よろしく！」

飛び出した戸部は俺の方にボールを飛ばし、そして壁に激突していった。

ガァン!!

「……と、戸部!!」

背中から壁に。突っ込んだ戸部を見て葉山が大声をあげた

……だか、ナイスだ戸部。

戸部から受け取ったボールを持ち、一気にゴールに向かい体を反転させる。その俺の行動を邪魔するものはこの場には存在しなかった。

何故なら、今、この瞬間特殊空間が作動したからだ。

その名も、戸部式「ザ・ワールド」

目の前で、ボールを持った俺を見る事無く固まる大岡、そして後ろにいる葉山の意識は完全に俺から離れている。

なんなら大和、うちのチームの優しい戸塚あたりも固まっているだろう。

そう、戸部を心配したからだ。

ダムツ！

「……は！ まずい！ 比企谷を！」

「あ、あれ？ やべっ！」

ザ・ワールドが解除され、葉山たちの意識が戻る。だが、もう遅い。お前たちが邪魔するにはもはや位置が悪い。

俺はドリブルだけは得意だ。よって一気に十分な距離を離す事くらい出来た。

俺ははつきり言つて戸部に興味が無い！ だけど戸部が本当に大事な奴は視界も意識も壁に突つ込んだ戸部に向けられる。

つまり、戸部に友情を感じている者だけが固まり、戸部に興味が無い者だけが動ける一瞬。それが戸部式「ザ・ワールド」だ！

大岡と葉山を置いてきた事によりゴールまでがら空きだ。俺は真っ直ぐゴールへ向かう。

「させるかあ!!」

……!

横から妨害しようと割り込む奴と、前から迫る奴が1人づつ。

そうか、戸部に興味が無い奴は俺だけでは無かったな、葉山チームA君、B君。

後少しでゴール下まで行けたのだが、すんでの所で挟まれてしまった。

なら、後はあいつに頼むとするか。

俺は雪ノ下に反対されていた仙道式パスをかましてやる。

俺に仙道みたく動き回る味方にパスを出すような技術は無い。

だが、お前はそこにいるだろ……？

材木座！

「ふしゆる〜!! ふしゆる〜!」

「いい、いつのまにお前がそこにいるう!!」

A君が良いリアクションをしてくれた。

説明する。材木座はずっとそこにいた！戸部のフリースローの時からずっとな。

何故ならバテていたから。

でも解らなかつただろう？

何故なら材木座は全くボールに触っていないから。最後の接戦の時に、全く活躍をしていない男にまで意識を向ける奴なんてそういない。

これが材木座式ミス・デイレクションだ。



「ふしゆるく、ひい……ひい……ひい……」

材木座は息も絶え絶え、顔の穴という穴から出せる汗を出しながら立っていた。そう、あいつも最後の最後まで、試合で戦っていたんだ。

材木座の様子にヒいている観客もいるだろう。

だが、お前には聞こえるだろうか？

お前の為の声援が。

「いけく!! 中2い!」

「えくつと、中2先輩、がんばろ!」

「ザイモクザキ君、いけえええ!」

誰一人お前の正しい名前を言っていないが、お前を応援する声が聞こえるだろうか？  
どうやら聞こえていたようで、材木座はフツ、と微笑みを浮かべてシユートフォームを決めた。

「ハア……ハア……、ふ、フハハハ！ く、喰らうが良い！ 我がひ、必殺！ メテオ・ドライブ・シユートを!!!」

そして材木座は、最後の力の全てを乗せたシユートを放ったのだった……。

## 終章 戦いの終わり

その8 試合は終わり、そしてその依頼は終わりを迎える。

わー！

コートを走り回り、一つのボールを取り合う男達。

葉山チーム対チームヒキタニの試合は壮絶な物だった。まさかの逆転劇、葉山のアクシデント、チームヒキタニの暴走。

今はもうあの激しかった試合が終わり、決勝戦の最中だ。

あれから勝ち進み、様々な試合があつたが正直、あの試合ほどの接戦は無く苦戦もさほどしていないだろう。のびのびとプレイをしている。

仲間同士、苦難を乗り越えた事でより団結した。

もはや言葉が無くても連携が取れるようになったし、お互いが信頼しあっているからこそ遠慮のないプレーが出来ていて、一体感という物を感じる。

この球技大会を得て、絆というものが深まったのだろう。

……………葉山たちが。

ワアアアア!!

3Pシュートが入り、観客達が一斉に沸く。

チームメイト達も大盛り上がりで葉山に集まっていく。

「隼人！ ナイスシュート！」

大岡からのハイタッチに葉山は応え、パチンと音がなる。

「キャアアアア!!」

葉山達の活躍に、会場はこれでもかという位大盛り上がりだ。あの試合とは違い、会場はまさに青春の球技大会といった輝かしい試合が続いている。

あんな気まずい試合は一切なかった。楽しそうに皆がハイタッチし、空気を読んで楽しい思い出作りにあけてくれている。

そりゃそうか。

運動の出来る、リア充どもばかりが勝ち進み、あまり目立たない人間らは軒並み一回戦で沈んでいったのだから。

……因みに、あの時の材木座のシュート、なんと見事にゴールリングをくぐった。

材木座も初めてのシュート成功にわき、大声で吠えた。その材木座の所に戸塚や戸部が走りより、その健闘を称えた。

しかし、流石はチームヒキタニ。そうすんなり事は運ばれない。審判により戸部が壁に激突し、危険があつて皆停止した中のプレイだったから取消、と審判に言われた。バスケの試合でも、誰かが怪我をした場合は試合と時計が止まる物らしい。

だがそんな事、俺と雪ノ下は納得いかなかった。何故ならあの時審判は戸部に目を奪われ思考停止し、笛をならさなかったからだ。

よつて俺たちはかなり本気で審判を論破しにかかった。

俺からは審判の制止がなかった以上はプレイは有効だと騒ぎ立て、雪ノ下は審判の職務怠慢について延々と語る。葉山が仲裁に入る事すら躊躇う程の国語一位と三位からの言葉のリンチに学生審判は息も堪え堪え、涙目になりながらその点数を認める事となる。

だが結局、残り時間数分で葉山による逆転劇により点数をひっくり返されてしまった

のだった。

まあ、俺も材木座もスタミナ切れでほぼ棒立ちだったからな。

葉山チーム一齐にゴールに詰め寄せられ、城山も戸塚も頑張ってくれたが葉山のシュートが入った時点で試合終了の笛が鳴らされた。

-----

「……ヒキタニ君、マックスコーヒーわけて」

「もうない」

俺達は体育館のステージ横でぐったりと背中合わせに座っていた。もう、立つ元気も無い。

戸塚は今、俺らの代表で決勝戦の審判をやってくれている。自分も疲れているだろうに、マジ天使。

城山は試合が終わると何も言わずに体育館を出ていった。別れ際に御礼を伝えた所、城山は無言で親指を立て微笑み返しながら去っていったのだった。

ウホッ、良い男。

材木座は、俺達の横で寝そべってピクリとも動かない。死んでないよね？

そして俺と戸部はベンチを追い出されてからはここでグツタリと座り込んでいた。

「いや、きちつしよ。人生の中で一番疲れたわ」

その人生で一番、コイツこれからも何回も言うんだろうな。そんな気がする。

なんでもその時が一番になる。今を全力で頑張ってるんだ、と取れば言葉に軽薄さが感じなくなるのかもな。

そんな俺たちに、神の恵みがもたらされた。



「はい、お待たせ」

声の方向に顔を上げると、雪ノ下と由比ヶ浜、そして一色がスポドリを抱えて現れた。「はい、ヒツキー！ お疲れ様！」

飲み物をきらした所、動けない俺達に変わり、コイツらは飲み物を買ってきてくれた。彼女らが今は天使に見える。

「あんがと〜!! もう、体に水分残ってないっしょ！」

「それ死ぬだろ」

「中2せんぱ〜い、生きてます〜？ 飲み物、ここ置いときますよ〜」

スポドリを片手に一気飲み。

背後で戸部も同じように飲んでいる。

くうううう！ 悪魔的だああ！ こんなスポドリが、試合で火照った体に染みわたる、乾いた体を癒す！ 旨すぎる！

カイジの気持ちだが、今は心から解る気がする。あのビール飲むシーン流せばそこのCMより売れる気がするんだけど。本当おいしそう感凄い。

「……なんかCMみたいな絵面ですね」

「あら、比企谷君みたいな目をしながら飲まれても不味そうにしか見えないから、あまり宣伝効果は無さそうね」

背中合わせにスポドリをラツパ飲みする姿がそう見えたようで一色が感想を漏らすと、雪ノ下が意地悪そうに笑い指摘する。

一色は思いついたかのように“はたっ！”と手を叩く。

「先輩を起用するなら、飲んだ瞬間CGとか使つて目を超輝かせるとかやれば面白そうですね！ うまいぜく！ キラキラツみたいな！」

ゴフツ!!

ゲホツ……ゲホツ……!

一色の言葉で後ろで飲んでた戸部が口からスポドリを吹き出す。きたねえな。

しかも何、俺の目はCGまで使わないと駄目なの？

ふと気が付くと、雪ノ下が下を向いて動かない。

小刻みに震えている。由比ヶ浜は俺と目を合わせてくれない。超真顔でプルプルしてる。

「……うまいぜー」

「ブハッ！ やめ、止めてよヒツキー！ あは、アハハハハ！！」

「ウハハッ！ ヒキタニ君！ それあるわっ！ アハハハハ！」

大爆笑する二人。雪ノ下はどうとうしやがみ込み、下を向き小刻みに震えている。声は意地でも出さないらしい。表情をかくしてはいるが、もう解ってる。

クツソ……、キリンメツ○辺りに応募して出てやつかな。

戸部も顔ふけ。スポドリ口からたらしながら笑ってんじやねえ。

そして一色、お前が言い出したんだ、指差して笑うな。

ピイイイイ！

そんな馬鹿話をしていると決勝戦が終わっていた。

「隼人！ やったな！」

「イエエエエ！！」

結果は葉山チームの優勝。

勝利を喜び、皆葉山の所に走り出す。

点差を見ると、六点差つけて勝っていた。

ちなみに葉山チームはどのチームにも大差を付けず勝っている。考えたくはないが、軋轢を生まないように、調整とかしてんじゃないかと疑ってしまう。

……こうして俺達の球技大会は終わりを迎えた。見れば、葉山の所には三浦も、そし

て海老名も集まっていた。

「いや、悪いね皆」

コートの中で笑う、葉山チームや海老名達を見ながら戸部は俺達に謝罪する。

「皆、超協力してくれたのに、こんな結果しか出せなくてさ。魚の取り方教わったのに、釣竿落としたみたいなの？」

戸部は微笑みを浮かべながらも何処か後悔を感じられた。多分、今になってああしとけば良かった、とか色々浮かんでいるのだろう。

しかし、だ。

戸部は大きな勘違いをしている。

「何を言っているのかしら？」

雪ノ下がきよとんと首を傾げる。

アレだな、雪ノ下がそんなとぼけた動作するとなんか心がくすぐられる。

「今回の依頼は、勝つ事ではないはずよ。それでしよう?」

「そうだよとべっち! 今回の依頼は、とべっちをかつこ良く目立たせる事でしょ? なら、大成功じゃん!」

……そうだな。

試合に負けはしたが、俺達は大健闘、そして戸部はMVP級の活躍だった。

例えるなら某野球クソゲーオブザイヤーの、センター前までゴロを取りに走るキャッチャーばりに、ポジションも糞も無く戸部は走り回って得点を上げまくった。

あれから見ても、葉山チームをあそこまで追い詰めた奴はいないし、あの時個人で上げた点数で戸部以上に点を取った奴はいない。

「今回の依頼は、戸部君をかつこ良く目立たせる事。……後半戦の戸部君は、とても魅力的だったわ。それでしよう?」

そういうと雪ノ下は戸部に微笑みかけた。

戸部は顔をあげ、そして笑う。

良かったな、戸部。

この学園で、この雪ノ下雪乃に“魅力的”なんて言わせた男子はおそらくお前だけだ。

それは、物凄い事だと、いつも罵声をあびる俺が保障する。

「……そっかな？ あんがと」

戸部の笑顔に、思わずこちらも笑みが溢れた。

雪ノ下は満足そうに頷き、由比ヶ浜は笑った。

一色もやれやれとその様子を見守っていた。

「けれどごめん雪ノ下さん、俺、海老名さんが好きだから……」

.....。

「……は？」

「ソフツ！」

思わず吹き出した口を押さえる。

まるで今、戸部は雪ノ下をふったかのような素振りだった。

やるな戸部！ この学園で雪ノ下をフツた奴はお前が初めてだ。

「なんでそんな簡単に恋愛に結び付けられるのかしら勘違いとしても屈辱的だわやはり訂正するわね相変わらず貴方は薄っぺらいわ恋愛ごとになんでも結び付けるのはいかがなものかしらふざけないで称賛と告白の区別もつかないのかしらなんで私がフラれたみたいにならなくてはならないの我慢ならない」



「ひ、ヒイ！」

戸部が雪ノ下の威圧に再び圧倒される。

まさかコイツに二度もふかされる事になるとは思わなかった。

由比ヶ浜がアハハ……、と頬をかく。

一色は雪ノ下の後ろで下唇をかみ、虚空をながめながら真顔で小刻みに震えていた。

「雪ノ下さん！ ごめん！ 冗談、冗談だから！」

「私に向かって冗談とは良い度胸ね……。そして比企谷君に一色さん、何を笑っているのかしら？」

ギクツと二人で跳び跳ねた。

「ハロハロー！」

そんな時、ナイスタイミングで来客が来てくれた。良かった、今あまりのプレッシャーに体が動かなくなっていたから。

「いや、なんか戸部を怒らせる事したかな？　ってマジ不安になったぞ！」

「ごめん大岡！　俺も必死でさ〜！」

「戸部にしては超マジ顔だったもんな」

試合を終えた葉山グループが、戸部の所に集まってきたようだった。

戸部は大岡や大和とじやれあい、それを三浦や海老名が微笑んで見ている。

普段通り、その風景に俺はなんだか安心したような心持ちだった。

彼等を遠目に見ながら俺はスポドリを飲み干す。

……戸部、お前の周囲の関係は、一度空気を読まなかった位で壊れる物でもなければ

お前がマジになることで離れていく奴らでも無かったみたいだな。

それには葉山のフォローがあったのかもしれない。そこまでする相手とすら見て貰えてもいかなかっただけなのかもしれない。

だが、彼らは戸部が頑張って作った人間関係で、その努力の成果なのだ。俺は思わなくもない。

空になったペットボトルをぶら下げ、俺はひと仕事終えたため息をついた。

「やあ」

そんな中、戸部達から離れたゆとりの国の王子、葉山隼人は何故か俺に話しかけてきた。どこか、とても安らいだ表情で。

なんかその顔が癪に触ったのでイヤミを込めて賞賛を送ることにした。

「お疲れ。優勝おめでとさん」

「ハハッ、心にも無い事言うなよ」

そう言いながら葉山は俺の横に立つ。その姿からは疲れてグッタリとしてる俺達と

は違い余裕しやくしやくで、ムカついた。

「……余裕だな」

「いや？　そうでも無いよ。もうクタクタだし、腕も上がらない。ただ、態度に出してないだけさ」

……ムカつく奴。

「……いや、君達との試合、一番キツかった。正直あそこまで追い詰められるとは思わなかったよ」

「それは良かった。こっちもお前等が一番キツかったよ」

だつてお前等としかやってないからな。お前に負けたから。

ジトリと視線を送りながらお返しの言葉を伝えた。

「全く、君は裾を引つ張るわ心理攻撃を仕掛けてくるわ、あの変顔は特に汚かつたな」  
「だから笑顔だつて。それにな、得意分野を活かしてるだけだよ、俺らは。そうでもしないとお前らに勝てないと思つたからな？　結果それでも負けたけど」

くそ。やっぱりあれだけやって負けるのは悔しいな。

「……けど、楽しかった」

急に葉山の声が優しくなり驚き、顔を見上げるとそこには普段の誰からも好かれる外交的笑顔の葉山では無く、まるでジブリ映画を見た後の子供のような笑顔の葉山がいた。

「全力で倒そうとしてくれて、楽しかった。忘れられない球技大会の思い出になったよ。ありがとう」

……まあな。コイツ相手に勝とうとする奴はそういないよな。実力的に、またはトゥッパークーストへの接待的に。

葉山は葉山でそういう気苦労があるのだろう、そういう同情を持ちかけると葉山は悪戯っぽく笑いだした。

「やっぱり、勝とうとしてくる奴を倒すのが一番楽しいな。君との戦いはそういう所も楽しいよ」

……コイツ、良い性格してやがるぜ。

「隼人〜！ 表彰式いくよ〜！」

いつの間にか話を終え離れていた大岡達から声をかけられる葉山。また、と軽く手をあげると葉山はいつもの外交的な好ましい笑顔に戻り、仲間の所に走っていった。

俺も軽く手を上げ答え、横で戸部がぶんぶん手を振っている。どうやら他の皆も表彰式に向かったらしい。今体育館には俺達と死にかけの材木座しかない。

こうして、今回の長くて辛い依頼は終わりを迎えた。玉縄の時はひたすらメンタルにキタが、今回は体力にキタ。今後はこういう依頼は断ろう。絶対断ろう。そう心に誓ったのだった。

「あ〜、とべつち」

表彰台に向かう葉山チームの中にいた、1人の女の子が此方を向いていた。

ペットボトルの空を集めている戸部と、さっぱり起きない材木座を起こす俺が顔を向

けると、その女の子はとても魅力的な笑顔で手を振ってきた。

「……結構、かつこ良かったよ！」

一言だけ残し、そうして女の子、海老名姫菜は葉山の隣にいた三浦の所に走っていった。

……これで、本当に依頼は終了だな。

ガシヤ。

物を落としたような音に振り向くと戸部は、ペットボトルの空を集めていたゴミ袋を手放し、放心していた。

「戸部？」

「俺、明日海老名さんに告白するわ」

おい馬鹿やめろ。

「いやこれ完全に脈ありでしょうマジで！ やるならいつ!? 今でしょ！」

「まだでしょ！ いちいちネタが古い。いやお前な、女子の言葉にいちいち告白してたらな。黒歴史が増えるだけだぞ！」

「歴史っていうのはな！ 傷を積み上げていく物なんだぜ！ ヒキタニ君！」



「何かっこ良い事言ったみたいになってんだよ、いやマジで止めとけ。今のお前は冷静さを失っている」

「恐れてたら恋愛なんて出来ないっしょ！」

表彰式にみんなが向かう中、暴走したコイツのせいで俺と戸部、そして材木座は出後れ、遅刻を体育教師に怒られる事になったのだった。

学校行事で人の恋愛を手伝わされ、そして教師に叱られる最後。

……やはり、俺の青春の球技大会は間違っている。

エピローグ　それから俺は少しだけ変化した日常に戻り出す。

自転車に股がり、朝の冷えた空気を切りながら学校を目指す中、俺は学校の時計を見上げる。

時間的にまだ余裕がある事を確認すると俺は自転車のスピードを落とした。

球技大会の次の日、俺は何時もの時間に家を出た所、体に凄まじい筋肉痛が走り、自転車をこぐのに苦勞し学校に遅刻しそうになったのだ。

あれから三日ほどたったが、遅刻しないよう早めに家を出るように心掛けていた為か、今日は時間に余裕が出来た、むしろ出来すぎてしまった。

ホームルームまで時間が空いてしまい、どうやって時間を潰そうか考えながら下駄箱を開くと、そこに意外そうな顔をした由比ヶ浜が現れる。

「あれ？ ヒツキー、今日は随分早いね！」

まあな。

そう返しながら靴を履き替える。

「……おはよう」

一応、と朝の挨拶をすると由比ヶ浜はあ、と反応した後、片手を上げ嬉しそうに挨拶を返してきた。

「うん！ やっはろ〜！」

前々から思っていたのだが、その挨拶は朝昼晩共通挨拶なのだろうか？

“やあ”と“ハロー”の合体語と仮定すると、朝に使うべきは“やっぐつともー”になるのだろうか？

そんなどうでも良い事を考えながら歩いていると、由比ヶ浜が隣で歩いていた。

……お前このままだと二人で教室入る事になる訳だが、ここはトイレにでも行くフリ

をせずらすべきだろうか？

いや、むしろ自意識過剰だろうか。

「ヒツキーは土曜日何で行くの？」

由比ヶ浜の質問。それは土曜日に行われる球技大会の慰労会の事だろう。

球技大会の夜、俺は疲れた体を押し、受験で頑張る小町の為に夕食を作っていたらメールが届いた。

内容は

“比企谷君！ 土曜日遊びに行こう！”

問題はそのメールアドレスは知らないアドレスだった事だ。

顔文字が無いから由比ヶ浜じゃない、

雪ノ下にしてはフランクすぎる、

平塚先生にしては雑すぎる。

いや誰？ と他に自分を比企谷君と呼ぶ人間を思い浮かべるとめぐり先輩と雪ノ下陽乃さんが思い浮かび、陽乃さんなら俺のアドレスを調べる位やりそうだと思いつかべたりしていた所に、

一色から

“ 戸部先輩がしつこかったんで、先輩のメルアド教えちゃいました（笑）先輩だから良いですよね？”

とメールが届いた。

戸部かよおお!!

しかしアイツ漢字なら俺の名前間違ってないのがさらに紛らわしい。

なんやかんやで、その土曜日は球技大会で協力したメンバーで行う慰労会の誘いという話になり、なんやかんやで結局行くはめになったのだった。

しばらく思考していたら由比ヶ浜が顔を覗きこんできた。だから近い近い。

「街だろ？ 電車、だな……」

大分後れて返事を返すと由比ヶ浜がもじもじし始める。

「じ、じゃあさ、一緒に」

「あんれー？」

そんな会話をしていると急に後ろから声をかけられ、俺と由比ヶ浜の肩を叩かれた。

朝っぱらからテンション高い男、戸部翔だった。

俺たちの間から二人の顔を交互に見る。

「ヒキタニ君！ 結衣！ ウェーイ！ 今日は何気系？ 珍しく早いじゃない！」

朝から声でけ。

由比ヶ浜もそう感じたのかム、と頬を膨らませていた。

「…………お前は元氣一杯で羨ましいよ」

「だべ〜？ 元氣なのが取り柄なんよ〜！ むしろそれしか無いわ〜！」

皮肉が通じず、勝手にテンション上げていく戸部。

「いや、声でけ〜って。聞こえてるから……」

「いやむしろヒキタニ君も元氣上げてこ〜ぜ！ 朝は大事っしょ！」

「いや俺はいいよ」

「それじゃ駄目っしょ！ 俺朝からランニングしてきて、朝シャンしてきたんよ！ 新しいシャンプー良い香りしない？」

「お前止まんねえな」

戸部の勢いに圧倒される俺。

ていうか由比ヶ浜さつきから何怒ってんの？

「あ、隼人君だ！ じゃヒキタ二君、結衣！ また後でね！ 雪ノ下さんにも宜しく！ 土曜日楽しみにしてるわ〜！ お〜い隼人君〜！」

こうして戸部は俺達を竜巻のようにかき回すと、前を歩いていた葉山達の所に走っていった。台風みたいな男だな……。

「……いや、すげえなアイツ」

そうしているうちに教室に着いてしまった。

由比ヶ浜が教室を見上げるとため息をついた。

「むう、とべっち、タイミング悪すぎっしょ……」

そういうと項垂れながら由比ヶ浜は教室に入ろうと前に歩きだす。

教室の中では今日も一番に聞こえてくる戸部の声。あの件で俺の変化があった事、それはクラスの奴で朝のホームルームまで偶然出くわしても、気まづく必要の無い人間が1人増えた事だった。

今日も今日とて煩く教室に響くお調子者の声を聞きながら、俺は自分の席に座り込む。



## 番外編 球技大会の慰労会はやはり間違つた

## 番外1-1 慰労会

今日は休日。

夕方の駅の、仕事やら遊びやらの帰りの人でごった返す人混みの中で、俺は携帯片手に1人待ちぼうけしている。

待ち時間中、軒並み人間観察で時間を潰していた。何故携帯を開いているか、誰かと目があったりした時、別に貴方の事をジロジロなんて見てませんよアピールの為の携帯、その為の右腕。

人を観察していると誰もが幸せそうかと言われればそうでもなく、半分位の人間は憂鬱そうな顔をして歩いている。こうして見れば自分が大変な目にあつた時、半分の間は俺と同じ不幸な気分を抱えて生きているんだ、そう思えば“なんで自分だけが”なんて塞ぎ混まずにすむ。自分だけが特別じゃない、そう思う事で俺は不幸を回避するすべを身に付けてきたんだ。

だから、

今こうして由比ヶ浜に誘われて二人で慰労会に行こうなんて言われても、俺だけが特別じゃないんだと理解しておく事で、勘違いだった時に不幸な気分落ちる事を回避出来る。

だから大丈夫、特別じゃない。

こうして……待ち合わせ時間が一時間過ぎていようとも、その考えが俺の気持ちを楽にさせる。

由比ヶ浜から電話が来たのは一時間前。

由比ヶ浜は今日使うつもりで買った、新しいバックに財布やら何やらを昨日のうちに入れておいて準備していた。

が、待ち合わせ場所に着くか否かの所になって何時もの癖で普段から使っていたバックを持ってきてしまった事に気付いたらしい。

電話ではテンパった由比ヶ浜から何度も謝られ彼女はダッシュで家に取りに戻った。

タクシーで行くとか言い出したがそんな事に金を使わせるなんてとんでもないと、急がなくて良いから歩いていけ、と言ってやった。別に慰労会事態には遅れないのだから。

とはいえボウツと待つのも飽きてきた。

どこか店に入っておけば良かったとも思ったが、流石にそろそろ来るかもしれないから今さら動いても仕方ない。だから俺は再び人間観察をして時間を潰す。

ふと、そこで休日の部活帰りらしい学生達がサッカーボールを片手に歩いているのを見かけた。

……あの球技大会から数日、休日練習までしたあの数週間をふと思い出す。たかが数日の練習だったが、キツかったな。

記憶が甦る。

上達したパス能力、味方ゴールにボールが入った時の爽快感。戸塚のシュートの時のへそチラ、由比ヶ浜の応援の声、戸塚の審判姿。

戸部のハエタタキ、試合の激しい戦い、戸塚からパス出される時起こるアイコンタクト

ト。雪ノ下の厳しい訓練、戸塚と組んだ円陣。

一色が俺を差し置いてシュート入れた事、戸塚のドリブル姿、葉山の真顔、戸塚のナイスパス、戸塚の吐息、戸塚の笑顔 e t c ……。

悪い思いでばかりではなかったな。

頭の中に広がる七色の戸塚メモリーが辛かった思い出を色つけていく。頭の中で待ち時間すら幸せにしてくれる戸塚 M・T (マジ天使)。

「ごめんヒツキー！ 遅くなって！」

思い出にふけていると俺を呼びかける声が聞こえてきた。

人ごみの先にいるパタパタと焦りながら走ってくる由比ヶ浜を確認すると、俺は寄りかかっていた壁から体を起こし、携帯をしまった。

ハア、ハアと息を切らせながら頭を下げる由比ヶ浜。本当にごめん、と何度も頭を下げている。

まあ、仕方ない。勘違いは誰にでもある。

意図的にすっぱかさされるより断然良いと思える位に俺は待ちぼうけに訓練されている。こうして急いで来てくれたという事実があるだけありがたい位だ。俺の今までの待ち合わせメモリーの中では寧ろ凄く恵まれているまでである。思い出しただけで由比ヶ浜の優しさに涙が溢れそう！

「……じゃあ、いくか」

俺が怒ってない事を態度で示し、これ以上罪悪感を持たせるのもアレなので次の行動に流れる。

由比ヶ浜もその意図を感じ取ったのか、うん！ と嬉しそうについてきてくれた。

人混みの中、俺が若干前を歩き、由比ヶ浜が後ろからついてくる。階段を登りながら

後ろから由比ヶ浜の疑問の声が発せられた。

「それにしても慰労会7時からなのに随分早く集まったよね！　なんかあったの？」  
「聞いてないのか？」

俺は由比ヶ浜の質問に対し、質問で返してしまった。怒られちゃう。

由比ヶ浜がへ？　と頭に疑問符を浮かべ首を傾げた。

アホっぽい子がやると正直癒される動作だなそれ。微笑ましくなる。

仕方なく俺は携帯の戸部のメールを読み上げてやった。

「慰労会はバーベキューやるからお肉とか皆持つてきて！　比企谷君は割り箸と紙コップよろよ！　おれとザイモクザキ君というはすで肉焼く鉄串とか鉄の箸とか墨、固形燃料用意すつからさ！　ではよろろ。……だそうだ」

「なんかヒツキーが戸部つち口調だとキモいね」

「突つ込む所そこかよ」

それとアレだぞ？ 男が言われてシヨツクな言葉が“くさい”に次いで二位が“キモい”だからな？ あんま乱発するなよ？

いたずらっぽく笑う由比ヶ浜に恨めしそうな目線を送った。

とにかく俺達はバーベキューに行く前に食材やら小物を買う必要がある。

だから駅近くのスーパーに寄っていくむねを由比ヶ浜に伝えた。

「でもバーベキューだったんだ！ ならもつと服考えてきたのになく」

確かに由比ヶ浜はバーベキューするには少し服の布面積が少ない。思わず吸い込まれるように服（以外の部分）を見てしまい、由比ヶ浜に視線に気付かれる。

再び首を傾げる由比ヶ浜に俺は焦りながら誤魔化しのセリフを言った。

「なんて〜か、服、可愛いな。似合ってる」

「ええ!!」そ、そうかな。い、いや〜昨日滅茶苦茶悩んだかがあるなく！ ひ、ヒツキーに誉められるなんて思わなかったよ！」

誤魔化す為に言った言葉だったが、由比ヶ浜が思ったより嬉しそうで何よりだ。

女性がデートに来たら服を誉める、ありきたりだが服を考えて選んで来てたなら、それを誉められて嬉しいのは当然かもな。

「今回はさ、美容室にも行つたし、靴も新しいの買ってきたんだよ！ 後ね、アクセサリーもお気に入りに入りつけて来たんだ〜！ この指環もさ、blueのさ……」

わちゃわちゃ嬉しそうに今日のコーディネートを語る由比ヶ浜。ニコニコわいわいと動く由比ヶ浜の表情は見ていて飽きない。

上からどんな経緯で買ったのか、どういうコーディネートなのかを語る由比ヶ浜。内容は半分も解らなかつたが楽しそうに話す言葉に静かに耳を傾けながらゆるやかな階段に足をかける。

「それでね！ このバックは……あ！」

へ〜へ〜、と返しながら階段を登っていると由比ヶ浜が足を踏み外し、階段から後ろ向きに落ちそうになる。

……！



とつさに階段下に倒れそうになる由比ヶ浜に手を伸ばし、その前に手を掴み引つ張り出した。

そのまま彼女を支える事が出来ずに、俺は後ろにバランスを崩し、倒れこむ。

「あ、ありがと……」

俺に乗つかかる感じに倒れた由比ヶ浜は、俺を見上げながらお礼を言う。

「……お前な、新しい靴なんだしき、階段は気を付けて登れよ」

そういうと由比ヶ浜の手を離し、俺は目を背けた。

「う、うん」

顔を赤くして由比ヶ浜も目を反らした。

あ、あの、早くどいてくんないかな……。

近くで見ると、コイツ睫毛なげく。

やばいやばい。

「ひ、ヒツキー……」

潤んだ目で由比ヶ浜は再びこちらを見上げる。

そしてその小さな唇を開こうとした。

しかしその時、

「おおー！」

そうしている俺達に、もはや聞き慣れた喧しい声がかげられる。階段の上から俺達を見て微笑みながら近付いて来る男、戸部翔だった。

「おお!! ヒキタニ君に結衣じゃんか！ こんな所で会うなんて偶然じゃん！ いや、なんか運命を感じるわ〜！」

……由比ヶ浜はぷくぷくと頬を膨らませ立ち上がる。  
俺もゆつくりと立ち上がり、ズボンをはたいた。

「二人もこの上のスーパーでバーベキューの買い物系々？俺も俺も！見てよこのお肉、超旨そうっしょ！豚鳥牛全部入れて買ったんよ。あとあと、ここだけの話、超良いお肉も少し買ったんわ〜！皆にはサプライズだから内緒にしてね！」

お前絶対隠せないだろ。聞いてもいないのに俺らにバラしてる時点で。

戸部の言う通りその両手には大量の肉、肉、肉が入っていた。

「戸部っちさ……」

由比ヶ浜が戸部に恨めしそうな目を送る。

しかし戸部はキョトンとしていた。

由比ヶ浜は「何でもない」と肩を落とす。

「毎回わざとじゃないのがな〜」

「なになに、どうしたのよ〜！あ、肉ばっかりじゃ箸休めが無いって事っしょ！大丈夫

夫大丈夫、戸塚が野菜買ってきてくれるって話なんよ！」

由比ヶ浜がぼそぼそ何かを言っているが戸部は止まらないマシンガントークを続ける。由比ヶ浜は何も言わず、しずしずと階段を登っていった。

「ヒキタニ君達は何買ってくの？俺も固形燃料買い忘れたから一緒行くわ！今日は思いっきり食べようね！いや、今から楽しみだわ〜！」

そういうと戸部は振り返り、再び階段を登っていく。

最近戸部は俺との会話の距離感を見付け、俺相手にはひたすら喋りまくる。

……まあ、気まづくないし、話題探さなくていいから楽でいいけどさ。

戸部は戸部でずつと話を聞いてくれる人がいてくれるって良いね、との事だった。

まあ学校での話題は基本、葉山葉山大岡葉山大和葉山、そして締めには必ず海老名の話をしてくる。

葉山と偶々二人になった時“戸部がお前の話でしつこい”と文句を言ってやったらそうか。と少し嬉しそうだった。

もうお前らで付き合えば？　と思った。

海老名も喜ぶしき。

「ねえ戸部っち、バーベキューやる場所は大丈夫なの？ 今河原とかで勝手にやつちゃダメなんでしょ？ 海じゃ寒すぎるし……」

「それが大丈夫なんよ！ 雪ノ下さんにバーベキューの話した時もその事言われてさ！ 場所にテントやストーブとか膝掛けまで貸してくれるキャンプ場を予約してくれたんよ！ 念のためさつき俺とザイモクザキ君でしつかり現地で場所取りしてきたから大丈夫つしよ！ ザイモクザキ君は今そこでラノベつての書きながら待つててくれる！」

成る程、雪ノ下さん流石だな。

今は冬でもバーベキューをやつてる所が増えたしな。俺は冬にバーベキューなんてしたくないけど、世間ではそうでも無いらしい。虫が少ないし、案外需要はあるみたいだ。

ていうか、材木座と戸部で場所取りか。二人でいる時どんな話してんのか少し気になるな。

「と、戸部っち、中2と二人だとどんな会話してんの？」

由比ヶ浜も同じ疑問を持ったらしく、恐る恐る尋ねてくれた。俺も耳を傾ける。

「ん？ いや結構盛り上がってるよ！ 好きな子の話とか、スラムダンクとか！」

オタクとお調子者の垣根すら飛び越えるスラムダンク、マジ偉大。

「あとは……ヒキタ二君の話とかかな？」

……ん？

何それ陰口？ 陰口だろ絶対。

確かに共通の嫌いな奴の悪口は感情や秘密を共有出来る上にはぼ滑らないから、誰かと仲良くなるにはうってつけだけどな。

「いやヒキタ二君の話題は結構盛り上がるんよ！ 結衣とか喋り出したら止まんな

……

「わくわく!!!  
!!! もう、早くしないと時間無くなっちゃうから行こう！」

由比ヶ浜が焦りながら俺と戸部の首根っこを掴みツカツカ歩き出す。

何、お前からそんな俺の事なんか言ってるの？

俺の話なのに俺が一番蚊帳の外とかどうなってんだよ……。

引きずられながら俺はそんな理不尽に首を傾げていた。

—————

千葉の某駅から出てすぐ、件のキャンプ場の入り口に到着した。

あれからスーパーで紙皿やら何やら買ってきた。

途中で戸部が買い物かごに青椒肉絲とかいれ始め、どう考えてもバーベキューじゃ無理だとツツこんだり、由比ヶ浜がバーベキューといえどカレーとルーを買おうとしたりと変に大変だった。

俺と戸部が両手に買い物袋を引っ提げ、予定の場所に到着する。

「着いた〜！ いや重かったわ〜！」

「だから買いすぎって言ったろ。お陰で俺まで荷物増えたし」

テーブルに荷物を置き一息つく。

キャンプ場は人が少なく、ほぼ貸切状態だ。今日は風も少なく、まあ過ごしやすい方のようだ。

ふう、と座り込むと由比ヶ浜が隣に腰かける。

「だから私も持つって言ったのに」

俺も戸部もいやいや、と首を降る。

なんかアレじゃん？ 女の子に荷物持たせるってなんか男としてタブーな気がしちやうんだよ。まあ由比ヶ浜、靴も歩きずらそうだし。

そこに一人、先んじて場所を確保していた男がたたずんでいた。

「うむ、待っていたぞ！ ずっと一人で寂しかった我ぞ我！」



「いやお前いつも1人じゃん」

場所取りを任命されていた材木座はふんぞり返りながら俺たちの到着を歓迎した。

机の上に広げていたラノベを鞆にしまいながら俺の一言に材木座はフハハハと笑い出す。

「八幡、解つてないな。部屋で1人での、キャンプ場で1人での、ダンチの寂しさだぞ。マジで」

ま、まあ確かにそうかもな。お疲れ材木座。

「おまたせ〜!」

そうしていると後ろから天使の声が聞こえてきた。癒しのガブリエル・ボイスにがばつと振り向くとそこには戸塚が笑顔で手を振って歩いていて、その横には雪ノ下。

おお、と手を上げ答えようとすると天使の背後に悪魔が見えてしまった。

「ふう、野菜も数買えば重いね! 雪ノ下さんに拾って貰って助かつちやった!」

「キャンプ場に車で向かっていたら、重そうに野菜を持って歩く彼がいたの」

成る程、この不思議な組み合わせはそういう事か。奥を見ると車からバーベキュー資材を降ろしてくれている運転手さん。

戸部はそれを見ると手伝いに走った。

俺も手伝いに行きたい所だが、その前に確認しておかなきゃならない事がある。

「ひゃっはろー！比企谷君！」

ニコニコと手をあげるこの人、雪ノ下陽乃さんが何故ここにいるのか、だ。

「いやなに？ 雪乃ちゃんがバーベキューに行くっていうから？ 私もお出かけるから車に乗せてきてあげたって訳♪ んで比企谷君もいるのに挨拶もしないっていうのもアレじゃない？」

その言葉に雪ノ下は溜め息をつく。

俺も警戒をあらわにした。

「こんばんわ。挨拶終わりました」

俺の言葉にアハツと笑う陽乃さん。

「特別に良い肉差し入れしてあげるんだから、そんな可愛い事言うなよ」

頭うりうりしないで下さい胸とか当たってます。ん？

陽乃さんに差し出された袋を見やる。俺は体に電流が流れたような感覚に陥った。

……なん、だと……？

陽乃さんの手には高級そうなお肉が入った袋があった。それ、明らかにスーパーに売ってるレベルじゃない、某高級牛肉じゃないですか!!

思わず膝まずいてははくつと言いつつ言いそうになる。

嘘、あんなの食べた事無い。

悔しい、でもあんなの見せられたら……。ダメ！ 負けない八幡！

姫騎士のように葛藤する俺、でも内心殆ど落ちている。

「墨(スミ)に置くわ」

俺が脳内悶絶していると、戸部がよいしょと荷物を置いていく。

そして立ち上がるとふう！ と息をついた。

あ、危なかった。戸部に声をかけられなかったらこの人に屈伏する所だった。

「あ、ちす。えと雪ノ下さんのおねえさんですか？ 似てますね！」

面白そうに陽乃さんに歩いてきて頭を下げる。

材木座の小説といい、お前はすぐ危険な物に首を突っ込むな？

「あ、どうも。雪ノ下陽乃です。あ、君が雪乃ちゃんの弟子二号か！ 聞いてるよ？ 運動、得意なんだって？」

突然の賛美に戸部はいやく、と照れながら襟足を引っ張る。

……二号つて、一号が誰なのか気になるな。

「おねえさん運動出来る元気な子好きだぞ！ 雪乃ちゃんのしごきにも耐えるなんて凄いいね！ ……それに……プツ……雪乃ちゃんをフったんだってね。……ぷフツ。いや、おねえさん久し振りに腹抱えて笑ったよ！ 面白い、君！」

戸部の背中をバンバン叩きながら笑う陽乃さん。珍しく裏が無さそうな笑顔だ。

戸部はハハツと苦笑い。雪ノ下からの無言の攻撃を受けていた。

「……姉さん、また私の日記を……」

日記はその日の思い出を残すもの。

雪ノ下はあの事を忘れる気がないようだ。雪ノ下の執念は怖いぞ、戸部。

「さて！ 比企谷君も愛でたし、噂の弟子二号も拝めたし、そろそろ行きますか！  
じゃあまたね♪」

散々騒ぎ立てた陽乃さんは満足そうに車に帰っていった。

その後ろ姿を見送りながら溜め息を出す。

「……いや凄いい姉さんだわ〜！ 綺麗だし楽しい人だし。優しいし、めっちゃ誉められたし！」

「姉さんの言葉を全部真に受けてはダメよ。言ってる事の半分は本音じゃないんだから……」

「社交辞令みたいな物だ。相変わらずのあの外骨格のような営業スマイルや人たらし能力は正直怖い」

陽乃さんの魔力、もとい魅力に吸込まれた戸部をたしなめる。

まああの人だけじゃなくても、俺に向けられる笑顔は怖いんだけどな。内心はこんなじゃないか？ と、つい心の予防線をはってしまふ。

「でも、社交事例や営業スマイルでもさ。その手間をかけても良いって思ってはくれないんじゃない？ それは普通に嬉しくね？」

戸部の言葉に俺も雪ノ下も思わず目を丸くした。

ふむ……、確かにそういう見方もあるのかもしれない、な。

裏でどう思ってるかは結局、予想でしかない。しかし、そういう工夫をしてくれているという事実は確かに好意ともとれるのかもしれない。一理ある。

そう考えれば陽乃さんは結構俺が好きなのかもしれない！ 考えただけで色々恐ろしいからこの思考は終了ですな。

「せんぱ〜い！ 重いです〜！」

そんな思考をしていると猫なで声を出す一色が袋一杯の何かを持って歩いてきた。小走りで迎えにいつて、荷物を取ってやる。

「いや〜、本当重かったです〜！ ありがとうございますね？ 先輩！」

……あれ？ さっきの理論でいけば一色超優しいじゃん。あざといは優しい。新しい理論に頭を閃かせると一色が

“ やっぱ先輩便利ですね〜 ” とか言い出したから頭の中で前言撤回してやる。

袋の中を覗いて見るとそこには肉が入っていた。

「……お前も肉買ってきたのか」

「はい、バーベキューですからね。どうかしました？」

……嫌な予感がする。

そうして皆でテントを組み立てようとした所で最後の一人、城山が両手に買い物袋（肉入り）を引つ提げ登場した。

皆して気前良く袋一杯のお肉。絶対に食べきれないと確信した。合計7袋のお肉、野菜一割。

ま、まあ残ったら持ち帰れば良いか。

しかしバーベキューが開始されたら戸部が無計画に大量に肉を投入しまくり、温存も出来なくなるのだがそれは別の話。



## 番外1-2 やはり慰労会はただではすまない。

夕暮れのキャンプ場。

そこで俺たちはバーベキューの準備をしていた。

テントの杭を打ち込み終わり、ふと顔を上げる。

そこには山に沈みかけの夕陽があった。赤と黒の境界線が浮かび上がり、その眩しい夕陽の光が徐々に山影に消えていく。そんな幻想的な雰囲気思わず息をつく、その夕陽の中に1人、佇む影が。

そこには材木座が体を広げながら右手を太陽にかざしていた。

「光と闇の境界よ！ 我に今再び力を与えよ！ 世界の傍観者達を罰する力を我に！  
ウオオオオオオオ!!」

「いいからテントの準備手伝え」

折角の景色と雰囲気が出無しだった。

今は作業を分担してバーベキューをする為の準備中。

女子たちは食器の準備、そして鉄串に肉を刺したりしてくれている。

男はテントの準備。

テントなんて建てた事無かったが、まあなんとかなるな。説明書を読めばロケットランチャーも撃てるような時代だ。テント位説明書があればなんとかなる。

ちなみに戸部はいわゆるゲームを買っても説明書を読まずに体でプレイするタイプで、ありあまる行動力で余計な事をしまくるので、足りない物をキャンプ場売店に買いに行かせた。

城山がロープを引き、テントを立てる。

冬なのにタンクトップで作業するコイツがある意味怖い。なんかタンクトップが似合い過ぎて某ヒーローシリーズにいそう。

「わあ、城山君筋肉凄いな！ 憧れちゃうなあ！」

「む……………」

戸塚に筋肉を触られる城山。戸塚は恍惚したような息を漏らし、城山の二の腕に指先で触れていた。

くっそ羨ましい。今日ほど筋トレをしてこなかった事を悔やむ日は無かった。たまにテレビ見ながら腹筋してると小町が「お兄ちゃん、鬱陶しい」と割とマジのトーンで言ってくるから気が引けて……。まあ映画のラストシーンとかでやってた俺が悪いんですが。なんか格好良い外国のアクション映画とか見ると鍛えたくなるよね。ならないか。

気が付くと一色が俺の前にしゃがみ込んでひひつと意地悪っぽく笑っていた。

「先輩も鍛えてみたらどうですか？ ライザップとか行つて〜♪」

言つて一色は自分で言つておいて吹き出す。どうせまたCMで活躍する俺を想像したんだろう。

シャツを上げて腹筋を見てみる。俺も別にだらしない体してる訳じゃないよな。余計に肉がつきすぎる訳でも無いし、筋肉だってそれなりにある。

まじまじと自分の腹筋を確認していたら、ふと気付くと一色が赤くなり顔を背けていた。

ケホンツと咳払いをすると、一色はデジカメを構える。

「先輩、取り合えず杭を打ち込む所撮りますか〜！ ポーズとつて下さいよ♪」

カメラマンの指示に俺は照れながらハンマーを振りかぶる。カシヤツというシャツター音を確認すると俺はハンマーを降り下ろした。

「アハツ♪ 先輩ハンマー構えた所だけ見れば完全に通報物の風貌ですね〜！ 窓にガムテープ貼って叩き割ろうとするコソ泥その物ですよ〜♪」

うるせえよ。

一色はデジカメを使って、皆の写真を撮るカメラマンに任命された。

戸部と由比ヶ浜がそれいい！と言いだしたので採用。後で現像して持ってきてくれるらしい。

二、三枚俺を撮ると一色は軽く手を降りながら城山の方へ向かう。

ようやくカメラマンの目が無くなり一息つくくと、俺は立ち上がり完成したテントを見

上げる。やる時は面倒だったが、やってみればまあ楽しかった。

「せんばーい！」

呼び声に振り向くと、一色の所に皆が集まっていた。買い物に行つた戸部も帰つてきたみたいで、買い物袋を引つ提げたまま集合していた。

袋を見ると、何やら余計な物も大量に入っている。修学旅行の時から思つてたがお前衝動買い多すぎないか？

「テント完成したんで、皆で夕陽とテントをバックに集合写真取りましょー！」

手を振る一色に俺は応え、俺はハンマーをその場に置いて皆の所に歩みよる。その後、完成を記念して集合写真を取った。

—————  
テント内部。

肉を焼く音と煙の中。

折り畳みの椅子に腰かけて円を組むようにしてバーベキューを楽しんでいた。

網で肉を焼くと、どうしてこんなに味が違うのか。口の中に広がる旨み、焼肉のじゅうじゅうと奏でる心地よい音、次の獲物を狙う楽しみ。

滅多に楽しめない幸せを五感全てを使つて満喫している俺。バーベキュー、悪くない、悪くないな。もぐもぐ。

由比ヶ浜も一色も、足をパタパタしながら食べている。雪ノ下は肉の焼き加減にこだわりがあるらしく、真剣に網を見ている。楽しそうに肉を網に乗せる戸塚に、その肉をガツガツと両手で口に入りきらない位詰め込む材木座、その姿に隣の城山がひいていた。

「うっま!!!」

皆で美味しく食べていて、急に戸部が騒ぎ出す。確かに美味いがなんだいきなり。今

まで10分位食ってただろずっと美味しい美味しい言いながら。

ふと戸部の方を見ると、立ち上がり目を輝かせて固まっている。

……まさか！

「戸部先輩、雪ノ下先輩のお姉さんが持ってきたお肉食べてる！ 抜け駆けズルいですよー！」

「戸部某い！ それは我も許すわけにはいかぬ！ 1パックしかないのだぞ!!!」

ふ、ぶさけやがって！

コイツ最初にいきやがった！

雪ノ下と戸塚を除いた全員が立ち上がり、戸部に非難の言葉なり視線なりをぶつけた。

「ご、ゴメン、興味が止まらなくなつてさ！ で、でも大丈夫だから！ 1人1枚はある

……」

戸部は陽乃肉を数える。

すると指を嘯みながらあわわと後ずさった。

「あ、1枚足んない……」

衝撃的な事実には俺達は戦慄した。

これはコナンなら殺人が起きるレベル。

「戸部つちい、マジふぎけんなし！　ふぎけんなし！」

「戸部某、光になれええええ!!」

「ぎげんなよ戸部お前と陽乃肉どつちが大事だと思ってるんだ」



「戸部先輩本つ当ありえない!!」

「ご、ごめ、いやすみませんでした! すみませんでしたあ!」

戸部非難が集まる。

両隣の一色&由比ヶ浜にベシベシ叩かれる。

材木座と俺からは立ち上がりティッシュやらポケットに入ってた物をひたすら投げつけられている。

その様子に戸塚が楽しそうに笑い、雪ノ下と城山も微笑んでいた。

戸部はパイプ椅子に正座。

許されるまでその体制な。

陽乃肉は雪ノ下が譲ってくれたので、戦争は回避された。やれやれ。

ひとまずはこの肉でも美味しいからな。

網で焼く肉最高。

そして話題は球技大会へと戻っていった。

「でもあの時のゆきのん、球技大会は本当絶対優勝すると思ったよね！　バシバシアタックしてさ♪」

「うん、僕も感動したよ♪　かつこ良かったな〜」

話は球技大会に移り、女子達の試合について語られた。ちなみに二年女子はバレーボール、一年女子はテニスだった。

戸塚と由比ヶ浜の賛美に雪ノ下がどこか自慢気だ。

「でも体力続かず三回戦でリタイアだもんな。一回戦二回戦、もう少し温存しときゃ良かったんじゃないか？」

雪ノ下は三回戦が始まると、ヨロヨロと常に揺れていた。まるでジョーのように。

「ふふつ、三井君はどんなに限界でも得点を重ねていた。私も負けてはいられないじゃない……」

ああ、ジョーじやなくてみっちやんリスペクトだったのね。だからフラフラでもトスとか頑張っちゃったのか。

そういや雪ノ下に大丈夫か声をかけたら、  
「相手を見なさい。私を、警戒しているわ。もう、腕も上がらないのに……」

とか呟いてたな。

まあ、本当にその後上がらなかったけど。

そして真っ青になってた雪ノ下を先生がリタイアさせていた。

リタイア、という言葉に雪ノ下は沈む。

……でも女子バレーでアタックなんて決めてたのお前位だし、元気だせよ。

「でも先輩、私の応援まで来てくれましたよね？ うふふ、どうでした？ 私のテニス姿は。あんなに息を切らしてまで来てましたもんね？」

「……悪い、覚えてない」

一色にえくつと非難される。

いやだけどな、それには仕方ない理由がある。

「ヒッキー達、私達の試合も見ててくれたよね。……あれ？　そういえば戸部っちにヒッキーって、私達とゆきのんの応援も大体いてくれたよね？　あれ？」

御明察、そうなんだよ。

俺達はテニスもバレーも応援した。

どちらの応援もしなきゃと張り切る戸部が俺達を振り回し、試合の度に学校を走らせまくったのだ。

体育館でバレー試合目は由比ヶ浜、次はテニスで一色が出る、あ、次は雪ノ下だと戸部は携帯でテニス応援の後輩と、体育館にいた大岡と連絡を取りつつ全力ダッシュしまくったのだ。

どんなに無理だって言っても、あれだけ応援してくれた彼女達を応援しないのは違う

でしょ！ と止まらなかつた。途中で材木座が脱落しても、戸塚がフラフラしはじめても、それでもなお諦めんよ！ と走り続ける俺達。途中で城山も捕まった。あの日俺は初めて家に帰るのが辛かった（肉体的な意味で）

恨めしい視線を戸部に送ると、正座のまま親指を立ててきた。イラッ。

「だ、だからあの日皆ぐったりしてたんだ」

「校内を青い顔で走り回る集団がいたと、国際教養科でも噂になっていたわ」

そりゃ噂にもなる。

ちなみにその中の一人はゾンビだったとか言う話だ。近年のアメリカのゾンビ映画めっちゃ走るもんな。

もう、球技大会はこりこりだ。

そう思い俺は肉をほうばる。

……ふと、陽乃肉に目を向ける。

あんな肉、一生食えないかも知れない。

そう考えると、小町にも食わせてやりたい、今も家で頑張る小町に。そんな考えが頭をよぎった。

でも、数を考えるとひとり人切れ。そんな量持っていても、寧ろどうなんだろう。

……ふむ。

俺はその時、いつもの悪知恵が働き、素晴らしいアイデアが思いついた。

「なあ、戸部。陽乃さんの持ってきた肉美味かったか？」

急な俺の疑問に、戸部は一瞬キョトンとするも、直ぐに満面の笑みを浮かべた。

「そりゃあもう！ 超超超美味かった！」

「もっと詳しく！」

俺の言葉に戸部も火が付き、良いと言っていないのに正座を止め立ち上がった。

皆戸部に注目する。

「もう、今まで食った肉で一番美味かった！ いや、今まで食った物の中でも一番だわ

！ マジヤバイっしょ、口の中で溶けて味が広がるんよ。マジすごいんよ！」

戸部の熱い演説の効果を見渡して確認する。

……よしよし、皆注目してるな。中にはごくりと喉をならす者もいる。効果は十分だ。

「なら、まだ食いたいだろ？ そんな美味いのに1切れだけなんて、足りなくないか？」

戸部はまあ、と皆の顔をうかがいながら頷いた。

「皆もそうだろ？ こんな物、1人1枚なんてあまりに少な過ぎる。そう思わないか？」

材木座」

「う、うむ！ そんな物で満足出来る訳がない！」

ギヤラリーも味方にし、俺の言葉を皆に共感させる。何人かうんうんと頷いていた。

怪訝な顔で肉の焼き加減から目を離さない雪ノ下を除いて。

そしてその雪ノ下から俺が欲しかった質問が出された。

「何が言いたいのか？」

……ふっ。

「肉の総取り合戦、なんてどうだ？」

陽乃肉をかけて、ここにいる奴等で行われるデス・ゲーム、だ。

俺の言葉を皆それぞれ理解をしたのか不穏な笑みを浮かべる者、敵を見るような目で周りを睨む者、上着を脱ぎタンクトップ姿になる者、それぞれだった。

「面白いですね先輩。確かに、一枚だけちまちまわけ合うなんて、面白く無いですし……」

「あの肉は我ののだぞ。誰も手を出すな」

皆の目がマジになる。

由比ヶ浜ですらむくくと戦いに備えている。



戸塚だけ、面白そうだね♪と超笑顔。

マジ天使。

そして焼き加減が美味くいった肉を掴み、雪ノ下の目が鋭く光った。

「比企谷君にしては、面白い提案ね。皆あの肉を欲していて、その為に馴れ合わず、皆がゲームに本気になる。そんな人達を叩き潰せるなんて、最高の余興だわ」

……ふつ、肉を総取りが目的だ。

俺はそんなゲームの過程なんてどうでも良いが、本気で勝ちに来る奴を倒すというのは俺も嫌いじゃないぞ。

勝ち筋はある。

雪ノ下はゲームという物に不馴れだし、こう狭い所じゃ城山の自慢の肉体を活かす事なんて出来ない、戸部の運動能力だって無意味だ。

由比ヶ浜も頭を使うゲームは苦手だろうし、戸塚も楽しむスタンス。

材木座辺りと裏で手を組めば、有利に試合を展開出来るだろうし、二人で山分けなら取り分は十分だ。

一番怖いのは戦闘力が解らない一色だ。十分警戒し、脱落式ゲームなら一番先に倒し

に速攻をかけてやるとしよう。

勝利へのプランはたった。勝負に乗らせるのには成功したし、な。さて、後はゲームだな。

勝負の提案をふった以上、警戒されて俺にゲームの決定権は薄いだろうが、まあどんなゲームでもこの面子なら大丈夫だろう。

小町、美味しい肉持っていつてやるからな。

受験を頑張るお前にお兄ちゃんからの最高の激励だ。高級牛く♪ 高級牛く♪

そして場の空気を完全に支配した俺は両手を広げて余裕を見せつけるように笑い、そして問う。

「さあ、ゲームはなんだ？ なんでも良いぞ」

とは言っても、この狭い場で、道具も無しで出来るゲームなんてたかがしれている。頭の中で何が来てもいい様に思考を巡らせた。

そしてそのゲームが発表された。

「王様ゲームっしょ！」

……………。

違う、そうじゃない。

手を挙げてハイハイ！ と立ち上がり、提案を出す戸部に視線を送る。

「ふふつ、王様ゲーム……、いかにも頂点を決めるに相応しそうな、ゲーム名ね。面白いわ」

雪ノ下のまさかの賛成。

お前解つてないだろ。いまだに臨戦態勢の雪ノ下に突っ込みしそうになる。

「王様、ゲーム。いかにもリア充がやるような……。私も賛成」

リア充的ゲームに興味を引かれた材木座が手を挙げた。お前、下心無いだろうな？  
よく見ると城山も小さく手を挙げている。お前らな……？

「僕もいいよ♪ 楽しそうだし」

戸塚あ！

違う、違うんだ！

俺の予定はこんなんじゃない！

「で、でも私、王様ゲーム好きじゃないんだよね……。なんか、ノリでキスとかするんでしょ？」

ようやく反対意見が出た事で柄にも無く良し、と小さくガッツポーズ。

よし、よく言った由比ヶ浜！

「大丈夫つしよ！ 結衣がそういうの嫌いな解つてつから！ この面子ならそんなデリカシー無い事言う奴いないって！ 純粹に楽しもうって話よく。意外に盛り上がるんだわ〜」

戸部の言葉に、由比ヶ浜も皆を見渡して、まあそうだね、と手を挙げた。

綺麗な目をした由比ヶ浜の眼差しを受け、材木座に城山、そして俺が目を反らす。

だって、王様ゲーム言ったら、考えちゃうじゃん……。いや、そんな命令しないけどさ。

ていうか、お前から本来の目的忘れてないか？

楽しそう、じゃ無くてさ。俺は肉の総取りを提案しているんだ。そんなゲームでどうやって獲得者を決めるんだよ。

周囲の思わぬ空気の劇的変化に戸惑った俺は最後の砦、一色に目を送る。

「……まあ、いいんじゃないですか？ それはそれで楽しむとして、その前に息抜きって考えましようか？ 折角の慰労会ですから楽しまないとすし？」

そう言うで一色も手を挙げてしまった。

今、反対意見は俺だけ。

……ハア。

一色の言う事も、わかる。

仕方なく俺も小さく挙手をした。

肉争奪戦はやるからな？

よっしゃ！ と戸部が立ち上がり、クジ用の割り箸を取りに行く。

俺の小賢しい作戦は、1人のテンションで見事に覆された。

純粹に楽しもうとする彼の姿勢だから皆に届いたのかも知れない。

やはり、俺というぼつちが場の空気を作ろうなんてうまくいかないんだな……。

そうして、初の王様ゲームに参加となった。

番外1-3 王様を廻る権力争いは、どうやら違うらしい

バーベキュー用のテントの中、俺たちは肉を焼く鉄板や貸し出されたストーブに温められた空間でこれから行うゲームの簡単な説明を終える。

王様ゲーム、十の盟約。

- 1、あまりにセクハラな命令は禁止。
- 2、金、または持ち物を要求するのは禁止。
- 3、王様の命令は順守。
- 4、このメンバー以外に迷惑をかける命令は禁止。
- 5、怪我をするような事はしない。

6、名前差しは禁止。例 五番が比企谷にピンタ等。  
7、命令前にクジを覗かれたり、落としたりして周囲に知られたら王様以外で引き直し。

8、命令は同時に三人まで。

9、命令が下された後にクジを燃やす等で誤魔化すのを禁止。

10、皆仲良く楽しくゲームしましょう。

盟約を違反した者は、その場で炭酸一気飲み。

—————

当たり前なものも多いが、まあ必要なルールだな。決められたルールを確認しながら雪ノ下が首を傾げながら呟く。

「……………このゲームはどうなったら勝ちなの？」



知らねえよ。俺もこんなはずじゃなかった。肉の総取りをするはずが、気が付いたら勝ち負けが存在しない王様ゲームにすり替えられてしまったのだった。

誰も敗者なんていない。なんて優しいゲームだろう。渾身の策がノリで覆される悲しさに溜め息をつく。肩を落とす俺に、一色から声をかけられた。

「先輩、諦めて楽しみましょうよ？ 総取りはこの後でも出来ますから」

肩を落としていると横で座っていた一色が俺を優しい笑顔で激励する。その声と態度に、どこかワクワクしたようなオーラを感じた。まあ、お前こういうの好きそうだな？

「まあ純粹に楽しいですよ？ このメンバーならですけど」

そう言いながら一色は楽しそうに皆を見渡す。

クジをワイワイと作る戸部に由比ヶ浜。

肉をほうばり幸せそうな材木座。

その材木座に最初はヒいていたのに、今はその食べっぷりが気持ち良いのかどンドン肉を皿に乗せる城山。

戸塚に細かいルールや必勝法をたずねる雪ノ下。皆、揃って笑顔だった。

「何時もなら、このゲーム大っ嫌いなんです。提案する奴もそれに賛同する奴も下心見え見えだし、女の子も好きな人に他の女が触らないように牽制し合う。勝つとか負けるとかで終わらない、終わった後にもそのしこりが残るし、本当ならこのゲームには基本参加しないんですよ、私。」

クジが完成し、戸部が皆に声をかける。皆がクジに手をかけ、ドキドキした顔で合図を待った。

そして俺の隣で一色は優しく微笑んだ。

「でも、このメンバーなら純粋に楽しいです♪ 王様を引くワクワク感、どんな命令で自分の番号を呼ばれるのかのハラハラ感。純粋にそういうのが味わえる。他の面子なら考えられませんよ?」

一色は俺に微笑み、合図と共にクジを引く。その顔はワクワクと、子供のように楽しそうに。

……解ったよ。

お前の言う通り、せめてコイツらみたいになんか楽しくゲームに参加する。盟約もあるし

な。一色の言葉に、ようやく俺も王様ゲームの楽しさを純粹に感じよう。そう、思えた。

確かに、ワクワクする。この、感覚、悪くないな、一色。

「俺が王様だ。三番はふなっしーの物真似」

一色Ⅱ三番。

……。

王様、と書かれたくじを皆に掲げ、初の命令を出す。

プルプルと震えながら、一色は番号を皆に掲げた。皆一同盛り上がる。顔を真っ赤にしながら一色は立ち上がり、可愛くぴよんぴよん跳び跳ねた。

「アハハ！ いろはちゃん可愛いよ！」

「いろはすす！ “ なっし ” 言わないと！ なっしっつて！ いろはすなっし（高音）

！」

やんややんやと盛り上がる会場。

千葉のマスコット（非公認）の物真似をさせ俺も満足し、惜しみ無い拍手を送った。

「お疲れ。王様の気分は悪くないな」

いまだに下を向きながら震える一色。その姿を見れた事で俺は胸がすつとした。

いつもは弄られたりからかわれたりふられたりする俺が、今回はささやかな仕返しをする事が出来た。これは悪くないぞ。王様ゲーム、悪く無い。うん。

すると一色は、クジを真ん中に差し出し俺に目が笑っていない笑顔を向けてきた。

「ふ、フフフ……。フフフフ面白いですよ先輩。私に、こんな事させた責任、取って貰いますからね……。？」

「お、おう」

その眼光に俺は怯んでしまい、思わず苦笑い。

眠れる獅子を起こしてしまったようだ。一色は明確な敵意を込めて全力の腕で次のクジを掴む。

俺もおそろおそろクジに手を伸ばした。

—————

5回目の命令。

あの命令から数分、王様を引いた戸塚が微笑みながら立ち上がり、その愛らしい口で我らが愚民に命令を告げた。

「えつとね？ 三番と五番は腕立て30回！」

まるで神からのお告げを告げに来た天使だな。内容がえげつないのもさらに。

戸塚からの命令に「またかよお！」と戸部が嘆く。俺も自分の番号を見ながら落胆した。

二人で地面に手を付けて腕立てのポーズを取ると周囲から笑いが起こる。まるで土下座をさせられた気分であんなに凄惨な気分……。

「ほらほら、先輩、もっと曲げて下さいよ！それじゃ腕立てじゃないですよ？」

「比企谷君、体は一直線にしなさい。それでは数えられないわね。やり直し」

俺の周りに実に楽しそうな女の子が二人。

さつきは腹筋やってからの腕立てに、腕より腹筋がきつくなっていた。隣で戸部がシュツ！シュツ！とリズムカルにやる物だから尚更しっかりやらなくてはならず、辛い思いをする。

くそ……、あれから王様に全然なれねえぞ。

ようやく腕立てが終わり、ヨロヨロと立ち上がる。だがその頃には皆、次の命令をどうするかとかの話題で持ちきりで、人苦労終えた俺と戸部に対する興味は既に失われていた。

命令だからって劳いの一つもねえ……。

するとスツと肉を乗せた皿が差し出される。タンクトップ城山だった。

「筋トレの後はタンパク質の摂取が良いぞ」

……いや、息切れしてんに肉とか無いわ。

あれから妙に、肉体を鍛える系の命令が多い。多分、コイツのスクワット指令を皮切りに。

コイツがああ命令をした時、

「楽しくやれて、体を鍛えられる。肉もあるから効果的だ。効率の良い罰ゲームだぞ」という脳筋な言葉に雪ノ下と戸塚が賛同してしまったからだろう。

そんな脳筋理論、俺は考えてねえよ。

しかも城山には肉体系命令が効かない。寧ろ嬉々としてスクワットをやっていた。

誰か、頼むから誰かコイツ止めろ。

このゲーム式筋トレの流れを変えないと、どんどんジリ貧である。

そんな願いを胸に抱いた時、戸部から次の命令が下された。

「一番は四番にケツバット！」

なあにそれえ、痛そうな上に心がヘシ折れそうな命令。ガキ使のアレに影響されすぎである。お前年末は絶対アレ見てそうだもんな。本当、あの番組に出ているダウンタウンの二人とか、あんなに大御所なのに体張ってケツも叩かれて、毎年お疲れ様です。

しかし、戸部のその命令に反対意見が上がった。

「そ、それ危なくない？ それにバット無いし……」



由比ヶ浜らしい優しい反対だった。

その言葉に周囲も同意しているような空気を出している。

すると戸部はドンツと自分の胸を叩いた。そしてさっき戸部が売店で買い物をした袋を漁る。すると「子供チャンバラ」と書かれた棒が出てきた。

「これ面白そうって思ってた買ったんよ！ これなら痛くないし、面白くね？」

そう言いながら戸部はその棒で自分の頭を叩く。ぽぽこ、とコミカルな音を出しながらぐねぐねと曲がる棒。

確かに、その動きは柔らかく、全力で叩いてもたいして痛くない。振る度に良い音が出る。

その実演に安心した由比ヶ浜は「それなら……」と安心したように座る。

「で、一番誰？」

すると雪ノ下がスツと手を挙げ、立ち上がる。

「私ね。お借りするわ」

「……四番は、俺だ」

城山が震えた声でクジを出し、前に出る。ようやく筋トレ以外の罰が城山に下された。

雪ノ下は棒の握りを確認し、ブンツ、ブンツと降りながら城山に近付いていく。城山は椅子に手をつき、ケツを差し出した。

「では、いくわね？」

「あ、ああ……」

棒を構える雪ノ下に震えながらケツを突き出す城山。

そして、雪ノ下は一切容赦なく振りかぶり、素晴らしいフォームで城山のケツ目掛け、

振り抜いた。

ズバアアアン!!!

「ア、アアアー!!」

その一撃に、城山はフラフラと座り込んだ。

雪ノ下は棒をふむ、と眺めている。

「思ったより音が出て、振りやすいわ。子供が遊ぶには危険も無く解りやすく派手で、とても良い道具ね」

子供チャンバラと書かれた棒に賛辞を送る雪ノ下、その背後でよろよろと地面に座り込む城山。

「だ、大丈夫？ ……城山君」

戸塚の労いに、城山は「うう」と唸る。

「痛くはない、痛くはないのになんだこの精神的ダメージは……」

何かで心が折れ、立ち上がる事が出来ない城山。こうして、城山無双は崩れ去った。

ドンマイ、城山。

—————

10回目の命令。

「王様だくれだ！」

「やったー！ 私です私です！ やりました！」

一色が嬉しそうにぴよんぴよん跳び跳ねる。本当に嬉しかったようでスカートに意識がいつていないのかちよつと危なっかしくて俺は目を逸らす。

すると周りにいたのは“なんでも良いけど肉体系は勘弁してくれよ”そんな視線を送る全員（戸塚はワクワク）。

ちなみに既に皆かなりの数筋トレさせられている。雪ノ下も回数は少ないのにフラフラだ。

城山も心がポツキーしてからあまり調子が良くない。筋トレもマラソンも、心が折れたら辛いよな。

そんな皆の視線に一色は気付いたのか命令を言おうとして引つ込め、再び命令を考え直している。

ん、と思案し一色は思い付いたようで“はたっ”と手を叩いた。

「んじゃあ、四番が好きな人を発表する、とかどうです？」

ざわっ……。

一色の命令に皆旋律しざわつく。

由比ヶ浜は自分の番号を見た後、バツと振り返り俺を見て、すぐに一色に向き直った。

「さ、流石にまずくないかな？　かな!？」

流石に思い人を明かされる事に抵抗があるのか大慌てで命令に対し反対意見を出す。あまりに慌ててしまい、口調が変わってしまった。いた。

そのうち“はうく、ゆきのんお持ち帰りい〜!”とか言い出しそう。

一色も言つてまずいと思ったのか、あちや〜つと命令を撤回しようとする。

「ま、まあ確かに不味いですね、すみませんでした……」

命令の変更を受け入れる一色に周囲もホツとした空気に戻った。

が、それを許さない氷の女王がこの場に存在した。

「駄目よ」

周囲の空気を押し返し、静かなトーンで力強く否定する雪ノ下は俺に一瞥視線を送ると、小さくため息をついて一色に向き直す。

「今の命令は盟約にも違反していないし、一度番号を宣言して命令を変えるのは、今後も反応を見て命令相手に目星を付ける輩が出かねないわ。次は控えるにしても、今後の遂行の為に実行するべきよ」

そんな汚い奴いるのかよ。一体どこの誰だよ。その手があつたか。

しかし、これでこの命令を遂行しなくてはならない空気が出来てしまった。

皆が視線を気まずそうに交差させた。

……気のせいか多くの視線を感じる。

しかし残念ながら俺は四番じゃない。

自分の番号を見せてやる。するとそれに習い、それぞれ番号を出し始めた。

緊張した空気が流れる。

次々と出される番号に、とうとう四番が名乗り出た。

もじもじと体を揺らし、頬を染めながらそいつが手を上げる。

「お、俺だわ……」

……戸部翔だった。

「いや、ヤバイわ。恥ずかしいでしょ。え、言わなきやダメ系？ いや緊張するわ。え、マジ？ いや、言えないでしょ！」

モジモジ。



……。

「いや、言うのメツチャ恥ずかしいんだけど！ でも命令だしなく。仕方ないから勇気だすわ。んつとね……、つか！ やっぱ言えないわ！」

バンバンツ！

……。

………チツ。

………。

「でも命令絶対だしなく？ んじや言うわ！ 実は同クラなんだけど、あ、もう解る？」

解るか〜！ ヒントあげすぎたわ〜！ もう解った？ん？ん？」

……………。

……………ツクシロヨ……………。

「んじゃ発表〜、実は、海老名さんでした〜！ つか〜！ やべ、マジ恥ずかしいでしょ。ね？ 城山！な！」

……………。

……………ふう。

「皆さんすみませんでした。もうこんな命令絶対にはしません」

「いえ……………、一色さんの責任では無いわ。私の融通が効かなかったのが悪かったのよ。」

「ごめんなさい。心から反省するわ」

「気にすんな。仕方ねえよ」

「あんれ〜？ どうしたのよ、皆して！ え？何々？」

この時皆が鎮まりかえり、同じ気持ちでテントの時間を過ごした。あの戸塚すら終始真顔だった。

皆がこの戸部ショックから立ち直るのに、10分程時間を必要とした。

「あんれ〜？ どしたの〜？ あんれ〜？」

さつさと次のゲームに移ろう。そして俺はクジに手を伸ばす。

皆が手を伸ばす前にクジを観察した。

「……………」

15 回目の命令。

「王様だ〜れだ!」

皆の掛け声に俺はニヤリと笑った。

「俺だ……」

俺が割りばしをかがげると、皆からブーイングがあがる。

「またヒツキー!? なんか少し多くない?」

「先輩イカサマしてるでしょ! クジ見せて下さい!」

構わない、と二人にクジを渡すも二人は首をかしげて目印が無いかを調べている。だが、そのクジには不審な点が存在せず、疑いの眼差しはそのままに俺にクジを返してきた。俺はその王のクジを受け取り命令を下す。内容は1、3、4番がスクワット10回だ。

「また俺?! もう筋トレの命令の的中率半端ないんだけど!」

「八幡! もう、もう筋トレは嫌だ! なんて楽しい肉パーティーでこんなに体を鍛えねばならんのだ!」

「うるさいぞ愚民、さっさと筋トレしてその腹に貯めたエネルギー消費しろ」

「……筋トレで、筋トレで良かった……」

戸部、材木座、城山が前に出る。

「シュッ! シュッ!」

「ぬんっ！　ぬんっ！」

「暑苦しいよ、この二人に挟まれてスクワットするの暑苦しいよ。」

嘆く材木座を眺めながらご機嫌な俺。でも暑苦しいのはお前もだからな？　コート脱げよ。

ニヤニヤと笑いを浮かべていると、鋭い鷹のような目の雪ノ下がいた事を俺はこの時気付いてはいなかった。

今は俺の王様率は二、三割だ。大丈夫、十の盟約を守り楽しく参加させて貰っている。ただ、俺には王さまのクジがどれか他の奴等より判別が付きやすいというだけだ。

クジは割り箸、あれから俺は引いたクジを戻す度に割り箸の角に爪を立てた。見た目では殆ど解らない程度の跡をつける。普通は気付かない僅かな違いでも、付けた本人にはその小さな間違いはハッキリ解る。

ここで王様のクジには何もしないのが重要だ。イカサマを疑われたらまず王様のクジに対して目印を疑う。現に一色は王様のクジを凝視していた。

しかし、俺が目印を付けたのは王さま以外で、それも三、四本位だ。

あくまで王様を引きやすくしただけ。欲を出し過ぎず、確率をあげただけ。

本来ならこのやり方でこの程度なら疑われるはずでは無かった。だが、普段の行いのせいかすぐに疑われてしまったみたい。俺ってそんなにいつも卑怯ですかね？（ゲス顔）

王様ゲームの勝利の手段、それは命令で追い詰め脱落させる事だ。このゲームの勝利が見え、俺は微笑を浮かべる。

「さて、次のクジ引くよ〜！」

由比ヶ浜の号令に皆が集まる。

さて、次も楽しみますか。ウキウキ気分でクジを差し出す由比ヶ浜の所に歩みより、クジに手を伸ばす。

……が、俺がクジに手をかけるか否かの所で雪ノ下が横から俺が狙っていたクジを掴んだ。

「……………なに？」

雪ノ下が勝ち誇ったような顔で俺を見ている。

……………やむなく俺は違うクジを掴む。そして一齐にクジを引いた。

「王様は私よ。ひき……………いや、三番はクジを作り直しなさい。何故だかクジを見分ける人がいるみたいだから」

なん、だと……………？

雪ノ下の司令に眉をひそめてしまった。

そして雪ノ下はクジを火に投げる。

因みに三番は俺だった。やむ無くクジを作り直しを始めた。  
くつ……………。



「あれだけこのゲームに反対していた貴女が毎回必ず一番にクジを引きに行く。貴方らしくない行動の早さだわ。これから定期的にクジを作り直す。下手な小細工は通用しないわよ？」

クジの形を細工しようとしても雪ノ下が目を光らせている以上それは出来ない。俺は綺麗にクジを作り直すしかなかった。

「毎回クジを作り直していたら、お前もクジに目星をつけにくくなる。それはつまり由比ヶ浜にお前の攻撃的な命令をやらせる可能性もあるって事だ。いいのか？ そんな消極的で」

「例え由比ヶ浜さんだつてこのゲームに参加した以上は覚悟の上でしょう。私に揺さぶりをかけても無駄、よ。でもその挑戦的な目は気に入らないわ。すぐに潰してあげるから覚悟しなさい」

雪ノ下の宣言に、俺も睨み返す事で開戦の合図となった。俺たちはこの一回でさらなる王を巡る謀略が始まった。

――――

20 回目目の命令。

俺が皆にクジを引かせる番になる。

クジを引かせる人は不正を防ぐため皆が選んで余った物を取るのがルールだ。

周りを見渡す。

皆それぞれ楽しそうに話をしている。不自然な動きなどせず俺はクジを順番通りに  
ぎり、皆に手を伸ばす。

材木座がつかみ、一色が掴み、皆が一斉にクジを掴んだ。

さて、引くか。一斉の。

その時、由比ヶ浜がクジを変える。

俺が取るはずだったクジに取り替えたのだった。

あからさまな警戒だが、残念ながら俺の仕込みはそれじゃない。

「王様だくれだ？」

「我であるう!!」

材木座が飛び上がるように立った。因みに材木座は初王様。

「やつと……、やつときた……。我が世の春がきたあああ！ 全員ひれ伏せ!! フハハハ！」

「はい三人以上に命令したから炭酸一気飲み〜」

「いやいやいや、今のは違うね？ 今のは違うううう!!」

必死な材木座。冗談だよ、皆が笑った。

この結果が俺の仕込みだ。

クジを引かせる人間が意図的に王様のクジを残らせる事は不可能に近い。マジシャンみたいにすり替えるとかは専門の技術が無くては出来ないし、引かせたいクジを引きやすいよう動かした所で色々な考えを持った人間が多数いる以上確実に引かせる事は無理だ。

だけど王様を誰かに引かせる事は出来る。

俺は材木座に机の下で番号を示した。

予め材木座には俺がクジを引かせる番になったら、親指に握ったクジを引けと指示をしている。念のため皆の会話の様子を見て材木座が早めに引けるタイミングにクジを差し出した。

代償として俺の番号を呼ばない事を約束させている。

これで材木座は王様になる事が出来るし、俺が命令される危険を減らせる。まさにウィン&ウインの関係だ。

？  
周りに小さなルーザーを押し付け相互に利益をえる。これがビジネスの基本だよね

イカサマの基本は調子に乗らない事。

小さな利益を少しづつ積み上げれば良い、それだけで十分なんだ。結果、俺の危険を減らしつつ材木座の勝利を稼げる、逆もまたしかり。今まで何故か王様になれず勝ちに飢えていた材木座、交渉は簡単だった。

さて、王様。なんなりと命令を。

自分が関係無い所で王様の我が儘を見る分には楽しいものだ。そう余裕を持って材木座の指令を待つ。

しかし、その時一色の手からクジがするつと手から落ちる。そこには6と、書かれたクジがあった。

「あく、クジ落としちゃいました〜！ すみませ〜ん、ドジっちゃつて〜。あれ？ こんな時どうなるんですしたっけ、せんぱ〜い」

「……王様以外、引き直しだ」

「あ、そうでした〜！　じゃ引き直しますか。良いですよね？　せんぱ〜い」

戸部とかに気をつけるよ〜？　とか言われている一色。てへつと頭にコツンとげんこつを当てる。

そしてニヤリと笑い、俺の耳元で囁いた。

「先輩の事、私ず〜つと見てますからね？」

その声に、ぞわつと背筋から震えた。

なにそれヤンデレなの？　ていうかふ〇つし〜を根に持ち過ぎじゃね？

こんな中材木座に俺の番号を教えたら、材木座との共犯がバレてしまう。

もはや敵は雪ノ下だけじゃない、一色も、なんとなく由比ヶ浜の視線も感じる。

イカサマを疑われている時点でイカサマは達成しづらいのは仕方ない。もはや様々な小細工を仕込む事がほぼ不可能になった。

最初に恨みを買ったのが何よりの間違いだった。やむ無くクジを回収し、やり直す。

王様、命令は自重しろよ……。

気を取り直してクジを引き直し。

材木座は改めて命令を出す事になった。

材木座はうらむ、と悩んだ跡とんでもない命令を出す。

「一番は王様にあくん、である！ どうだあ！」

とんでもない命令を口走った材木座に俺は立ち上がり制止する。城山も戸部も焦っていた。

「待て、待て待て待て」

「なんだ八幡！ 我が一生に一度参加出来るか否かの王様ゲームなのだぞ！ なら、なら少し位、少しだけでも美味しい思いしても良いじゃない！」

マジに懇願する材木座。コイツに俺は解らせてやらなければならぬ。別にそこは問題じゃないんだよ。

「お前な、美味しい思いなら構わない。別にセクハラとまで言わないレベルの命令だ。けどな、戸部シヨックを忘れたのか……」

俺の言葉にハツとなる材木座。

そう、コイツの望み通り女の子ならまだ良い。

だがあくんをするのが俺とか戸部とか城山ならどうなる？ 寒いですよ？

どうやらそれをようやく想像出来たようで材木座はその想像に顔を青くする。

「だ、だが確率的には当たりのの方が多いのだぞ！ 男子でも戸塚なら寧ろバッチ来いだ

しー」

「そう上手くいくわけがねえだろ。絶対に城山だ。城山にあくんされるに決まってる」



嫌だぞそんな物見せられる上に、なんか居た堪れない空気になってしまうの。それを誤魔化す為に城山が照れた顔で微笑んだりしたらもうたまらない。

しかし、そんな会議お構いなしに一番の持ち主が名乗り出る。

「一番は私ね。由比ヶ浜さん、あくんとは何かしら?」

……なん、だと……?」

そこには悔しそうな雪ノ下が手を挙げていた。

「ツンデレメイドきたあああ!!」

予想外の材木座の引きの強さに驚く。絶対に城山が来てウホツ的な感じになるとばかり……。

由比ヶ浜が丁寧にあくんについて教えている。

「なるほど。彼に何か食べさせれば良いのね?」

雪ノ下が箸を取り材木座に向かった。

ドキツと姿勢を正すと材木座はそわそわと椅子に座る。

雪ノ下が丁寧に肉を取り、材木座に面して椅子に座る。その振る舞いは服をメイド服に変えてもまるで違和感がないほど洗練されていて優雅で、目を離せなくなる。材木座はドキドキそわそわと待ちわびた。

そして雪ノ下から箸で掴んだ肉が差し出される。命令した癖に、緊張のあまり材木座が硬直してしまった。雪ノ下はその姿にこう言葉を投げかけた。

「さっさと口を開きなさい。何をボーツとしているの？ 食べさせて貰う立場でありながら、なんて図々しいのかしら」

その言葉は、態度は、皆が夢見るお世話好きのメイドさんの姿では無く、高慢に、冷たい態度のいつもどおりの雪ノ下だった。

材木座も皆も固まる。

「……あ、あの、もっとおしとやかに王様にするように、さ。あくんとはもっと優しくさ……。メイドのごとく……。」

「食べさせてあげているのは此方でしょう？ 何を甘えた事言っているの。自分で物すらを一人で食べられない無能な王様に控える必要は無いわ。さつさとしなさい。私は命令に従う義務でやつてるだけなの。貴族に使えてるメイドと同じ、仕方無くよ。解るかしら？」

まあ現実のメイドはそうなのかもしれない。

ある意味リアルなメイドさんだわ。

キヨドリながら材木座は口を開く。

「はいあくん。終わりね。簡単な命令で良かったわ」

さつさと肉を口に突っ込み立ち上がる雪ノ下。

材木座は女の子にあくんして貰ったのにかえって元気を失っていた。妄想と現実の差に、材木座は打ちひしがれてしまった。

こうして二人目の心ポツキーが生まれる。  
どんまい材木座……。

—————

25回目の命令。

「王様だ〜れだ!」

「あ、僕だね♪ やったあ!」

嬉しそうな戸塚。えへへと笑うその顔に癒される。マジ命令じゃなくなつたつて言う事聞いちゃう。王様が戸塚なら、その国でだったら社畜になつて王に尽くすまであるな。

そして優しい微笑みで命令を出す戸塚王。

「えつとね……、屈み跳躍30回っ♪」

「」

そして容赦なく、戸塚は俺の番号を読み上げた。

ウオオオオオオ!!!

「頑張つて♪ 八幡！」

「なんかさ、さいちゃんの命令、一番容赦無いよね」

「うん、戸塚怖いわ（マジ話）」

「しかもあの笑顔である」

戸塚から出される筋トレ、寧ろご褒美です。

気ん持ち良いイイイイイ!!

ビクンビクンツ（痙攣）

—————

25回目の命令。

王様・由比ヶ浜

命令 犬の真似

そして7番雪ノ下が恐る恐る手をあげる。

「……私、ね。よりによって犬、なんて。せめて猫なら……」

「あ、ゆきのんだったんだ！ よおし、ゆきのん、犬になれっ♪」

楽しそうな由比ヶ浜。“くっ”と唸った後に雪ノ下は手を付けて犬座りになった。

「わ、わん……」

「あハハッ！ ゆきのん可愛いよ♪」

「雪ノ下先輩、可愛いですよ！ 写真撮るんでこっちに視線お願いします♪」

悔しい、と目を伏せる雪ノ下。

くつころが良く似合っていらっしやる。姫騎士雪ノ下に精神的ダメージが与えられた。

—————

25回目の命令。

王様 戸部

命令 ケツバツト

実行者 一色

食らう人 城山

「え、城山先輩について、凄いやりにくいですけど……。先輩なら容赦なく振り抜いてやるのに……」

嫌だよ。

正直この命令だけは受けたくない。

なんてくか、色々失いそうだよな。

城山も非常に悔しそうにケツを差し出す。

「くつ、もういつそやけくそだ！ 来い一色いろは！ 俺を、俺をしばいてくれ！」

「ええと、いいんですか？」

「構わん！ 強いのを、強いのを入れてくれ！」

「……じゃあ……」

あんなに遠慮しといて、一色は果敢に素振りをし、そして城山のケツ目掛けて思いきり振り抜いた。少し楽しそうに。



バシイイイン!!!  
「ぐああああ!!!」二回目

-----

ハア……ハア……。

激戦が続く。

あれから御互い様々な工夫で出し抜き合う。

クジのすり替え、クジの偽物作り、誘導尋問、動作や表情の読み合い、裏切り、容赦無い命令。

ギリギリの策で中々接戦の王様ゲームとなっていた。

それぞれの長所を活かして、皆が全力で見事に戦っている。いよいよもって皆がラストスパートへと近づいていた。

「なあ、そろそろ終わらないか？ 諦めろよ、なあ？」

「あら、ハア、比企谷君、リタイアかしら？ も、持った方じゃ、無いかしら？」  
「もう諦めるが良い、貴様に、勝ち目は、無い」

お前らの為に言っただけなのに、息も絶え絶えの癖に強がりやがって……。小細工が出来なくても、ぼつちで鍛えた人間観察力なめんなよ。

城山すら辛そうにしている。

王様ゲームももはや佳境だな。仕留められるか、仕留めるかのタイミングだ。

そう認識し、クジに手を伸ばした。

「タイム!! いやいやタイムタイム!」

すると戸部が騒ぎだした。

なんだよ、休憩の暇なんて与えないぞ?

「いや違うから! これ耐久を競うゲームでもなければ、心理を読むとかそんなゲームじゃないから!」

言われて皆御互いを見渡した。

違うの? いかに関わりを出し抜いて、いかに関わりを人間を屈服させるかが王様ゲームじゃないのか?

王様ゲームとはそういうゲームだと、途中から理解したのだが。

「いや、多分、違うと思うよ……」

「勝ち負けじゃないんよ!」

由比ヶ浜も困った顔をしていた。

なんだよ、王という権力を取る為に皆が策略を巡らせ、そしてチャンスを掴んだならそのチャンスを活かしてライバルを蹴落とすという見事なまでの王様の取り合いを再現したゲームだな、なんて神ゲー認定しそうにまでなっていたのだが。

ともあれ、二人の訴えに俺達も一旦クールダウンする。

……確かにちよつと熱くなっていたかも知れない。

屈辱的な命令や、キツイ命令をこなしているうちに、絶対に王様になってやり返す、そんな風に考え始める内に如何にして周囲を屈服させるかばかり考えていた。

やはり戦争は、どちらかが滅ぶまで終わらないのかも知れない、と世界規模でまで王様ゲームの奥深さを感じてしまったまでである。

雪ノ下も、一色も、息切れしながらムキになっていた自分に気付き、髪を整え咳払いを一つ。

皆が落ち着いたのを確認すると、由比ヶ浜はにこりと笑い、クジを差し出す。

「んじゃ、最後に一回やって終わろっか！ はい、クジ。最後は皆楽しく、さよ」

差し出されたクジを、皆が落ち着いた様子で受け取っていく。

とは言っても、命令にワクワクとか無いだろ？ 俺なんて、もうやり返される心配が無いから凄まじい命令を出す気満々なんだけど。

リア充の楽しみ方とか知らないしな。まああいつらは基本エロ目的だろうけど。

最後の王様ゲームのクジを引く。

皆それぞれ、笑顔でハラハラしながらクジを見た。まあ、なんだかんだって、こんな風に自分の番号を見るワクワクや、命令をされるハラハラ感。

最初に一色が言っていた事も、少しだけ理解出来たような気がした。

「王様だくれだ!？」

最後の王様は誰だ？

皆が一斉に顔をあげる。

皆ドキドキしながら御互いの顔を見た。

「あ、私だ！」

そして、最後に王様就任したのは、由比ヶ浜結衣、彼女である。

「さ、王様、なんなりと命令を！」

「しっかりと仕留めるのよ？ 由比ヶ浜さん」

「由比ヶ浜先輩、トりに相応しい命令をお願いしますよ？」

皆からの激励に由比ヶ浜はうくん、と唸りしばし考えた後、思い付いたように微笑み、命令を出した。

「じゃあ、私からの命令ね？ また、この皆で集まって、こうして思い出を語って、ゲームして、楽しい時間を一緒に過ごそうね？」

そして由比ヶ浜はニツコリと皆を見渡した。

最後のトリとして、由比ヶ浜らしい、最後の優しい命令だった。

「……三人以上に命令したから炭酸一気飲みな？」

「え!？」

「よっしゃ！ 俺スペ翔ブレンドっしょ！ メロンソーダ6に、コーラ3……」

「いや、え？ 今の命令はさ……。いやヒツキー、戸部っち、空気読めし！」

空気読んでるからこう言ってるんだよ。

照れ臭くて、恥ずかしくてあんな空気でいられっか。

戸部から出されたブレンド炭酸を涙目になりながら一気する由比ヶ浜。

皆、コールしたり手を叩いたりしながら応援をする。なんだかんだ、最後は由比ヶ浜のリアクションに、悲鳴に、皆が笑ってこのゲームを締めくくった。

というか肉どうなったんだよ？

結局、俺の目論みは戸部のノリで返され、一色達に流され、由比ヶ浜の優しさで終えられてしまった。

……まあ、良いか。

肉については、今楽しそうな空気が収まってから決着を着ければ良い。なにやら普通と違ったらしいが、こんな優しい王様ゲームも良いのだろう。

テントに響く笑い声を聞きながら、俺は一気飲みする由比ヶ浜を笑わしにかかった。

そして、間違った王様ゲームは綺麗に幕を下ろす。



番外1-4 慰労会は俺にしては後味良く終わりを迎える。

夜がふけていき、まん丸な月が一番高い所に上り切った時分、町の車等の喧騒からは離れた静かなキャンプ場の広場。街から遠く離れているからか、ここは夜空が良く見える。星の数が多く、こうして夜空を見上げるのもたまには悪くない。

さて、俺たちのバーベキューというのもすっかり後半に入り、今はテントの横を開き、屋根だけの状態にしている。最低限の灯りと月灯りのみにして今は戸部が何故か持ってきた花火でそれぞれが騒ぎたてていた。いわく、夏に皆でやろうと思って買いまくっていた物の余りらしい。それぞれわかれ、好きに花火をたしなんでいた。

「ふははは！ ジャッチメント・ヘル・ファイヤー!!!」

材木座が二つの花火の先端を逆さまにくっ付けて両刃の剣のように振り回す。

回した花火の残像で円を型どり綺麗なのは綺麗なのだが火花が飛び散らせながら近くを歩くので迷惑の上無い。そのままのいる方に向かってくるものだからもはやテロ行為だ。近くで花火を物色していた一色の短い袖から頭わになっている白くて細

腕に火花がはねた。

「ちよ、中2先輩熱いんですけど!」

立ち上がり講義をする一色に気付くことなく材木座は火花を振り回した。

多分本人はカッコよく火を腕から放出し敵を蹴散らす姿を妄想しているのだろうが、横からみたら単なる迷惑なだけのデブだ。

「うっわザイモクザキ君それ面白そうっ! 俺も俺も!」

さらに戸部も参戦し、迷惑×2になる。誰も得をしない謎の戦いが勃発、二人で変なポーズを決めながら対峙していた。

その一団から少し離れて固まる一団。由比ヶ浜と雪ノ下、戸塚がテントの近くでろうそくを囲み線香花火に興じている。

「すごい! ゆきのんの奴、超長持ちじゃん!」

「凄いなあ、ボクもう落ちちゃったよ!」

「これもコツよ。因みに喋ると息や振動で落ちる原因にもなるから、口を開かないも必要な要素なの。だから線香花火は無言で動かずやるのが鉄則ね」

「……それ寂しくない？」

どんな事も勝負になるなら矜持よりも勝利を選ぶ雪ノ下。

見目麗しい三人（一人男）が集まり、線香花火。なんていうか、線香花火が良く似合っている。着物でも着せたら夏のポスターにでも成りそう。今は冬だけど。戸塚が夏祭りに来たら着物着てきてくれなかな。是非来年は誘って二人できたいものだ。男物の浴衣を着たとしても可愛いだろうし、なんなら普通の私服でも絶対かわいい。どうあがいても可愛い。戸塚は最高だな！

まあ、この分なら戸塚が持ってきた花火、この分なら余る事は無さそう。買い物袋一杯に入れて持ってきた時は最後になってなんとか消費させようと2、3本纏めて火を付けてノルマをこなす様な楽しみ方をする羽目になると思っていたから安心した。

……さて、俺は何をしているか。

皆が華やかに、または朗らかにそれぞれ花火を堪能しているに對し、俺は無言でソレを見つめ、静かにしやがみこんでいた。

城山と男二人でテント裏でしゃがみ込み、無表情でうねうねと伸びるへび花火を眺めている。

うねうねうねうね。

なんていうか、戸部達のように楽しそうでは無いし、雪ノ下達のように風流がある訳でも無い、凄まじく寂しい絵面だった。

「……昔から思ってたが、この花火だけマジ異質だよな」

「そうだな。ていうか『花』では無いな」

なんとか会話を試みるもなんとも盛り上がりにかける。結局二人してによきによき伸びる花火を見下ろすしかなかった。二人で微妙な顔を浮かべ、へび花火が無くなるまで順番に点火していく。

一袋に何個も入っているものだから中々無くならない。だからといって折角戸部が金を出して買った物を一気に処理なんて使い方をしては勿体無いと思い、丁寧到一个づつ点火していた。

うねうねうねうね。

灯りの中に黒いヘビが何匹も現れる。雨が降っても風が吹いてもたやすく崩れるその体はそれぞれが場所により形を変えて体を伸ばしていく。

ちなみに俺は別段この花火が嫌いな訳じゃない。

何故なら皆が我こそ私こそと派手な自己アピールをする花火の中、周りに流される事無く我が道をいき“うねうね”してみせるこの生き様は中々見上げた物じゃないかと思ふからだ。

最後に残ってしまったら、「せ、折角だから、やる？」みたいな空気を醸し出され、やったらやったで盛り下がるであろうこの立ち位置がなんとも親近感が沸くしな。盛り下がるなら、そのままいない事してくれた方がいっての。小学校のレクリエーション。

だから俺はお前を絶対に最後の一人にはしない。他の花火が一花咲かせている内にお前もやるだけやりきってくれ。ひっそりとうねうね見るも無惨な残骸をさらしてくれ。俺のように。

そんな理由で俺はヘビ花火をまず引き受けていたのだが、一人でいるのを見かねたのか、城山が隣に座り、一緒にヘビ花火を興じている。

なんてか、気を使わなくていいって。正直かえって気まずいから。来たら来たでなん

にも言わずにそこにいるし。そんな居心地の悪さを感じながら城山に目線をやると、なんとその目は花火では無く、俺を見つめていた。

……………。

……………。

「もおー！ 戸部先輩こつちこないで下さい熱いんで！」

「いやこれ シャッターチャンスつしよ！ ザイモクザキ君とのダブルファイヤー撮って撮って！」

「ふっはははははー！」

.....。

.....。

「線香花火つて、何か訴える物があるわね」

「わかるなあ、ボクもなんだか好きなんだよね。何か心に来る物があつて.....」

「綺麗なのになにか寂しくて、凄い優しい気持ちにさせてくれるよね」

.....。

.....。

「我、次はこの置く系花火を手に持ち、ブラック☆インフェルノやってみたいぞ」  
「危ないから駄目！」

.....。

.....ゴクリッ。



なんか言え!!!

こつち見てるから何か言いたい事あるのかな? と思つたから待つてたのに、なにも言わずに見つめあつてしまつたじゃねえか!

月灯りの下で城山と二人見つめ会うとか、ちよつと海老名さんですら得しない! そしたら城山が照れたように頬をかきながら微笑んだ。

「……………すまん。なんか、見つめ合つてしまつたな」テレテレ

うわあああ!!

一色い、戸部え! どつちでも良い、この空気をぶつ壊してくれっ!

エアー・クラツシャーの登場をこれ程望んだ時は無い!

そうしている内に城山はジャケットのジッパーをゆっくりと下ろし、内側に手を入れた。その動作に俺の額から一筋の汗が流れる。汗が出ているのに少しも熱くない、寧ろひやりとする。

やべえ。

そんな風にウホツな展開を恐怖していると、城山は内ポケットからライターを取りだした。

「まさか、お前とこうして花火を眺める時が来るなんてついこの前迄は思いもしなかったのな。人間関係はどうなるか解らん、そんな事を考えていた」

カチツという音と共にライターでヘビ花火を灯す。

良かった……！ やらないか的な言葉では無くて凄く安心した。すぐに逃げるように腰を上げてスタンバったまである。

体育会系的な見た目で、坊主頭で、そして短パンにジャケットの下にタンクトップを着て。もし、危険なカミングアウトをされてしまったら信じてしまいそうな様相なんだよな。

安心すると共に、言われた言葉をかみ砕き城山の言う“この前”の事について思い返していった。

この前。

コイツの尊敬する先輩を扱き下ろし、部活から追い出したあの日の事だろう。

俺も、まあ思いもしなかった。

今後関わる事が無いだろうからこそその作戦であったのに、それが今こうして球技大会で共に戦い、焼き肉食って一緒にへビ花火だ。人間関係なんてどうなるか解らないというのを確かに感じる。

それを言ったら

由比ヶ浜だつてクラスのピツチ位にしか思つて無かつたのに今ではクラスで一番話をするようになったし、雪ノ下だつて関わりにすらなる事無いだろうと思つてた。

一色も最初嫌いなタイプと思つたし、戸塚なんて男だなんて思いもしなかつた。(今も信じられず)

そして、戸部も、城山も、依頼の後は二度と話す事は無いと、そう思つていたのにな。

「俺、先輩に柔道部に関わるなつて言われてるんだけどな」

柔道部事態になんの関わり合いは持つてないとは言え、柔道部であるコイツとこうして共に過ごしているのはあの時の先輩と交わした約束を明らかに反故にしているのだからと思う。

そんな事を思いながら俺もへビ花火に火を付けた。すると城山も頷いて笑つた。

「球技大会の時の俺は、柔道部の城山じゃなくて、チームヒキタニのセンター城山だ。問題は無いです」

フツ。

思わず俺も笑ってしまった。

真面目であろうコイツが在り来たりな屁理屈を言った事に笑いが出た。けど俺はそういう屁理屈は割と好きなのだ。

「じゃあ今はなんだよ。休日 of 城山か？」

「……うむ。同級生の城山だ。まあ、何の城山でも良い」

「なら、ケツバット城山だな」

「……それは止めろ」

そんな他愛も無いやり取りをしながらへビに火を付ける。

辺りを囲むヘビ花火のうねりと共に、俺と城山という微妙な関係の時間を過ごした。俺はあの時のやり方を間違ったとは思っていない。結果依頼通り先輩を追い払ったし、結果として柔道部は助かった。なのに、どこか心に何か引つかかっていた俺を今の城山とのやり取りは、どこか安心させていた。

「おう、ヒキタニ君ヘビ花火やってたん？ それヒキタニ君っぽいわ〜！」

そこで戸部がヘラヘラと現れた事でしたしんみりとした温かい空気は霧散する。

俺がヘビ花火なら、まさにお前は空に飛び散る花火タイプだろうな。一瞬でデカイ音と共に咲き乱れる。主役の大花火の横の賑わいで。

「ヘビ花火か〜。俺小学ん時この花火、靴の中でやられた事あるわ。あれさ、靴が駄目になってマジやばいんだよ。ロケット花火とかで狙い撃ちされるとかも良くあるよね、やばいわ〜！」

……なにお前いじめられてんの？

どう考えても酷い扱いにも関わらずなんでそんな楽しそうなの？ 楽しそうにしろ、

という空気の奴隷なの？ それともマゾなの？

そんな話を聞くと、俺は誰かと花火なんてやらないから平和でいいなと思える。やる相手がいないからな。相手がいなければ戦争だつて起こらない。つまり、俺には敵がない。どやあ。

大和のロケットが背中に命中したとか、大岡が手に発射式花火持つてヒュ〜！なサイコガンみたいな事したとか、ネズミ花火でソニックブーム！だとか身振り手振りで表現する戸部。

それを半分以上聞き流しながら最後のヘビ花火に点火する俺の後ろに、ニヤニヤと近づく影が一つ。すると点火されたネズミ花火が俺と戸部の間に投げ込まれた。

「えいつ！」

……うおおお！

バチバチバチバチ!!!

慌てて立ち上がる俺達に、その火が付いたネズミ花火が派手な音と共に回転を始め俺たちに襲い掛かった。

「やべっ!! やばいわっ! やべっ!」

「一色っ! お前! あぶっ!」

動き回りながら火花を散らすネズミ花火にワタワタと跳び跳ねる俺ら。その様子にこの騒ぎを引き起こした犯人が両手を合わせてきやつきやと笑い跳ねていた。

「アツハハハハッ♪ せんばい動きヤバいですよ!」

何故か途中で花火が俺達を追い掛けてきたからめっちゃ焦る。ねずみ花火はたまに何故か人を追尾する。何故だ。何故俺を追う!

花火が消え俺達も止まった。二人で膝に手をつけて俯き、荒れてしまった呼吸を整える。

はあ、はあ……。

「いろはす〜! 奇襲はやばいつしよ!」

抗議をする戸部に続き、息を切らしながら俺も一色に怨めしい視線を送る。

「ふははっ、八幡に戸部某よ！ 無様なダンスであつたな！」

「アハハ、二人とも焦りすぎっ♪」

材木座が腹を抱えて笑い、由比ヶ浜も可愛く微笑んでいる。クソ、笑い事じゃねえぞ。へび花火を楽しむ俺達になんて酷いテロ行為を。おかげで最後のへびは誰にも見られる事無く一生を終えたぞ。

「ははは♪ 八幡も戸部君も反応が面白かったよ！」

戸塚も線香花火をしながらハハハと笑っていた。戸塚が笑顔になれたならまあ良いです。

「じゃあせんぱい、次はこのトンボ花火を……」

「やめなさい」

小悪魔のように第2陣を飛ばそうとする一色を雪ノ下警察が制してくれたお陰で連



続テロは回避された。良識ある雪ノ下がいて良かった。後ろから軽いチョップを受けた一色がえく、と唇を尖らせた。

まあ俺らが逃げ回ってる時雪ノ下も隠れて笑ってたのは見てたけどな？

「ちえく。あ、でも花火、このトンボ花火7個で最後ですぬく。まあ、夏の余りですから数大してありませんでしたし」

そう一色が言い出したタイミングで雪ノ下の最後の線香花火が落ちる。  
短い花火大会が終わりを迎えようとしている。

「それじゃ、ラスボスやりますか！ラスボス！」

そう言つて戸部がデカイ置き花火を取り出した。

その花火は

“ 危険過ぎる！ ダイナマイト花火！”

“ 子供は触らないで！ 超危ない！”

“ 派手過ぎ！”

と自らハードルを上げまくっている文字がプリントされている花火だった。

因みにラスボスと呼ばれているのは最初戸部が取り出した際に俺が口を滑らせたから。

完結記念にあのラノベ読み直してたからつい漏らしてしまった。まあ他にアレ読める奴、材木座しかないだろうから別に良いけど。雪ノ下の髪が燃えないように気をつけなきゃ。

戸部が地面に伏せて草の間に花火を立て、火を付ける準備をする。良くそんな躊躇いなく地面に伏せられるな。汚れとかそういうのを一切気にしないのだろう。

「そんなじゃさ、点火と同時にいろはすの持つてるトンボ花火皆で飛ばそうぜ！ 終杯の挨拶替わりに！」

火を付ける為に這いつくばった戸部がその姿勢のままパチンと指を鳴らした。

「それ危なく無い？」

「大丈夫大丈夫！ テントは離れてっし、仮にラスボスの火に飛び込んでも爆発まではしないっしょ！」

まあ爆発かどうかは別にしても、トンボは上に飛ぶから投げる方向さえ間違わなければ大丈夫だろう。

不安そうな由比ヶ浜も納得し、一色が花火を皆に配る。皆に残りのトンボ花火が行きわたり、それぞれ距離を取って天下の準備をした。

「んじゃ、点火するわ！ カウントダウンよろしく〜！」

すると由比ヶ浜がせうの、と皆でカウントダウンするように促す。

由比ヶ浜や一色、戸塚も元気良く数え、

雪ノ下も城山も微笑み数字を口ずさみ、

材木座は五月蠅い位に体全体で数え出した。

俺はいつも通り口パク。

こういう時はこの手に限る。

そんな俺の思惑を察したのか、由比ヶ浜が俺の肩に手を乗せて笑いかけてきた。こう

近くで促されたら、声出さなきや駄目、だよな。

5、4、3！

年末のテレビ番組みたいに皆で数える。こんな風にカウントダウンが始まると、この慰労会や球技大会の事が頭の中に蘇る。

戸部が再び部室の扉を叩き、入ってきたあの日から対して日にちはたっていない。だけれどそれでも長く感じるのはそれだけ濃密な時間を過ごしたという事なのだろうか。厳しい訓練や試合、運動部として活動をした事のない俺に、思わぬ所で青春の運動部のような物が少しだけ体験出来た。疲れた、とか面倒だった、とか、嫌だった事を上げればキリは無いが、それでも良かった事だって確かにあったように思った。

2、1！

「ゼロ！ つとと、あれ？ 火が付かな、やべ、アレ？」

合わせたカウントダウンを台無しにしながらモタモタ戸部が点火する。

皆が手に持ったトンポを天に振り上げて、そして（寧ろ疲れる）慰労会の終わりを迎

えた。

バチバチと噴出する花火を皆で眺めながら、俺の視界の中で皆の笑顔がラスボスから上がる花火に照らされて輝いて見えた。

――――

キャンプ場の入り口で皆が集まる。

畳んだテントを運びきり、道具やら炭やらを撤収し後始末を終えてそれぞれが帰路へと足を向ける。

その中で俺の肩には小型のクーラーボックスが下げられていた。

「……んじゃ、悪いけど貰って行くわ」

そう軽く礼を言う。

このクーラーボックスの中には例の陽乃肉が収納されている。雪ノ下はそれを聞くと頷いて髪をはらった。

「皆も納得しているし、構わないわ」

あの不毛な王様ゲームの後、俺は肉争奪の本番を持ち掛けた。

勝負という物に拘った雪ノ下がそれを受け、とうとう本番となる肉争奪戦が行われ、俺も材木座も新たに同盟を組むにまで至った。

が、なんとその王様ゲームが功を制する。王様げーむを挟んだ事による時間経過により発生した満腹感によってライバル達が大きく減ったのだ。

そう、普段好き好んで食べられないような物も空腹なら美味しく見える。逆にどんなに美味しそうな物でも御腹が膨れれば魅力が失われる。

まさかの展開で俺の望み通りの結果に近付いたのだった。

後は食欲では無い物を望んでいた俺と雪ノ下、

楽しそうだから参加した戸部と戸塚、

そして腹一杯でも食い漏らしたく無かった材木座と決戦を行い、トランプゲームの大富豪や連想ゲーム肉を取り合った。

大富豪を取った材木座に偉そうにされてした舌打ち、貧民になった瞬間屈辱に耐えられずに顔面蒼白で体を震わせる雪ノ下、3を残して革命を起こした戸部に笑顔で革命返しした戸塚。

様々な激戦を乗り越え勝負を制したのはローカルルールの全てを短時間で制した雪ノ下の圧勝。

俺もローカルルールを利用した戦略を駆使して頑張ったが、今一步及ばず、無念に貧民で沈んでいった。

そして結果として陽乃肉は雪ノ下に渡される、そうなるはずだった。だが帰り道で雪ノ下がこのクーラーボックスを俺に手渡したのだった。

「なんだ、クーラーボックスが重かったとかか？」

勝ち取った雪ノ下がこの肉をどう扱おうと自由ではあるが、わざわざ俺に手渡す理由はない。寧ろ、由比ヶ浜に甘口で俺に対しては激辛な雪ノ下だ。俺なりに肉を手渡す理

由を模索して口にした所雪ノ下は優しく首を振る。

「私は肉では無く勝つ事が目的だったから、もう十分楽しんだわ。なら肉は小町さんにあげた方が良いと思っただの」

「……なんで小町にやるって知ってるんだ」

この人、どんだけ俺の思考よんでるのよ。

俺の行動を大富豪の作戦だけじゃなく、景品の使い方まで見越されていた事実に思わず戦慄する。が、「簡単でしょう?」とどうしてそれを見切っていたかの答えを示された。

「貴方が頑張る時なんて決まっているじゃない」

……まあ小町の為だわな。

それは確かにバレても仕方無い。だって妹が俺の最優先だもの。次に自分で次は金の為かな!



とはいえ、ゲームに勝ったわけでもない俺が受け取って良いものか、少しだけ躊躇している。雪ノ下は少しだけ口元を緩ませて頷いた。

「……そして今回の一番頑張ったのは貴方だから。皆そう思うから文句を言わないのかしらね。依頼達成、お疲れ様」

……なんだよ、こんな風に労われて御褒美（高級肉）まで貰ってしまったら、やって良かったとか思っちゃうじゃねえか。

そしてまた次の依頼もズルズル手伝っちゃう事になると。やだ、雪ノ下ったら社畜作りが御上手ね！

……御上手ね。

折角なので、俺も一言労った。

「お前も、監督お疲れさん」

「あら、比企谷君の癖に生意気ね」

そう言いながら雪ノ下は少し嬉しそうに笑った。

雪ノ下は一番貢献したのは俺だと言った。だがそれは違うだろう。

雪ノ下が監督指導しなければあそこまで葉山達と接戦はしなかっただろうし、海老名さんに試合を良い位置で見せられたのは由比ヶ浜のお陰だ。

材木座や戸塚もたかが授業の一環の球技大会にも関わらず休みを潰して練習に参加してくれて、一色なんて奉仕部にもチームにも関係が無いのにあんなに助力してくれた。

城山だって本番になって理由も解らないまま巻き込まれたにも関わらず、あんなに必死に戦ってくれた。

そして戸部本人も、今まで必死に積み上げた皆との距離感を捨ててまで本気で戦ったんだ。皆俺なんかより遥かに皆の方が貢献してると言える。

……だが皆も頑張った。皆一番だ！なんて言うのは葉山のやり方だ。だから俺は凶々しくこの肉を頂いていこう。そして俺がこの肉を決して無駄にせず有意義に使わせて貰う。

「んじや、小町にすき焼きでも食わしてやるわ」

言つて軽く頭を下げた。雪ノ下だけでなく、周りにいた奴らまで頷いて微笑みを浮かべる。

そしてキャンプ場を出て皆で駅に歩きだす。

「それにしても、なんか寂しいなく。バーベキュー、あつと言う間に終わつちやつたね」

由比ヶ浜が皆に振り返りながら言う。

「大丈夫だよ！ チームヒキタニは永遠に不滅だよ！」

戸塚が笑顔で答える。

「またラウンドワンとか、あの体育館とかでたまには体を動かしましょう。罰ゲームありで♪」

次に繋げようと一色が提案する。

「うむ！ 我のメテオドライブシュートが吠えるぞ！」

次もあると材木座は答える。

「それは良いな。日程が決まったら教えてくれ」

城山も次の参加を表明する。

「そうね、また、体育館は借りておくわ」

雪ノ下が具体的に進めていく。

「それマジ良いね。やりましょやりましょ！ね？ヒキタニ君！」

そして戸部は俺にサムズアップ。

だから俺は笑い返して答えてやった。

「行けたら行くわ」

今回奉仕部の依頼として、珍しく結果は上々。

後味も悪く無い。

俺も肉が手に入り大満足だ。

たまには、こんな風に終われる依頼があってもいいじゃないか。  
俺だって、たまには依頼を受けて良かったと思える事もあかもしれない。

「ヒキタニ君、今回は本当マジありがと〜！ 今度遊び行こうね！ 隼人君達も誘って  
さ〜」

「何それ絶対嫌だよ。」

しつこく絡む戸部を追い払いながら、俺は珍しく平和に終わった今回の依頼にホッと  
一息ついた。

## 番外2 球技大会 サイドE

### 番外2—1 平和な変わらない日常の私の一つの間違い

声が大きい目立つ人。例えクラスが同じであつても私が関わる事の無い平行線。住む世界も感性も違う人。

それが彼の第一印象だった。

優美子と話をしてて、教室で響く彼の笑い声で私の言葉がかき消された事は一回や二回じゃない。彼が教室の入り口で友達とじゃれあい塞がれた為に部屋に入るのを遠回りする事になった事だつて何回もある。二年生になつてからすぐ、喧しいクラスになつちやつた、と彼を筆頭に少し疎ましく思つた事も無かつたと言えば嘘になる。

基本的には自分の世界が一番大事。

私の日常をいつも通りささやかに幸せに過ごせればそれで良い。だから、その世界に嫌でも割り込んで来るその大きな声には困ってしまう時が多かった。

彼は自分が興味がある事があると誰にでも声をかけ、自分の世界では無く他人の世界に自ら入っていくタイプ、まさに私と正反対だ。

そんな人がまさか、そんな彼が私の世界の内側に入って来る事になるなんて思いもしなかった。

優美子が気になっている葉山隼人君。その彼に紹介される形でその人は私たちの前に立っている。

葉山君とは違う意味で良く目立つ彼は、遠くから目に入っていた時と変わらない態度で軽々しく敬礼して挨拶をしてきた。

「あ、チョリーツス！ 俺、戸部翔言います！ 隼人君とサッカー仲間ってか？ 友達やってます！ 女子に紹介とか、マジテンアゲ？ いやこれからよろよろ！」

「うわっ」



私が思わず口から漏れそうになった声を押さえ付け、優美子はその言葉を隠す事なく吐き出した。隣で結衣も「あははっ」と苦笑いを浮かべている。

しかし彼はまるで気にする気配も無くニカツと笑った。そんなやり取りに葉山君はフツと笑顔を漏らす。

「同じサッカー部でさ、落ち着き無くて騒がしい奴だけど、まあ結構良い奴なんだ。良かったら仲良くしてやってくれ」

しゃつす、とテヘペロして敬礼のような動作をする彼。

イラツとしたのは私だけじゃなかったようで左から舌打ちが聞こえた。

舌打ちの実行者は腕を組み、彼を値踏みするかのようになら順に見上げ、怪訝な顔で否定を口にする。

「え〜？ 正直嫌なんだけど。だってコイツ見るからに、めちやくちや軽そうじゃん。あ〜し友達間での会話とか、簡単に誰かに言い触らされるの嫌なんだよね」

まく、いるよねそういう人。

特に優美子みたいな美人が相手だと、どんな話したんだとか周りに自慢したくなるだろうしね。

あからさまに嫌そうな顔をする優美子に彼は片足を一步引き、頭をぺしつと叩く。  
いちいち見せる三流アメリカドラマのようなオーバーなりアクションに、優美子はまたまた舌を鳴らした。

「ちゃけば、実は意外に俺軽くないんよ？　なんてかマジ誠実剛健？　つて奴よ。マジで」

質実剛健を改編した言葉かな。

見た目によらず国語応用能力高いんだね。

本当に間違えて口にしてる可能性あるけど。

あまり良い顔をしないう優美子に、その隣から空気を読む事に定評のある結衣からフォローが入る。

「まあ、その、大丈夫じゃないかな？　確かに、いや、かなりちよつと見た目チャラそう

だけど……、ほら、なんてか、うん。隼人君の紹介だから！ だから信頼出来るよっ！  
ね？ 戸部君！」

それは隼人君への信頼であつて、彼への信頼では無いよね。なんか、“そうそう！”  
と言つて嬉しそうだけどさ。

そして隼人君が彼の肩に手を乗せて優美子に優しく微笑んだ。

「大丈夫。態度や言葉は軽薄だけど、コイツは意外に思いやりがあるから。優美子達を  
傷付けるような事は絶対しないって保証出来るよ」

二人の言葉に優美子も渋々納得したようで、よろしく、と挨拶を交わした。  
私も、

なんとなく、だけど隼人君から伝わってくる彼への信頼の気持ち伝わつてきて、警  
戒心は薄れてきた。

あの隼人君が人をうるさい、とか態度が軽薄とか、そんな言葉を言える相手なんて初  
めて見たから。人との距離感を大事にする隼人君に対してはその点において親近感を  
持っていた私もそれが意外で、少しだけ接してみようかな、と思えた。

それに、なんていうか、隼人君から注がれる並々ならぬ信頼に対して凄く“そういう事”という風に見えてきた。

“そういう事”なら全く文句は無いよ！

と笑顔（笑が汚）で彼を受け入れた。

でもなんていうか、戸部くん×隼人くんはイマイチ、こう、ぐつとこないかも。やっぱり隼人くんが似合うのはクラスでいったら、あのヒキタニくんとか良い感じだよね！

「私もよろしくね？ 戸部君」

「しやつす！ 海老名さん！」

眩しい笑顔で敬礼する彼に敬礼で返す私。

そうして、決して関わる事の無いだろうと思っていた彼が、この日からまさかの知り合い以上になった。

—————

それから彼は、私の学校での日常には常に存在していた。

いた、というより嫌でも飛び込んでくる、というのが正しい。

この数カ月で皆、彼の扱いが解つてきて優美子なんかは結構キツイ言葉をいい放つ事も多い。

なのに優美子は彼が嫌では無いようだ。

今までは厳しい言い方をして他人に嫌煙されたり、後から陰口を言われたりした事も少なく無いのに、彼の場合はそれも笑いにしてしまう。

「戸部うざい」

「優美子マジきびしいわ〜！」

そんなやり取りは最早鉄板と化している。

その尖った言葉の裏には、そんな言葉を言える優美子なりの信頼があり、そして安ら

ぎもあるのだろう。

彼も優美子のキツイ言葉が自分のキャラ的に助かつてる所も多いらしく、ふと優美子がいなくなると“優美子どっか行ったん？”と毎回聞いてくる位なついていた。彼も優しく流されるより厳しく言い返してくれる方が楽しいのだろう。

良く言う彼の

“俺ってマジパネくね？”のネタフリに対して、

“うん、凄いよね〜！”と心にも無いお世辞を困り顔で言われるより“は？なにが？”と返された方が会話も弾むし。

もはや二人は友人として相違無い関係と言えるようになった。

結衣の方も、最初の内は距離感が解らず当たり障りの無い優しい言葉や態度で接していたのだが、積極的過ぎる彼のスキンシップの前にそれはあまり意味が無い事を悟り、今ではあの結衣すら彼には言葉をあまり選ばず、思った事を口にするようになった。その内大和君や大岡君が混ざり、色々越えて新たなグループが形成されていく。

でも、私はまだ計りかねていた。自分の世界が思ったよりどんどん変化していく様に、戸惑ってしまった、が正しいだろう。

優美子がいて、結衣がいて、趣味があれば完結していた私。それ以上には特に望んでいなかったからこそ彼を積極的に受け入れる必要が無かったのもある。でも、そんな私も少しだけ考えを変える出来事がおこった。

それは、ある日の期末試験の話。

その時の試験は、全体的に難しく平均点も低かった。クラス全体がどんよりとした空気で答案とにらめっこしている。その結果に結衣も優美子も頭を抱えていた。

「ねえー、今回のテスト、マジ難しくなかった？ 点数、結構やばいんだけど」

「そうだねー。結衣も席で頭抱えて落ち込んでたし。二人とも気にしすぎじゃないかな。今回たまたま難しかっただけで、次に活かせれば良いじゃん」

優美子も結衣も、割りと本気で落ち込んでいるらしい。必死に励まそうとするも、選びに選んだ言葉では彼女等の心を癒せばしない。

しかも、今回は私は点数が悪くなかった。

だから答え合わせでなら力になれるけど、「姫菜はなん点だった？」みたいな話になったら色々逆効果になる。何か良い方法は無いか、そんな風に困っていると、彼は葉山君の所から空気を読まずハイテンションで近付いてきた。優美子の座る机に飛びついて、いつも通りの楽しそうなテンションで声をかけてくる。

「ええ、何々!? えらい落ち込んでんじゃん! どしたん、なんの話? 俺の話?」

「戸部には関係無い話」

「おっと〜!」

相変わらずオーバーに反応し、頭にぺしつと手を叩かせる。こっちは落ち込んでる暗い空気だからこそ異質感が半端無い。

すると、彼の目に優美子のテスト答案が目に入る。あれ? と呟いた彼に優美子はハツとなり、テストの答案を胸に隠した。

.....。

私たちの間に嫌な沈黙が入る。



優美子もどこか気まずそうに視線を反らし、その態度に彼も自分がまずい物を見てしまった事に気付いたのか、焦ったようにオロオロ見てなかったよアピールを始めた。

そんな彼を余所に、優美子は教科書を広げて問題の見直しを始める。その目には涙がこぼれそうになっているように見えた。顔を赤くし、静かに震える優美子を私は痛ましい物を見た感覚で視線を送ってしまった。

「……マジでヤバい。今回少し油断し過ぎてた」

「き、気にする事無いよ！ それに優美子の点数、言うほど悪く無いよ？ それに、数学以外だつて高得点じゃん」

すっかり平均点以上は取ってるし、今回の数学は本当に難しかった。全体の平均点が低いことから、それを証明している。でも、負けず嫌いの優美子には許せなかったのだろう。乱暴にノートや教科書を並べていく。

「気にするよ。アタシ馬鹿つて思われるのはマジ嫌なんだよね」

彼に、というか他人に点数を見られた事で恥ずかしいという気持ちが溢れてしまった

のだろう。みるみる顔に余裕が無くなっていった。

「……」

すると彼は、気まずそうに襟足を引っ張り、何も言わずに振り返り、自分の席に戻っていった。

優美子に対して特に何も言う事無く。

……なるほど、彼も流石にこれ位の空気を読む力はあるらしい。

彼が離れていく背中を見届け、事態を重く見すぎてる優美子をどうやって励ますかを考える。

気にするな、と言っても意味は無い。

考え過ぎ、というのも今の優美子には大変な事態なんだ。言える訳が無い。

さて、この空気をどうすれば……。八方塞がりのこの状況に私は指を噛んで頭を悩ま

せる。

……ポソツ。

すると私と優美子の肩に誰かの手が乗っかる。振り向くと、自分の机の中をひっくり返し引き出してきたテスト用紙を持って、彼が笑っていた。

「てかき、それよりこれ見てやばくない？ 実はさ、俺国語マジ良い点取ったんよ！」

クラス全員に聞こえるような声で私たちに答案を見せびらかした。そこには赤く染まったテスト用紙が広げられている。

そして点数は11点（イイ点）。

テストの余白に国語担当の平塚先生から

“お前追試補習休日通学を覚悟しておけよ”と赤で書かれていた。

なぜか満面の笑みでソレを見せびらかし彼は笑う。

あつげに取られる優美子。何をしているのかわからず二人で口をポカーンと開けてしまった。

そして彼の耳は答案用紙と同じくらい赤くしている事に私は気がついた。

……クスクス。

教室から笑い声が聞こえてくる。

すると彼から少し離れた所で笑う相模さん達を見付けた。

その沈黙を破る笑いに、彼はばあつと明るい笑顔に変わり、彼女等にまでテストを見せびらかして“ね？すげくね？”と自慢し始めた。

「自慢する事じゃないっしょ〜」

「やば〜！」

そして彼は相模さん達の所にまで入り寄り、答案に書かれた平塚先生のコメントを見せ、また笑いを取っている。

次第にその笑いは彼の大きい声が届く教室中に届いた。

すると今回の難易度が高いテストの結果でそれぞれが“ヤバイ”とか“私はバカかも”と広がっていた彼女等が、教室が少し明るくなつていくのを感じる。

“あいつよりはマシだな”  
という安心と共に。

そんな暴走を始める彼を見て、信じられない物を見るかのように視線を送る優美子。ようやく自分の答案から視線を外してくれていた。

教室でウケを取り、ヒキタ二君にひとしきり絡むと彼は頭をかきながら優美子の所に戻ってくる。

困ったようなオーバーリアクションで腕を動かし、そしてパチンと腕を合わせて頭を下げてきた。

「だからさ、悪いんだけど漢字とか教えてくんね？ 優美子確か今回国語良かったでしょ？ ヤバいわく、英語どころか日本語解んないわく」

ぷっ。

その言葉に、私と優美子はずいずい笑いを吹き出してしまった。

「アツハハ！ そりやアンタ普段から日本語怪しいもんね！ 知ってた知ってた！」

「マジ？ やべえわく、大人になったらサラリーマンとかなって、＼なんだ！ その口の聞き方は！＼」とか言われるわく」

「それ光景が目に映るく！ アハハッ」

会社員になって上司に怒られる彼を想像したらまた笑いが込み上げてきた。ようやく笑顔が戻った優美子に安心して、私も彼も素直な笑顔になった。

……そして沢山笑った後、優美子は隣に座る彼に国語の答えを教えてあげ始める。自分の数学の答案を鞆にしまって。

優美子は面倒見が良く、頼られると実は弱いタイプだ。だから結果として、テストの結果にとらわれて重く考え過ぎていた優美子を、ようやく他に目を向けるようにする事が出来た。彼がそこまで考えていたとは思えないけど。

彼は優美子の教えかたに「やべく。やべく。」

と称賛なんだか批難なんだか解らない反応を返しながら答えを直し始める。同じく点数で悩む結衣を巻き込みながら。

その日の放課後、彼は隼人君も巻き込みファミレスで勉強会を開催する。難問だった数学を優美子に隼人君が教え、彼と結衣には私が教えた。

帰る頃には幸せ一杯な顔して帰った優美子と一緒に帰る私達を見送りながら元気に手を振っている。

前は鬱陶しくて仕方なかった彼の元気も動きも、今では楽しいとすら思った。

戸部っちは、

彼なりに私が大切にしてある世界に対して良い影響を与えてくれる。

そして私の大切な世界の日常に、気がついたら戸部っちもその一部になっていて、それからいつからか大和君に大岡君が加わって、二年生での私の世界が新たに出来上がった。

だから私は間違った。

誰であろうとフレンドリーで、

コミュニケーション過剰で、

人懐っこく、



弄られキャラな戸部っちに対し、つい油断していたのだ。

戸部っちは驚く位ノリが軽く、解りやすい人だった。

そう言えば悪く聞こえるかもしれないけど、すごく人間が薄っぺらだった。

だけど薄い人間性だからこそ見えるその優しさ、純粹さ。

会話でお互いを牽制して空気を読んで、とかを強要される現代の人間関係の中で、戸部っちにはそんなものが無かった。

ハツキリ言って一緒にいて楽だった。

隼人君もそんな彼だから安心するのだろう。

だから私はつい油断して間違ってしまった。

ある日の放課後。

「ん、この問題はさ」

場所は教室、いるのは机で頭を抱える戸部つちと、たまたま出くわした私だけ。

優美子が風邪で欠席して、結衣が部活があると解散した後に私は先生のお手伝いで遅くなり、教室に戻ると戸部つちが一人で国語のプリントを前に唸っていた。

平塚先生に渡された国語の補習用プリントをやっていたようで、彼はその問題に苦戦していたみたいだった。

「いや、本当に駄目だわ〜！ 文字だけ読んで、その人物の気持ちを答えろって意味解らなくない？ だってその人の気持ちなんて、その人にしか解らないっしょ、普通！」

「アハハッ♪ まあ現実ならそうだけどこレは物語だからね。だから、作者が作るキャ

ラクターには当然こんな気持ちがあるっていうのを文章の中で伝えてくれてるんだよ。だから、そんな文章が無いかももう一度読み返してみなよ♪」

国語の問題に対し、妙な誠実さを見せる彼に可笑しくなりながら私なりのアドバイスを出す。

隣に椅子を近付けて文章を指で示しながら彼に読ませる。

すると彼は「あつ」と嬉しい喜びの声を漏らし、文章を声にした。

「この、「私は変化が怖かった」って奴じゃね？主人公の気持ちー」

ようやく見付けた答えに、彼は目を輝かせながら私に報告する。

そしてせかせかと答えを答案用紙に書き記した。

「物語そのものは読む人の解釈しだいで変わっていく物だけど、作者がどう伝えたいか？の所については国語の問題に出るような話なら、絶対ヒントはあるんだよ。こういう問題のコツは、答えは必ず文章の中にある、という事かな」

おおく、とか

そんな裏技が！

とか騒ぐ戸部つちに微笑ましくなりながら一緒に笑う。

「人によって物語の解釈は変わるって言ったけど、私のこの物語の解釈だと、主人公と従者の少年がデキてると思ってるよ！」

「え!? 姫じゃないの!?!」

「違うよお! 姫の為に戦ってはいるけど、常に一緒にいるのは従者でしょ!? 物語を通じて育まれる二人の気持ち、もうテスト中は“何この夫婦、御馳走様です!” って感じでもう大変で……!ぶはっ!」

「どんだけテスト楽しんでんのよ! マジ海老名さんパないわ〜!」

優美子がないので、ツッコミ不在の為の脱線。

私は、他の男子とは違って、戸部つちはなんか、友情らしき物だけで接してしまっていた。  
他の男子とは違い、普通に接して、普通に助けて、普通に助けられて、普通に振る舞っ

た。

好きやら、好きじゃないやら、

カーストやら駆け引きやらおべっかやら

評価やら、そんな面倒な気遣いを必要としない彼との会話が楽だった。

再び続きの文章を読んで貰うべく、文章を指でなぞっていく。その時、彼の文を読む  
声が止まった。

あれ？

そんな風に思い顔を上げたその時、

ようやく自分の過ちに気付く。

「海老名さんってさ、実はめっちゃ優しいよね」

その時発せられた言葉は、軽いばかりのいつものソレとは違った、嫌な重さがある事を感じた。

彼の横顔を見る。

……失敗した、その顔で私はようやく理解する。

彼のキャラクター性でそういう風に見てなかったのもある。

優美子や結衣なんて魅力的な女の子達の間において、まさか私が、なんて考えていたのもあった。

だから私は失敗した。

「実はってなんだよ〜！ 普段から優しいでしょ〜！」

私はいつものように笑う。

すると彼もハツとなり、少し戸惑った後に私が求める通りのお調子者の彼に戻った。

「いや、そういえばいつも優しかったわ〜！ 気付かなかった〜！」

そう言って大袈裟に驚いている彼の顔はもう、私の知る彼の顔じゃなかった。

良く作られてるけど。

パツと見たただのお調子者だけど。

いつも通りの世界を作ってくれているけど。

それはもう、私の良く知る仮面の顔だった。

「今気付いたの??」 国語より先にもつとデリカシー勉強しなよ。彼女出来ないよ?  
? ほら、サッカー部のマネージャーに可愛い子きたじゃん。頑張つて格好つけないと  
ね!」

ああ、自分が気持ちが悪い。

彼との接し方に、もう新たな距離を作り出してしまおう自分が、そしてそんな今が気持ち悪い。

「いろはす?? いやアイツ良い奴だけどそういう対象じゃねえつて!」

「うわ、戸部つちなんかにフラれたつて知つたらその子超怒るよ!! ある意味傷付く!!」

「いゝやそれマジ厳しいわ!! でもさ、俺が見るに、アイツ隼人君が好きなんよ。だか



ら、俺も応援しなきゃって意味でさ。俺誰が誰好きか解るんだよね。すげくね？」

「えく？　じゃあ真美ちゃんは？」

「隼人君！」

「じゃあ幸枝は？」

「それも隼人君！」

「アハハ！　裏技だねそれ！」

少しづつ、少しづつ距離を取る。

然り気無く自分の鞆を手に取りながら。

「だべ！　だからいろはすは隼人君にマジだね！　だから、優美子といろはすどっち応援すべきか解んなくなりそうでさく」

「……それ優美子に言っておくね？」

「それは無いっしょ！　……アレ？　海老名さん帰んの？　アレ国語の続きは？」

「いや、もう今日は疲れちゃった！ だから帰るね。頑張ってる！」

「それも無いわ〜！ アレ？ マジ？ ちょ、海老名さ〜ん！」

彼の言葉を待たず扉を閉める。

そして、私はその場から足早に逃げ出した。

男と女の間には友情は存在しない。

いつだったか、漫画で見た言葉を思い出す。  
「ただど私は、

昨日迄の私は、彼との関係に確かにそれを感じていた。

そしてグループの男女が、恋愛が絡んだ事でめちやくちやになるという事は嫌という

ほど知っている。

私は今が幸せだ。

その変化など望んでいない。

一時期は存在していた友情。

そして今の幸せ。

私はそれを守る為に、

彼の気持ちを受け入れない。

その思いを痛む胸に抱きながら、私は廊下を走り抜ける。

これは修学旅行の事件よりも、もっと前の話。

## 外伝 2-2 そして始まる第2の矢

寒空の校庭、皆が重そうなコートを着て凍える風から耐え忍び、今日も学び舎へ足を運ぶ。

その一団の中、私も厚手のコートを着込んで、いつものカバンと沢山の漫画が入った紙袋をせっせと運んでいた。

周囲を見渡せば、雪が無いのにも関わらず“寒い”というのが一目で解るような何処か寂しげな景色の中、この寒さにも負けず綺麗な足を出して歩く我が友を発見した。

後ろから小走りで駆け寄り、彼女の前に顔を出して声をかける。

「おはよ、優美子。今日も寒いね」

「ん、おはよ」

私の挨拶に少し微笑みながら軽く返した後、優美子は歩みを緩める。そしてゆっくり二人の歩幅を合わせていった。優美子はその過程で私の手にある紙袋を指差して尋ねる。

「なにそれ、重そうじゃん」

「これ友達に頼まれたマンガの全巻なんだ。一気に持つてきたから重くて重くて！」

持つてきてから考えるのもアレだけど、やっぱり相手が持ち帰る事を考えると半分位に別けた方が良かったかな？ と今更反省する。

「だけどオススメな物ほど一気に読んで欲しいという願いもあるから仕方ないよね♪  
本当ジャン○は今も昔も良作も多くて多くて。特に男の子達の友情を主に書いてくれるつてのが良い所だね、少年誌は！ 定期的に私たちのような者にも餌を投入して頂き誠にありがとうございます！」

「愚腐腐と笑う私を見かねたのか優美子は持ち物の話題から既に次の話題へと移行する。」

「……今日、アレだね」

主語も題も不明瞭な話題。しかし、付き合いの長い私には優美子が何を言ってるかわかる。

「アレだね、提出日。やって来た？」

「やって来た。マジ大変だったんだけど。結衣は大丈夫かな？」

因みにアレとは社会の課題の提出の期限の事だ。

結構な量の課題だったので最近の皆の悩みだった。今の時期、下手な事して内申点下げたく無いしね。

絶え間無く続く学校イベントと課題のラッシュ。

学校の楽しい時間の終わりを感じ、イベントを終わるのを惜しむ気持ちと早く終わらせたい課題への気持ちで落ち着く暇がない。

そんな主語を必要としない会話をしていると、噂の主が横からパタパタ走ってくる姿が目に入り、二人で歩を止めて合流した。

「やつはろ〜二人とも！ いや〜、今日も寒いね〜！」

「おはよ」

「はろはろ〜結衣。課題大丈夫だった〜?」

由比ヶ浜結衣が息をきらして私たちの前に出て元気に挨拶を決める。

結衣の表情を見て、この質問が地雷では無い事を感じ取ってから尋ねてみた。すると結衣は、輝くような笑顔でVサインを決める。

「うん、ゆきのんが手伝ってくれてね。お陰で助かっちゃった♪ あ、手伝うって言っても、課題そのものは私がやったんだけど、一杯アドバイスしてくれたり紅茶入れてくれたりしたんだよ!」

結衣と最近仲良しの雪ノ下さん、半年前位から関係が急接近した一人。

課題が終わったのもあるだろうけど、彼女の話をする時の結衣はいつも輝いていた。

横の方で優美子が少し寂しそうに唇を尖らせているのに癒されながらも結衣の話を聞いていく。

「あ、それとね? ヒツキーも、なんだかんだで参考資料とか集めててくれたりとかさ、

文句言いながらも最後までいてくれたりとか、してくれただよね。も、もうそれなら素直に手伝ってくれたら良いのになっ！」やり方がアホの子」とか色々言つてばかりにするもんだから素直にお礼も言えなかつたもん！」

相変わらず、もう一人の急接近した比企谷君とも仲が良好で良かった良かった。

あの時、あの修学旅行の時に関係が悪くなつた彼女等を見て、私は少し罪悪感を覚えてしまつていたから、関係が元に戻つて本当にそう思う。

……これで何もかも元通り。

奉仕部のお陰で、私の平穩が元に戻り心から安心する。

毎日気の許した友達達の輪の中で、ゆるやかに幸せに過ごすこの毎日は大好きだ。この平和が守られて本当に彼らには感謝の言葉しかない。

そうして優美子と結衣が楽しそうにじやれあつているのを見て、心から癒される。本当に、本当にこんな毎日が続けば良いのに。

しかし、それは叶わぬ夢だ。

後数カ月でクラスは変わるし、一年後にはそれぞれ違う道を歩んでいる。いずれ終わ



る関係、生活。

だから、今を大切にしていきたい、それが私の願いだ。その為に私は変化を拒む。そう心の中の決意を再び心に刻みながら、前から嬉しそうに手を振って走り寄つて来る彼に手を振り返した。

「おつすゝ、今日もおつはゝ！ 海老名さん、優美子、結衣！」

「あ、戸部じゃん。隼人は？」

いつも朝から異常にテンションが高い彼は、軽い敬礼のようなポーズで近寄つてきた。

いきなり本人を蔑ろにして意中の彼を探しながら髪型を整える我等が恋する女王。私達もその言葉で挨拶を返すタイミングを逃してしまった。

「いんやゝ？ 朝練今日無かったから一緒じゃなかったんよ。今の時間なら教室じゃね？」

「なんだ、じゃ戸部だけなの？ なんだ」

容赦の無い言葉に、結衣は苦笑。

とべつちは「だよね。つて、オイ！」みたいにノリ突っ込みで返す。

そのまんま自然と私達のグループに混ざりながら昨日のテレビやら今日の授業やらの話を始めた。

彼が来た途端絶え間無く話題が出るものだから、ある意味凄いボキャブラリーだな、と一歩下がった位置で微笑ましく優美子達とじやれあう姿を見つめていた。

「今日もマジ寒いわ。コレ外で寝たらやばいわ」

「いや、寒くなくても外で寝ちゃダメだよね？」

ナチュラルに私と結衣の間に入ってくるとべつち。そのまま会話初めの鉄板。天気・気温”の話を持ち掛けてきた。

「優美子とかめつちや足出してゐるし。見ただけで寒くなるわ！ つべ」

「すごいよね。私スカートの下にスパッツとかジャージとかはかかないと無理だもん」  
「は？」 別に、これくらい大丈夫じゃない？」

「あ、なんか小学の時の体育で、言われてないのに短パン半袖を貫く奴いたよね。優

美子もそのタイ……

「あ?」

……なんでもありません」

戸部っち、女子のお洒落への意識の高さを、強がり元氣少年と同列に扱うなんて本当ある意味勇敢だよ。私たちは生足出してたまに「寒い」って小声でつぶやいてる優美子に微笑ましく聞いてないフリしてるというのに。

どつかのファッション誌に書いてあつた言葉「お洒落とは我慢」の一文を思い出す。女の子は本当は寒いのを我慢して綺麗な足を出しているんだ。美意識女子はそういう所にも気を使わなくてはいけないから大変だよ。

まあ自分の足とスタイルと顔に自信が無いと出来ない意識なんだけど。自分の足だと、ちよつと出せないかな。そもそも出す理由が無いけど（笑）

「てか、その短パン小僧、寧ろ戸部っぽいイメージじゃん。バカっぽくて無駄に元気で。絶対冬でもボール持って校庭でドッチボールしてたタイプでしょ?」

「いんや、俺は長袖着てたよ? ボール当たったら痛そうじゃん」

「理由がへタレだ!」

優美子にしては多い口数。結衣にしては遠慮の無い言葉。そんな気心の許された三人の様子に、思わずため息をつく。安らいだような気持でフツと口から空気をぬいてみると、スツと私の荷物が軽くなった。

横を見ると戸部つちは私の手から漫画を入れた袋を取り、持ってくれていた。

「重っ！ コレ超重いわ。何コレ？ お、これ面白いよね」

「じ、自分で持てるから……」

そういつて袋をしつかりと持ち直そうとする彼から、私は何か反射的に荷物を取り返す。その行動にとべつちはキョトンとした顔で私の顔を見た後、気まずそうに頬をかいた。

「……こ、これ、ちよつと先生に見つかつたらやばい荷物なんだよね！ 没収とかされたら嫌だからさ、自分で持つよ」戸部つち、平塚先生とかに目を付けられてそうだし「あ、そうなん？ 了解了解、先生来たら教えるわ」

私からの咄嗟の言葉になんの戸惑いもなく、ヘラヘラと腕を振って笑った。

一瞬、気まずい空気が流れた気がしたが、彼はいつも通りに笑い、優美子達に女子の荷物を勝手に取るなんて逆にデリカシーが無い、と弄られていく。

「てかさ、戸部はささ。人との間合いの詰め方が急なんだよね。他人とのテリトリーが近いってか」

「それ私も思うな。なんてか、顔とかめっちゃ近いよね。ただでさえ声大きいのにささ」

「え、友達の間でそんなん関係無くない？ 心同士はいつも寄り添ってるってか、俺たちはいつでも隣にいるってか？ 俺の皆への心の距離を現してるってか？」

「キモい」

「キモい……」

「なんか今遠くなった気がするわ、心の距離……」

何事もなかったように三人がいつものように笑いながら話をして歩む。だから私も一緒になって笑っていく。

内心では荷物を取り返した時の彼の表情に、胸が傷んでいた。

三人を見る。

そこには、恋も駆け引きもカーストも性別も関係なく、本当に楽しく友情だけで過ごせている三人。でもなんだか、私は少しだけ距離を感じるようになっていて。その理由は明白だ。私があの一以来、勝手に距離と壁を作ってしまったからだ。

私が望んだ、変わらない”平和な日常”。自分で望んで、あの男の子に助けて貰って維持したこの時間。その流れる時間の中で、私は彼の良く言う”欺瞞”という言葉が脳裏にふと浮かんでしまった。

「あ、ちょっとわり。先行ってて！」

そんな時、戸部たちは急に私達から離れて校舎方面へ走っていく。

もしかして、気を使わせてしまったかな？ と申し訳なく思っているとどうやら杞憂だった。

走る先には、校舎の中からよいしょよいしょと重そうに段ボールを運ぶ女子達がいちよう、とべつちはその二人の所に手伝いに向かったようだった。二人の前に走つていき、荷物をよいしょと担ぎ上げる。

「大丈夫？ めっちゃ重そうの感じじゃん。てか、めつちや重つ！」

彼女等から荷物を受け取ると、一瞬フラつとしたもののそのまま持ち直して運ぶスタイルに落ち着く。

すると二人の女子生徒達は可愛く手を合わせながら大袈裟に喜んで見せた。

「あ、戸部じゃくん！ 助かる〜♪ マジ荷物重くて困ってたんだよね〜！」

「だと思つたわ〜！ 朝練の片付け？ 何処に持つてけばいい感じ？」

「校舎裏の第2倉庫までお願いい♪ はい、コレ鍵ね？」

「あ〜。鍵も返しとくわ〜」

可愛く小首を傾げながら戸部っちのブレザーのポケットに鍵を入れる女子に軽く返事をして彼は足はやかに校舎裏に向かつていった。

戸部っちの背中が見えなくなる頃に女子たちはふうふう、とため息を付いた。助かったと胸をなで下ろす。

「いや、戸部来てくれて助かったよ♪ なんかさ、いつも色々手を貸してくるんだよね」

「そうなの？　もしかして戸部ってさ、アンタの事好きなんじゃない？　ひよつとしてさー！」

「え、戸部が？　アハハツ、無いわ！　戸部とか友達にしか見えないってか、絶対それ以上とか考えらんくない？」

「だよね！　それほんと解る。面白い奴だけど彼氏としてはちよつとね！」

……私は彼女達の発する雑音を聞き流しながら、優美子達に着いて歩みを進める。二人の会話がやけに耳に残ってしまった。

とべつちは基本的に誰であろうと気安く、誰でも会話をし、誰にでも優しい。打算



も無く、ただそう思ったからそうしているんだ。

私は「自意識過剰」と心の中で薄ら笑う。

二人の女子と、もうひとり、誰かに向かつて。

冬の教室。

暖房の空気と冷たい空気の雰囲気合わさったこの場所で、今日も授業が進んでいく。午前中の授業が終わり、昼が過ぎ、休み時間があつと終わる。今日も一日の時間が長いようで短いようで進んでいく。

そして放課後になり、皆が部活やら遊びやら家に帰るやら、それぞれ動き出す前に集まり別れを惜しむように無駄話したり今後の集まりの約束をしたりとそれぞれが話します。

「それじゃ、今日は皆でラウンドワンって事で。隼人もそれで良いっしょ?」

「ああ。今日はサッカー部は顧問がないから休みだし、軽いミーティングが終わった

ら戸部と二人で合流するよ」

「オツケーオツケー」

私と優美子と結衣、そして隼人君ととべつち、大和君に大岡君で急に決まった今日の放課後の過ごし方について話をしていた。なんだか気が付いたら行動が決まっています。私も一緒に参加する事になっている。

私としては今日は本屋に行って新刊を買って読む予定だったのだけど、それは明日に延期かな。友人の付き合いは必要だし、何より私たちがこのメンバーで過ごす時間は意外に少ないんだよね。

だから、多少は予定を変えてでも皆と過ごす時間を選ぶのもいいかな？ そう私は決断していた。

「隼人君、今度はボーリング俺と組んでくれよな！」

「ふ、隼人が相手だって、負けるつもりはないからな」

「はは、大和はボーリング、結構うまいしな」

私としては今日は本屋に行って新刊を買って読む予定だったのだけど、それは明日に

延期かな。男友人同士の付き合いは必要だし、何より私がこのメンバーの絡みを見ていられる時間は意外に少ないんだよね！

だから、予定を変えてでも彼らが共に過ごす時間を選ぶのもいいかな！ 二次元のホモもいいけど、三次元もね！

漫画があれば、男が二人いれば常に楽しいどうも腐女子です。

「私も部活終わったらずぐに合流するからっ！ 遅れるけどゴメンね〜」

申し訳なさそうに謝る結衣に優美子は目を向ける事なく手でいいよ、と伝える。

「ああ、良いって良いって。急な話だったし無理しなくて。もし来なくてもライン入れてくれればそれでもいいから」

その返事を受けて結衣はぶんぶん腕を振りながら部活へと足早に向かっていった。少しウキウキとした表情で。

こうして見ると、結衣も大きく変わったな、と思う。

前なら、優美子の話を断るなんて出来ずに、本当に無理な用事でも無い限りは合わせていた事だろう。なのに、今は自分の大切な時間を考え、自分と他人を両立する事が出

来るようになっていた。優美子もなんだか少し丸くなったように見えるし、隼人君もマラソンの後からどこか吹っ切れたように感じた。

少しづつ、少しづつだけ変わっていく景色。いつか、私も変わる事があるのだろうか。

そんな時、彼が変わらぬ大きな声で皆に喋りかけた。

「てかさ、今度の球技大会の話なんだけど、俺、昨日休んだから内容なんも聞いて無いんだけどどうなったん？ チーム分けとかさ」

彼が持ちかけた話題、それは今度行われる学校行事、球技大会の話だった。

「あ、それな。あれさー、やる事とかチームとかもう決まったんだよね。体育の時間に」「うえ!!」なにそれ俺なんも知らないんだけど!」

学校行事の話には五月蠅い彼が目を見開いてリアクションする。

その彼の言葉に隼人くんがギクリ、としたように体を反応させ、申し訳無さそうに頬をかいた。

大岡君と大和君が笑いながら戸部つちに言い訳を始める。

「いや言おう言おうとは思ってただけだよ。お前会う度すぐえ喋るじゃん？ だからタイミング逃してたってか……」

「それな。お前、話題が途切れる前に次の話題始めるし」

全くその通り。戸部つちは話が止まる事は駄目な事とも思っているのか喋りたい事が山積みなのか、間が空くとどんどん新しい話題をぶっこんでくる。ある意味そのボキャブラリーには驚かされるけど。

昨日の動物ドキュメンタリーで肉食動物に襲われるバイソンが可哀想だったと話した後すぐ、舌の乾かぬうちにびっくりド○キーのハンバーグが美味かった言い始めた。

少し真面目な話をしていたら急に最近始めたお笑い芸人のギャグを始めたり。

昨日化粧の特集をやっているその変身ぶりにひいた、と話したノリで優美子に化粧の上手なやり方とか聞き出したり。

なんていうか戸部つちは、何か口に出す前にひと呼吸置いた方がいいと思うよ割とマ

ジで。特に最後のなんて優美子にグーで殴られてたし。

一回女の魅力について結衣が皆に相談して来た時なんて、散々下手くそに励まそうと安い言葉を並べた最後に、「結衣胸はおつきいし！」と言い放った時はどうした物かと思つた。悪気も下心も無いのが逆にタチが悪い。

「まあ隼人君と一緒にならなんでもいいけどさ。話し合い参加したかつたわ。俺隼人君大岡大和で4人しょ？ あと一人誰なん？ ヒキタニ君？」

隼人君と一緒にいいとかちよつとそういうフレイズ気を付けた方がいいよ。デリカシー無いなあ。興奮すんだろ。しかもヒキタニ君をカプに入れる辺り解つてるね戸部っち！

「いやいやなんでそこでヒキタニだよwwwてか、まずお前俺らとチーム違うしwww」  
「hgc」

大岡君から伝えられた事実、流石の戸部っちも真顔になって一時停止する。葉山君がバツが悪そうに苦笑いを浮かべるのを確認すると、彼はギギギと首を大岡君に向け

た。

「いやいや、チーム五人なんしょ？ 隼人君と、大和と大岡でまだ二人位入れんじゃん！

俺ハブとか意味わかんないんだけど！」

「それがさ……」

この世の終わりみたいな顔で手を広げて訴える姿に葉山君からその理由が告げられた。交流を理由に二つクラス合同でチームを組む事が決まっていた事、一クラスにつき最大三人までしか組めない事。それを知った頃にはもう三人で「一緒になろう（意味深）」と言いついてしまっていたことが告げられた。

「うえええええ!! じゃあ俺誰とチームメイトなん？ チームメイトの誰もそんな話してくれないんだけど！」

「チームは最後まで余ってた奴等だよ」

「ヒキタ二君かあ〜！」

大和君から余ってたと聞いてまず彼の名前を容赦無く出すあたり流石とべつちだよ

ね。

「いや何が嫌って、隼人君と一緒にじゃないとか寂しすぎるっしょ！ 皆一緒なのに俺だけ一人とか、いやマジないわ〜！ 組み直してよ〜！」

「嫌だよ。隼人君は俺らとやるんだ」

「そうだな」

んもう餌を無暗に、無暗に与えないでください！ ただでさえ決まって腐女子の好物バスケットをやる事が決まって余裕ないんだからさ！ 黒○のバスケット、名作ですよ〜！ スラ○ンの流川花道も可〜！

「うわ〜、球技大会、もう終わったわ〜」

「まあそういうなよ。違うチームでも案外楽しいかも知れないだろ？ 俺達で戦うのも面白そうだし」

チームが分かれたれた友達同士の戦いっていいよね〜。私は断然黄色が好きだけど、なんだかんだ紫受けも好きっていうか？ たぎってきましたわ〜！



「そんなん言つたつて、隼人くんとやりあつても勝てる訳ないし。ボコボコに負ける姿晒されても、はずいだけっしょ〜」

「それでも無いだろ？ 勝負は決まつてないし、それに頑張つて一生懸命やつてれば格好良いに決まつてる」

本当青春を描くスポーツ物つて本当最高の素材！ ストーリーを楽しめて、キャラのドラマを楽しめて、そしてキャラ同士の絡み（意味深）で愉しめて、本当頑張つてる男の子つて素敵つていうか？

「戸部だつて運動神経いいんだし、一生懸命頑張つて、それで活躍なんかしたりしてさ。そんな戸部は絶対かっこいいから不安がるなよ。なあ姫菜？」

「うん!!! 何事にも全力で頑張つてプレイするスポーツマンつて最高だよね!」

思わず元気良く答えてしまった。鼻血を噴出させてしまい隣で優美子が「うわつ」と引かせてしまう。ティッシュをすぐに差し出されたのを受け取った。

……で、なんの話だっけ？

皆に顔を戻すと、意外そうな顔をした優美子と隼人君がこちらを見やっついて、戸部っちはポカーンと口を開けている。

「姫菜って、スポーツマンが好きだったんだ。意外」

え？ いや、まあスポーツ物は100種類ある大好物の一つではあります、それが何か？ 私の腐の趣味が何に関係があるのかは解らないままでいると、戸部っちが急に元気になりました。

「お、俺、球技大会、頑張るわ!!!」

そういつて彼は拳を振り上げて元気に机の上に飛び乗った。行儀が悪いよ？ それにどうしてそんな急に……。

そのまま彼は机の上でやたら気合一杯に吠えまくると、勢いよく飛び降り、教室から

元気よく出て行った。鞆やら何やらを全て放置したまんま。

「……んで、ラウンドワン、どうすんのって話なんだけど……」

普段は中心の優美子を含め、私たちは彼の勢いに圧倒されたまま教室の出口を黙って見つめていた。

そのあと彼は校庭を何週もランニングしたり、バスケット部にこっそり紛れ込んで練習に参加し教師につまみ出されたりしている姿が散見されたらしい。

そして彼が再びあの扉を叩いていた事を私は知らない。

## 外伝 2—3 突きつけられる真実

カツ……カツ……。

お昼休みを越えた午後の最後の授業である国語の授業、ある意味最後の関門であり登竜門。これが終わればそれぞれが自由に部活や放課後の教室等で過ごす時間が訪れるこの時間。国語教諭平塚先生が物語について読み上げながら教室を巡る。

その中、一人教科書を辛うじて支え、それでも最後の山場と昼食後の睡魔に負ける生徒が一人。

「大昔、仙女が月の下で踊り、小鬼が山の中で仕事をする時のことでありました。或る小さな村に、貧しい靴屋の夫婦が住んでいました。靴屋は正直でもあり、仕事好きでもありませんでしたが、一日一日と貧乏になって行って、とうとう、一足の靴の皮を買うだけの金しかなくなりました。そして、この一足の靴を造れば後はどうして暮らして行

くか、あてがありませんでした。靴屋は皮を買うと、それを切つて、次の朝早く起きて、縫うつもりで、お祈りをしてから、寢床に入りました」

「おい、おいつて！」

“ 勤勉な子鬼 ” を朗読しながら教室を回る平塚先生の歩む先にその人間が一人。友人の助けの声も聴き届かず、奈落の睡魔に包まれている。

「次の日、朝早く起きて、靴屋は窓の戸を開けました。と、不思議なことが起こっていたのです。前の晩、切つて置いた皮が、立派な靴になっていたのです。靴屋は夢ではないかと思つて眼をこすつて見直しました。が、矢張り靴が窓から入つて来る朝の光の中に、ちゃんと置いてあるのです。靴屋は手に取り上げてその靴を見ますと、針の縫い目も、釘の打ち方も申し分なく出来ていて、今までこんなに旨く出来た靴を見たことがないと思ひました」

「おい、起きろつて。おい」

もはやタイムリミット。講師はすでに彼の目の前にいる。ゆっくりと教本を丸め、振り上げた。到達と同時に、助け船を出していた友人が我関せずの姿勢を取り、ノートにペンを走らせる。

「……そしてこのクラスには勤勉な子鬼はいない。寝ていたら授業の内容がノートに書いてある訳ではないぞ戸部！」バシイイン!!!

「いつでえ!!!」

教科書を持ったまま顔面を机に伏せて眠っていた彼の頭に、とうとうその鉄槌が下される。かろうじて持たれていた彼の教科書は床に零れ落ちた。

「戸部え、貴様あれだけ補習を出されてまた居眠りとは、中々肝の据わった奴じゃないか。よほど土日にも学校に来たいと見える」

「い、いや、来たくないっす！ ちよつと今一瞬落ちてただけで授業は聞いてたっつてか」  
「ほう、数学の教科書を持ちながら国語の授業を受けているのに話を聞いていたとは器用な奴だな」

「あれっ？ 今6時限つすか!？」

そして間の抜けた事を言い放った彼は平塚先生にもう一度はたかれる。

その軽快な音と共に教室がドツと笑いに包まれた。

戸部つちは朝から彼はこんな感じだ。授業どころか休み時間ですらああして眠っている。皆が集まっても机で眠りこけて、休み時間にボール遊びをしていた男子達に体当たりされても眠りこけ、さらには昼休みまでパンをかじる寸前に力尽き眠っていた。

そんな何故か疲れ切った彼は皆に笑われながら鞆から国語の教科書を漁り始める。その様子を見て優美子はあきれ顔で口を綻ばせ、結衣は一緒になって教科書を探してあげていた。そんな彼らを私は皆と一緒に笑いながら眺めていた。

最近戸部つち、良く寝るなあ。

まあ元から授業なんかは真面目に受けるタイプでは無いけれど（本人は真面目のつもり）、休み時間とかまで居眠りしているのは珍しい。友達と過ごす一刻を無駄にしないように常に三步以上はダツシユで歩み寄って来るのに。廊下どころか教室内を全力ダツシユするのは止めようね。

話しかければ元気に対応する辺り、悩みがあるようには見えないけれど。

「つべ〜！ 国語の教科書どこしまったっけ？ 見つからねえ！ 結衣、貸して！」

「いや私も今授業中だかんね!！」

「んじや優美子一緒に見せてよ！ 椅子寄せっから！」

「あんた授業中も五月蠅いから嫌。てか、もつと探しなよ。鞆の奥とかにしまったんじゃないの？ ……て、ちよ、やだ！ 何これ!！」

「あ、それ結構前に鞆にしまったままだった焼きそばパン（二元）だ。つべ〜」

どたばたと鞆をヒックリ返す彼を手伝って優美子も結衣も一緒になって探してあげていると、彼の鞆からどンドン関係ない物が出てきた。スポーツ雑誌、どこで見付けて来たか解らないお遊びグッズ、海外のバスケット特集に流行のCDエトセトラエトセトラ。

「おまけにスラムダンク5巻だと!? お前は学校に何しに来てるんだ!！」

再び振り落とされる教科書。



パシン、と綺麗な音が響き、再び教室が笑いで包まれる。そんな事をしている内に、本日最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響き、そうして本日の過程は終わりを告げた。

「こんな事をしている内に終わつたじゃないか！ 全く、戸部は後で私の所に来いやれやれ、今日は終わりだ。各連絡事項は特に無いので帰りのHRも無し、それぞれ気を付けて部活、帰宅をするように」

呼び出しに肩を落とす戸部つちを他所に、皆がそれぞれの放課後を過ごす為に机の上を片付け始める。優美子達は呆れた顔で彼の広げた鞆の中身を片付けてあげている。

「スラムダンク、か……。懐かしいな」

平塚先生はどこか寂しげに、そして愛おしそうに漫画の表紙に目線を送り、教卓へと戻っていった。

「お、皆待つててくれたん？」

ざわざわと騒がしい職員室の前、夕方特有の暖かかい色の夕日が差し込まれ窓枠と壁の陰を作り出す放課後、平塚先生に呼び出された彼を皆で職員室の前で迎える。しよんぼりと肩を落としながら出てきた彼は私達がいるのを見るやいなや、ぱあつと顔を明るくする。壁に寄りかかっていた優美子も立ち直し、大岡君達は彼に歩み寄っていった。先程の出来事を早速話題に、いつものように会話を楽しむ。

「お、やっと終わったね。結構絞られた？」

「今後も腐抜けてたらヒキガヤ君？みたいな徹甲弾だつて……。やべーわ。テッコウダンてなにかさっぱわかんないけど、なんか怖いわ〜」

正しくは腑抜けね。腐、抜けだと脱オタした女の子みたいに聞こえるから気を付けてね。ていうか、テッコウダンも気になるけど、なんで比企谷君の名前がなんか疑問形なのか気がなった。私は半ば“あだ名”的な意味で呼んでるけど、もしかして戸部っちはガチなのかな。

「さっきはマジビビったわwマジなんでも声掛けても起きないんだもんなw」

「いんや〜、居残りとかになんなくて良かったわ〜。今放課後残る時間無いつてかさ〜。最近寝ても寝ても眠いつてかさ〜。午後の授業中の居眠りつて、マジ寝るつていうか気を失うつてレベルじゃね？ 気合でなんとかなるモンじゃないわ〜、マジで」

「それな」「それマジだわ」「わかる」

珍しく皆が戸部っちの発言に全賛成。まあ、黙ってるけど私も概ね同意。寝るもんか、つて気合を入れてるのに、気が付いたらガクツてなって、自覚無く数分記憶が無くなっていてる時があるよね。サボっているわけじゃ無いんです！ 精一杯頑張つて、頑

張った結果がこれなんです。

「ん、てかき。なんかあったん？ 待っててくれたんは嬉しいんだけど、皆でつてのは珍しくね？ いつもは部活一緒に隼人くん位つてか」

「ああ、それがさ。今日も顧問の風邪長引いててサッカー部休みじゃんか。だからさ、皆でこれからラウンドワンいかな？ って事になってさ。行くだろ？ 隼人君もOKらしいし。今日は一色の手伝いも無いんだろ？ 今から隼人君と合流しに向かうから行こうぜ」

「あ………」

いつもの遊びのお誘い。と、あるも戸部っち本人が誘われる事は実は珍しい。何故なら隼人君に声をかけた時点で、戸部っちが来る事はほぼ決まっているからだ。優美子もそれを知っているから、わざわざ本人に了解を取らない。取らなくてもいつも一緒に遊びに行っている。

……決して隼人君のおまけ扱いという訳じゃない、と思うよ！

さて、いつもの流れで放課後の動きが決まった。数日前の皆で遊ぶチャンスはうやむやになってたし、その分楽しもうと皆がボーリングをやるうとか賭けで勝負とかで盛り上がり始める。私もそんな彼らに合わせ、廊下を歩み始めた。

が、なんと今回、いつも異常に付き合いの良い戸部つちからまさかの答えが返ってきた。

「わ、わり。今日は無理だわ〜!」

妙にテンションを上げて、大げさな動きをさらに大げさにおどけさせて彼が断りの言葉をお口にすする。その行動に「え?」と皆が立ち止まった。

もはや皆でラウンドワンに行くことが決まりかけていて、みんなが戸部つちに背を向けて歩を進めていた。まさか部活も一色ちゃんの手伝いも無しに断られるとは思っていなかったからだ。

部活で疲れていたって、テスト前だって、彼は皆と遊ぶのを断らない。なんなら彼が一番そういうイベントを提案してるまでである。

夏休みだから海に、年明けたから初詣に、平日だからゲーセンに。理由のある無しに

彼はイベントを計画して皆の輪の中にいる。ソレ位普段の戸部っちの友達優先度は高い。

「マジかよ？ お前が来ないとかレア過ぎね？」

「なんか用でもあんの？」

前は聞かなくても付いてきたのに、と優美子すらも“まあ戸部は別にいいけど”とネタフリをする事無く、つい素の態度で疑問を口にした。

「用事ってか、ちよつとやらなきやいけない事があるってかさ。誘っててたのにごめん、俺いなくて寂しいと思うけど、許して！」

「いや戸部相手に寂しいとかないし。それに、許すも何も強制とかじゃないから。ただ、ちよつとアンタが断るとか珍しいから面食らっただけで……」

手を合わせて頭を下げる彼の言葉に少し戸惑いながら答える優美子。

その言葉を受けて、彼はホツとした顔で頭を上げる。

「いや、待ってて貰ったのに、なんか申し訳ないわ！ 今度、埋め合わせすつから！  
んじゃ、ラウワン楽しんで来て！」

言つて彼は、元気に敬礼すると走り去つていく。まるで誰かと待ち合わせをしているかのように急ぎながら。その彼の様子を私たちはポカーンとした顔でしばし見つめる。走り去る彼の背中が、どこか、何か頑張っているような力強さを感じさせられた。

「戸部が来ないとかびびるな」

彼と別れてから暫し。

廊下を歩いていると、妙に静かになった輪から大岡君からぼつりとつぶやかれる。その言葉の火種に、皆複雑な顔で応える。

「な。正直答えとか聞くまでもなく来ると思ってたってか」

「それな」

「あーしも、もうそれが当たり前だったってかさ。ちよつと拍子抜け」

「なーに、優美子ったら、寂しい感じ？」

「寂しいってか、戸部に断られるって響きがなんかもやつとするんだよね」

「あく、解るわw」

いなくなつてからも会話を廻してくれる彼にくすりと笑みが零れそうになる。その後彼の失敗談で会話が盛り上がっていった。

「てか、最近結衣も部活だとかで付き合い悪いじゃん？ 最近メンバー全員揃うのめっちゃ減ってきたってかさ」



結衣も近頃は私達のメンバーから離れている。

予め私達に“暫く部活が忙しくなるから離れるね”と告げられていた。

結衣の部活は依頼とかの関係で時々忙しくなる事がある。こんな事はいつもある事だったけど、やはりそれでも寂しい物は寂しい。

普段会話を廻してくれている二人が抜ける事がこんなに影響されるとは思わなかった。

「二人で抜けるとかき。もしかしてあの二人、隠れて付き合ってるんじゃない……」

「それはないっしょ」

不安そうな顔でまさかを口にする大岡君に優美子は“ハッ”と鼻で笑って返した。

二人が付き合う訳がない。

それは戸部つちがどうだから、とかでは無い。結衣には確かに思い人がいるからだ。彼女は今どこかの誰かに夢中で、そこに誰かが入る余地が無いだけ。

そして戸部つちには、戸部つちにも、

……。

私の胸が、何かいいよりの無い嫌な不安で締め付けられた。

最近行動がおかしい彼に、珍しく仲間で行動をしない彼に、勘が頭の中で警鐘を鳴らしている。

「あ、あのさ……」

皆で校庭に出ようと昇降口に差し掛かった頃、私はその不安を確かめるべきだと行動を開始した。

結局あの後、私は皆の所から離れた。

隼人君と合流し、皆で学校を出る前に私も皆に忘れ物を取つてくると断りを入れて。

何か、私は何か嫌な予感がして不安になり、それを確かめる為に私は奉仕部に向かう。

まだそうと決まった訳では無いけれど、もし私の不安が当たっているなら、彼らは

……。

奉仕部のある校舎の階層に差し掛かる階段を登り切る手前、聞き覚えのある声が耳に入り、私は歩みを止めて階段下に体を寄せた。

「絶対三井の方が格好良いっしょ。体力の限界を超えて3ポイント決めてガッツポーズ

した時なんてマジで泣けね？」

「いいや、リョータの方が格好いい。三井達に囲まれた時、絶対勝てないにも関わらずリーダーだけを倒してみせたんだぞ？ 決して自分を折らない上に、そんな状態から負けじゃない状態を取るとか半端ない。さらに言えば背が低いというバスケの圧倒的不利な状態すらも乗り越えて自分の武器で立ち向かうとか、俺が唯一下の名前で呼び合う位親しみを持つレベル」

上では二人がジャージに着替え、誰かを待ちながら話をしている。戸部つちの話をしている相手は予想通りで、その組み合わせに私は息を飲み、静かに気配を消していく。

「あく、確かにメンタル強いよね。フラれた女性がいる部活でいまだにあんなにも一途に何度もアピール出来る所とか……」

「それな。俺では絶対出来ない。もう部活止めて二度と体育館に行かないレベルだわ」  
「それを言ったら桜木だつてすごいっしょ。俺も結構フラれてるけどあんなに強く生きられないわ」

「……わかる。普通は歪む。目が腐る」

「……誰の話？」

教室では考えられない位饒舌な彼。「それな」なんて絶対普段言わないであろう彼から奏でられる言葉。だが、姿を見なくても、声を聴きなれて無い相手でも誰だか解る。

ヒキタ二君だ。

戸部つちとヒキタ二君。

片やのウエイウエイ系スポーツ男子に、片やダウン系捻くれ総受けツンデレ男子だよ？ 完全に水と油。なのにそんな二人が交わるとしたら、もうアレしかない。

ごくりと息を飲んで私は寄りかかった壁からずると座り込んだ。

「……………ていうか戸部、お前に注意しておかないといけない事がある」

「ん？ 何々？」

彼は一呼吸置いて、そして囁くように言葉を紡いでいった。

「俺達の事は、皆には内緒にしろ。一緒にいる所を見られるのは色々まずい…………」ワウオ  
「解ってるって！ 前にも言われたけど、内緒にするから！」あくん

.....。

「お前は色々軽いから不安なんだよな。お前ほど大丈夫が大丈夫に聞こえない奴はいない。休み時間妙に絡んでくるし」

「いや、こんなに一緒に色々乗り越えていると親近感とか、一体感？ 半端なくてさ。だって今俺ら一心同体な訳じゃん？」ウホツ。

.....。

.....。

.....なんの話!!?

え!?! あれ、これもしかして、

もしかしなくても間違いない!。

正直私の予想が大きく外れていたけど、全くこうなるとは思っていなかったけど、これは間違いなくアレじゃなからうか?

「くっそ、マジで昨日は下半身ばかり攻められたから痛みがやべえ。歩くのもキツイ

「ただけど」

「それは俺も一緒っしょ。全身くまなく痛いわ」

トベ×ハチの誕生だあああああ!!!

ま、間違いない!

いつの間にかは解らないけど、予想とは大きく外れたけど! いつの間にか私のハヤ×ハチの鉄板カプにトベ×ハチ要素が入ってきたようだ。なんて事なの!?! トベカケルって何とかけてんのさ!

でもあの二人だよ?

もう一度言うけど完全に水と油じゃん。片やのウェイウェイ系スポーツ男子に、片やダウナー系捻くれ総受けツンデレ男子だよ? どんなカプだよ。そんなカプ知らない以前に、性格が正反対過ぎて仲良くなれる要素が見付からない!

「……でもあんなに激しく攻められるとは思わなかったな。マジでドSなのかと思っ  
た」



「マジ体中痛いわ。戸塚もなんだかんだ言つて容赦無いしね」

戸塚君も!?

私の知らない間に、なんだか凄い事になっている！ トベ×トツ×ヒキタニ!? 三人カプとか邪道だよ！ でもトツカ君が入るとなんか絵面的に自然になる不自然！

ちよつと待つて、え？ これ私の妄想じゃないよね。本当に現実の二人の会話なんだよね!? え？ 二次元の中だけじゃないのこういうの！

「……そろそろ着替えただろうから、行くか」

「お、んじゃ行きますか」

私の理解が追いつくよりも先に彼らの声がどんどん遠くなる。

その声を追いかける事無く私は顔を手で覆い階段に座り込んでしまった。なんて、なんて事なんだ……。

こんな、

こんな話をしているのを盗み聞きしてしまった私としては、二人の隠された関係に腐  
心感を抱いてしまうのも仕方ない事じゃない（白目）

「ど、どういう事だよ戸部っちく……」

私は当初の不安とは大きく違った衝撃的な出来事に、再び頭を抱えて座り込んでし  
まった。

## 外伝 2—4 そして私は

「全身痛え」

奉仕部の部室。

放課後の夕闇に包まれた教室で、俺比企谷八幡は連日の過酷なトレーニングでポロポロになった体を極力刺激しないように腰を抑えながら何時もの場所に着席する。そのポロポロな動き、様子を由比ヶ浜が心配そうに顔を覗き込み、雪ノ下が呆れたように息を漏らす。

「お疲れヒツキー。体、大丈夫？」

「あの程度の特訓で筋肉痛だなんて、だらしが無いわね」

この筋肉痛の原因である雪ノ下のこの冷たい態度。

確かに俺はたまに移動教室で書類を運んだりした位の負荷で腕が筋肉痛になっちゃう系男子だが、あんなトレーニングさせられたら誰だって全身の筋繊維がズタズタにだってなる。

だって最近「今日は今までで一番キツかった」と毎日思ってるもん。

戸部みたいに大袈裟にリアクションして言ってるんじゃないかって、マジで毎日更新してるんだもん俺の肉体的な一番キツかった日。

何故こんなにも体を酷使しなくてはならないのか、過酷なトレーニングをしなくてはならないのか、その話は先週、奴がこの部室に訪れる日に遡る。

俺達は、奴、戸部翔の二度目の依頼により、今度行われる球技大会の望まぬ練習をする事になった。そしてさらに困った事にトレーニングメニューを組むのは鬼監督雪ノ下。

その鬼っぷりはまるで甲子園を目指す高校球児さながらで、とても容赦が無い。期間が短いから一日の覚える事、やる事が濃縮されすぎていて、まるで飲み込めない果肉百

パーセントジューズである。それジューズじゃない、ただのみかんだわ。そしてその名監督の采配で各選手のポジションはもう決まっていた。

まず1番、ポイントガード 比企谷。

ポイントガードはいわゆるチームの戦略を示す役で、司令塔。ドリブル等でボールを運んだりチーム全体のアシストをしてチームの良い所を引き立たせる潤滑油。

この俺を人間関係の中心に置くとかぼっち舐めてんの？ と監督に開幕疑問を持ち掛けたが理由を聞けばまあ納得、シユートが入らずフィジカルにも恵まれた訳でも無い、辛うじてドリブルだけは出来る一芸特化ならぬ、一芸だけ人並なのだから仕方なくの消去法。

散々な言われようかもしれないが、人生の選択を基本消去法で採用する俺には不満は出なかった。ぼっちすらちゃんと使おうとするなんて、なんてエコと感動するまである。さらに“小賢しいから現場での策略にも向いてるでしょう？”とフォロワーも入れてくれるなんて優しい子。でもそこは“頭が回る”、じゃあかんかったの？

次に2番 シユータイングガード 戸塚。ガードと付いてるけど主に3P等の

シユートでとにかく得点を稼ぐのが求められる役割で、特に精神力が大きく問われるこのポジション。

運動部だけに運動慣れしていて、チームでまともにシユートが入る稀有な存在だったのでほぼ確定でこのポジ。密かにメンタルが強い所も好印象。雪ノ下の特訓に唯一不満を言わない位だからもう鋼。むしろ艦娘。

雪ノ下曰く、理由付けが“体の線が細く体格が無いから最適”と最後に着けなければ戸塚も最高に士気が高まった事だろう。でも寂しそうに笑う戸塚も可愛いよ。

そして3番スマールフォワード 戸部。

スマールフォワードはドリブルでゴール近くに切り込んでのシユートや、外れたシユートを取ったりすることが主な仕事のバスケのオールラウンダー。

運動能力自体は高く、このポジションが恐らく戸部の良さを引き立てられるポジションであろう事というのも選ばれた一因でもあるが、

“初心者バスケ大会”であればまず間違い無く目立つポジションである事が選ばれた一番の理由。

初心者にとって簡単にカッコいいと思わせる事が出来るのはリバウンドやシユート、

Dank というた派手な行動だ。勝つ負ける関係なくコート上で激しく攻撃防御に参加してれば、それは嫌でも目に入るだろう。残念ながらディフェンスに定評があつたつて、初心者じゃそんなの解らん。悪いな池上。

まあ最初に雪ノ下監督に戸部にPGやSGのような技術的な物や知的な物を要求する方が無理だとすっぱり切られた訳だが。雪ノ下、出来るならそういうネガティブな理由付けは本人には隠しとけ。

5番 センターは城山。ゴール下の守護神、バスケの守備では要。

練習にも参加していないが、部活が何かで体格がどうかでもう決まってるポジションだろ。さらに顔もゴリとか魚住とかポールっぽいし。

これで選手の解説の終わりだ。4番が飛んだ？ 決まってるだろ消去法だ。

そんなでマネージャー・由比ヶ浜、エトセトラ・一色で、これでチームヒキタニの全貌だ。

最後のはポジションじゃないが、スラダンのエトセトラだって花道のシュートの完成に貢献してただろ？ バスケのエトセトラは重要な役目なんだぜ！

そんな訳でアイツの依頼からこんな珍妙なメンバーでバスケットに臨む事になった。

そのせいで文化部で奉仕部なのにバスケットの猛特訓の毎日。文化部なのになんで休日練習だの筋肉痛だの起こってんだ。普通無えだろそんな事。

残業無し！と詠ってた仕事場に就職したら、何故かタイムカード押した後も書類整理やつてるような気分だ。

まあその前に奉仕部ってのが既に普通無いね。将来の定番話題で“高校の時何部だった？”が出たら間違ひなく困っちゃう！まあ誰かに話しかけられた時点で困っちゃうのが俺だけどね！

そして“奉仕部です”って答えられて困るのは相手も同じだろう。だがそこは俺だ。きつと何部って答えても相手も自分も気まずい事になるのは変わらないから安心だね。

今から社会に出た時の苦労を考えてしまい思わずため息が零れでる。

そんな俺の様子を見て由比ヶ浜が鞆から可愛い、というか

“か〜わ〜い〜い〜”

感じのポーチを取り出し、中から絆創膏やらテーピングやらを覗かせながらシップを差し出してきた。



「辛そうな顔だね、筋肉痛ほんと大丈夫？ コレ、ウチにあつた奴だけど、良かったら……」

「いや、いい。ただでさえ筋肉痛で動きがぎこちないのに、その上シップなんて貼つてたらさらに目立つ」

そのポーチには簡単な化粧品の他に絆創膏やら入れた医薬袋まで常備と、本格的にマネージャーっぽくなってきた由比ヶ浜の心配に首を振つて応えた。

「そうかな。私はちよつと気にしすぎだと思ふけど……。多分さ、ヒツキーが何やつてたつて誰も気にしないよ？」

「それ、俺がどうなろうとクラスには関係無い、つて意味に聞こえるんだけど」

「ち、違うし！ 筋肉痛とかシップとか位で姫菜達に私達の依頼の事気付かれないよつて意味だから！」

そつかり、良かった。軽くアイキャンフライするかと思う位ポツチ差別かと思つたわ。ポツチつて一人でいたがる癖に一人に“される”事が苦手だから気をつけろよ

?

俺くらいレベルになると、俺のステルス能力も成長したもんだ」と自身のパワーアップに喜ぶ位になるけどさ。

「戸部つちだつてこの特訓の事誰にも言つて無いし、優美子達と離れる時もちゃんと別々に離れてるから絶対にバレて無いと思うしさ」

「言つて無くたつて、察する奴はいるだろ。特に葉山や海老名辺りはかなり敏感だからな。下手したらもう察してる可能性だつてある」

あの二人の人間観察の習慣は相当な物だ。なんなら三浦とかだつて、トップカーズトにいる以上空気を読む事に長けているのだろう。

「下手に知られて」じゃ俺達もどつかで練習しとく？ 暇だし！」みたいな事にでもなつたら面倒だろ。こちらの情報は極力隠しておきたいんだ」

「そうね。どこで当たるかは解らないけど、勝ち進むなら如何に本当の自分の戦力を悟らせず、如何に相手の事を知っているかで戦局は大きく変わるもの。ただでさえ心許ない戦力なのだから気を付けるに越した事は無いでしょうね」

さらに言えば今回の依頼は戸部のカツコいい所を見せつけるという依頼だ。

成功率はさておき、その依頼達成に必要なのは普段の戸部のイメージと違う、いわゆるギャップを見せる事に意味がある。なんでアイツがこんな必死に？ 似合わない。位が丁度いい。

相手が海老名でさらに成功が見えない依頼だからこそ打てる手は打っておきたい。アイツらには細心の注意をしておくべきだろう。

そんな風に由比ヶ浜を二人で納得させていると、奉仕部のパソコンから“ピコーン”と初期設定音のままの着信が部室に鳴り響く。

俺は思わず顔を歪めながらパソコンを見やった。

何、ただでさえ今クツソ面倒臭い依頼の最中なのに、さらに依頼のメールなの？

本当なんなんだよ、忙しくもねえ時は全然仕事来ないのに、忙しい時に限ってどんな仕事か積み重なる現象。

普段はダブルタスクとかしないで一つ一つゆっくりでいいから確実にやれ、とか言う癖にこうなって来ると“いつまでソレやってんだ”、自分の仕事だけじゃなく周りの

フオローしろ、とか言う事コロコロ変えやつ本当なんなんだよ……。

俺の良く解らない心の叫びを他所に、雪ノ下は眉一つ動かさずメールの確認の為。パソコンの前に移動する。由比ヶ浜がその後が続いていき横から画面を覗き込んだ。

「ひ、ヒッキー……」

ため息を付きながらやさぐれる俺に、少し青ざめた顔で由比ヶ浜が慌てた動作で俺を見やる。その所作でそのメールが面倒臭い物である事を俺は察した。

さて、材木座のラノベか一色のパシリか。どっちにしても相応に面倒臭い事に違いは無い。なんなら材木座のパシリでも一色のラノベでも面倒臭い。いや、一色のラノベなら逆に読んで見たいな寧ろ。

由比ヶ浜が俺と画面の間から体をどかし、俺にメールを見ると促した。開けられた視線の先に目を向けると、俺の想定した物とはまた違った厄介な物である事を知る。

差出人 “「（「、〇、）」”

「これ、前もあつたけど何なのかしら……。生き物なの？」

……概ね正解雪ノ下。それは好きな物を追ひ求める女の子達の姿だ。ただ、少し腐つてただけだ。遅すぎたんだ。

珍妙な物を見るような目で画面を見付ける雪ノ下を他所に、俺と由比ヶ浜は差出人が誰なのかを察し、思わず顔を歪める。

思っていたより、早く、海老名姫菜は察してしまった。

思わず俺は前に体重を乗せる形に座り直し、膝上で手を組む。

どうやら、物事は最悪の事態に進んでしまったようだ。

俺の海老名達にこの特訓を知られまいとしていた理由に、実はもう一つある。それは、再び修学旅行の時のように海老名から依頼という形で釘を打たれてしまう危険性だ。

俺の脳裏に、あの時の思い出が突然の頭痛のように一瞬蘇る。それは由比ヶ浜も同じようで、困惑した表情で俺を見やっっている。

俺は、大きく一息つくと由比ヶ浜に大丈夫だと手で落ち着くよう促した。

「なにせよ、メールの内容確認しない事には何も解らん。とりあえず見てみるか」

そして雪ノ下がパソコンの画面に広がった。「(´・o・´)」さんからのメールのフォルダにカーソルを合わせ、クリックする。ごくり、と誰が発したか喉が鳴った。

へ最近、気になる私一押しのH×Hに、Kくんが入り込んで来たようで困惑しています

.....ん？

へいやね？ 最初からある意味H×Hの間に“かける”が入ってはいるんだけどね？  
そのカケルがハチのほうに方程式を組んでいっちゃったというか、もう何をかけてんだ  
よっていうかね？ K×Hってキングダムハーツかよっていうかね？

由比ヶ浜があちやくと顔を隠し、俺は目を覆い、雪ノ下に至っては最早パソコンから  
離れ文庫本を取り出している。

へなんていうか、まあハチの方の総受けっぷりは群を抜いているというのは仕方ないに  
しても、ハヤの方が寂しそうに二人を見つめているという悲しい事実を目を向けて欲し  
いっていうかね？

.....おい、おい待て由比ヶ浜お前まで離れるな。この文章の前に俺一人にしないでく  
れ。

それでもって雪ノ下、我関せずを貫こうにしてはこのメールを一番に開いたのはお前なんだからちゃんと最後まで責任とれよ。

二人に目で訴えかけパソコンに引き戻す。

へこうなったら責任取って二人からの気持ちを受け取って、“気持ちを受け取って”受けきるしかないのでしょうか？ この辺り、何処までイってるのかk w s kお願い。そして寂しそうなハヤに少しの愛を、ヒキタニ君へ

「ご指名よヒキタニ君」「ご指名だねヒツキー……タニ君」

「お前ら今容赦無く俺を切り捨てたな」

由比ヶ浜に至っては、途中までいつも通り呼びかけて、それを無理やり修正してまで俺に擦り付けやがって。お前の友達だろ。早くなんとかしろ。

「だって仕方ないでしょう。こんなナイーブな問題、本人達にしか解らないもの」「いや、流石に、こればかりはね……」



「いや俺にもどうしようも無いだろ。これはもうアレだから。『そう思うんならそんなんだろ？』 お前ん中ではな。『みたいな案件だからね？』」

「つまり彼女が思っているなら、彼女の中ではそうという事なのねホモ谷君」  
「マジ止めろ」

俺にしては珍しくかなりマジになって否定する。そんなあだ名、流石に壮絶な俺の中学小学時代でも味わった事ねえよ。ただでさえキモイとか言われてるのに、そんな噂までたったらマジでもう汚物扱いされるだろうが、一部を除く。もう本当ニツチな一部を除く。中の人的な意味では小町には受け入れられそうなのは救いだけどさ。

「いや、でもさ。正直、私の目から見ても最近ヒツキーと戸部っち、仲良いつてかさ。市の体育館に行くまでとか休憩中とか、ずっと喋ってるじゃん？」

「戸部がな？」

会話という物は相手とのやり取りで初めて成り立つ。そういう意味では確かに会話では無く喋っているという表現は間違っていないが、どうもそういう言い方だとまるでお互いが喋りまくっているようで語弊がある。

もうマジで戸部の言葉だけが續いてる。あれが会話だというのなら、俺は譲っても“あゝ”しか返してない。全然返球してないのにボールを投げ込まれる感じ。体験入部させられた時の野球部の玉拾いと何も変わらない。

「……でもヒツキー、結構楽しそうじゃん。たまに笑ってるし。ニヤける、とかじゃなく普通に。私達相手であんな顔しないのにさ」

おいおい、海老名の影響受けてるんじゃないやねえの？ やっぱ何か悪い電波出た。

なんだよ、俺の笑顔を引き出しちゃうとか、なに戸部がヒロインなの？ 笑わない系キャラの笑顔引き出すとか完全に正ヒロインじゃねえか。いや、寧ろ俺がヒロインじゃねえか。やだゝ。

「彼の前だけは普段通りの笑顔とか、相談通りじゃないホモ君」

「せめて谷つけれ、原型トドメて無いだろうが。それに、俺が笑うのは単純にスラダンの話が面白いからであってだな。つまり俺が心を開いてるのは戸部にじゃなくてスラダンにだ」

「本当に貴方たちはこの依頼が始まってからいつもソレね……。貴方たちのその話は五

月蠅い位に耳に入るのだけれど、そんなに面白いものなの？かなり古い漫画なのでしよう」

「本当に良い物は何年たつたって良い物なんだ。宮沢賢治だって今読んでも面白いだろう？」

「それは、まあ、確かにそうだけれど……」

「スラダンを通せば、本来繋がり合う事の無い戸部とすら会話が弾むレベルの漫画だ。井上雄彦は漫画家の域を超えてるぞ？ もはや文学であり芸術だ。なんならアレ読めば俺と雪ノ下ですら会話が弾むレベル」

「そ、そう……なの……？」

「はいはい、話脱線しない！ 早く本題に戻らないと戸部っち来ちゃうよー」

珍しく雪ノ下が聞き姿勢だったのに、惜しくも止められてしまった。自分の好きな物を薦めると、つい話し過ぎてしまっていかな。最後は流石に雪ノ下も引いてたし。

じゃあ本題に戻るか。本題とはなんだったか？ 海老名のメールか。もう脱線しきって突つ走つた方が安全運転出来るんじゃないやねえかな。

「とにかく、何か返事しないとき。戸部っち来たら、もうこのメール開いてる訳にもいか

ないし、早く返しちゃうないと」

ふと時計を見れば、もう戸部の部活の時間が終わり、一色と共にこの教室に来る頃だった。なんだか一気に時間がキンクリした感覚に襲われる。

なんにせよ、こんなメールを一色にでも見られたらどう弄られるか解らんし、戸部とこのメールを見るとか悪夢でしか無い。そんな思いをしない為にも、俺はキーボードでさっさと返事を入力した。

差出人 無関係なH

本文 〈腐海（もり）にお帰り〉

放課後のグラウンド。

部活で忙しい隼人君と戸部っちを、今度は隣のクラスをも巻き込んだ遊びに誘うべく、先にそれぞれ役目を終えた優美子達と待っている私海老名姫菜。グラウンド脇のベンチに座りスマホの画面に食い付くように返事を待っていた。

先ほど渦中の彼、H×Hの片割れの受けの方に審議の程を送ったんだけど、返事が来ない。もう1分経ったのに返事が来ないよおー。とまるで愛が重い女の子のような気持で彼の返事を待つ私。男の子のメールをこんなに待ちわびたのって初めてかもっ☆  
まるで乙女みたいだね！ ただ少し、腐臭が漂うのが難点なんだけども。

いやもう本当どうしたんだらうね。

文化祭の後はH君が彼をやけに意識していて、とんだH2があつたもんだとヤキモキしたものだけど、あの頃からこんな事誰が予想した事だろうか。比呂と英雄の熱い青春ラブロマンスだと思っていたら、ひかりが恋愛相手だと見せかけて敦が相手だったみた

いな衝撃。知らない方すみません、H2、あれも名作ですよ！ 姫菜一押し！

もうサッカー部のロンドでぶつかり合う彼らの汗が、もう清い心で見られない。そういうプレイにしか見えなかったよね。

私が興奮覚まらぬままに、部活の片づけを終えた葉山君が此方に手を軽く振りながら合流する。

「待たせてゴメン。この前臨時で休んだ分とかで、少し長引いた」

爽やかに現れた彼に、優美子はすぐに手鏡を閉じて少し嬉しそうに手を振り返した。周りで野球部の残したボールでじゃれ合っていた大和君と大岡君も笑顔でこちらに走って来る。

「おお隼人君来たか！ 折角ボーリング予約取ってんのに、こんな時に限ってタイミン  
グ悪いんだもんなく！」

「あゝし等にだって予定位あんのに、先生の都合で長引くとかマジ引くんだけど」

予定ではもっと早くに学校を出てるはずだったのに、うまくいなくて優美子が少し

不満げ。サッカーの延長とかでアニメが延期されたりする事も多いから、私もその気持ち解るなあ。

「んで、今日は戸部、来んの？」

優美子は早速、まだそろっていない何時ものメンバーの名前を口にする。妄想世界を広げながらメールを待つ私を他所に、優美子はこれからの予定に戸部つちが参加するのかどうかの心配を口にした。

前だったら、なんの心配もなく着いてきたであろう彼。だけど、今は多分、一番来るかどうかわからないであろう人物。私はスマホから一切目を離さないで四人の会話に耳を傾ける。

「いや、聞いて無いな。今いろは達マネージャーの手伝いしてるから、来たかどうか聞いてみようか」

隼人君は部室の小屋のある方に目を向けるので一緒にその方向に目線を送ると、遠くからでも何という言葉を発しているか解るほど大袈裟なりアクションをしながらいろ

はちゃんのお手伝いをしているのが見えた。いろはちゃんが腕時計を刺して、何やら急かしているように見える。

「いや、マジ今日来るのかな。最近マジで付き合い悪いじゃん？ 調子狂うってかさ」

「まあね。別に強制じゃないし、戸部なんて居なくたって隼人居ればいいけどさ。最近何やってるのかは気になるよね」

大岡君に合わせて辛辣な言葉を言いながらも、優美子は不満げにロールをくるくる回し答える。しかし確かに彼は最近非常に付き合いが悪い。いままでの彼の行動とは大きく違い過ぎて皆は違和感があるんだ。

しかし私は彼が最近何をやってるかを知っている。

「俺見たわ。放課後、裏門の方に国際教養科の雪ノ下さんと一緒に歩いてたな。しかも



なんか楽しそうに」

「え、何その組み合わせ。しかも裏門で密会とか、なんか怪しくね？　もしかして最近付き合い悪いのって、付き合ってたとか……」

「それは無いだろ」

大岡君の勘違いに、隼人君が少し強めの声で反論する。

……そう、隼人君も知っているのかもしれないね。真実を。

私は知っている。

「でも楽しそうって、何話してたんだろ？」

「話してたってか、叱ってた？　雪ノ下さんが戸部にズバズバ説教してたってか」

「いつもの戸部じゃん」

「マジかよ戸部、雪ノ下さんにまで怒られてんのかよwww……でも少し羨ましいな」

「は？」「え？」

私は見たんだ。戸部たちが陰で何をやっているのか。

それは、密会、である。

戸部つちは、私たちの目を盗んで、いいや隼人君の目を盗んで密会しているのだと私は知っている。熱烈な、禁断の感じの。だって、あんな、

“俺達の事は内密にしろ”

“俺ら、一身体な訳じゃん？”

……あんな熱烈な会話を聞いちゃった訳だから!!!

「薔薇色パラダイスッ！」

「ひっ!？」

一人で友情（血）を鼻から噴出し悲鳴を上げる私に優美子が一步下がる。

「ちよつと、マジびびるんだけど！　どうしたの姫菜、最近のアンタ、いつもの倍はおかしこよっ！」

「あ、ごめん。ちよつと私の中の心の声を、破裂する前に小出しにしちゃった」

ゴメンね優美子。

でもそれ位あの件が衝撃的過ぎて、正直今隼人君の顔見ただけで暴走するんだ。だって、今までは勝手に妄想してカップリングして“むふむふ”してただけだったのに、それがマジ物だったなんて知ったら、ちよつと流星に正気ではいられない。

さらにいろはちゃんの手伝いを終えた彼までもが合流してさらに私の意識は混沌へと沈んでいく。

「隼人君、撤収終わった。ってアレ？ 皆お揃いじゃん」

「おお戸部、お疲れ。お前またマネージャー達にコキ使われてんのかよw」

「いんや、ちよつと手伝ってただけよ。ボール片して、白線消して、洗濯干して戸締りしてきた」

「……それ仕事全部やってね？」

隼人君目当てのマネが、いろはちゃん以外にも沢山いるはずなのにこの扱いである。なんでケロつとしていいのか不思議な位なんだけど。という訳で、ようやく目的の人物

二人が揃った訳なんだけど、私の中で一人の相手を奪い合っている二人が揃った訳なんだけど、何時も通りのじゃれ合いをする彼らに優美子は単刀直入に戸部つちに今日の趣旨を切り込んだ。

「んでさ。今日この後あゝし等と隣のクラスの奴等と遊びに行くんだけど、戸部来れんの？」

今日も休み時間はもれなく殆ど寝てるか、どこかに離れているかで言いそびれていた今日の集まりを告げる。優美子はとうとう今回は戸部つち本人に直接尋ねた。いつもなら呼ばずとも来た彼が、揃っていたメンバーが今日は来るのかを。

「あゝ、いやゝ、今日はさゝ！アレがコレでこうっていうかね？」

「アレって何？最近なんかやってんの？」

優美子の言葉は怒っている訳では無いのに、どこか厳しめに聞こえる。その声音に、優美子の浮かばない表情に彼は笑顔を引きつらせた。

「何かやってるっていうか、なんての? いや、ちよつとやるべきってかさ」

困ったように襟足を引つ張りながら笑う彼の目が、一瞬、一瞬だが私を見た気がした。いや、違うね。私の前の隼人君に視線を送ったのだろうね。ライバルを見たのか、それとも「相手」として見たのかが一番気になる所だよね。

そして空気が良くない事を察した隼人君が間に入ろうとするより先に、彼の後ろから猫撫で声が聞こえてきた。

「戸部せんぱい、ちよつといつまで待たせるんですかあ? 早く行きましようよ」

亜麻色のセミロングと、くりつとした大きな瞳をした可愛い後輩、いろはちゃんが戸部つちの裾をちよいちよいと引つ張り、頬を膨らませている。

「は? なにあんた……」

「すみません三浦せんぱあ。ちよつと最近、“球技大会の準備”とかで忙しいんですよ。そのお手伝いで戸部先輩に助けて貰って。ほら、私生徒会じゃないですか」

「球技大会か。成程、そろそろ近いもんな。それじゃ生徒会も忙しいな」  
「解つてくれますか？ 流石は葉山先輩！」

隼人君のフォローに手を組んで頬に当て、喜んで見せるいろはちゃんに男子達の頬が少し紅潮する相変わらずあざとい動きを“自然”に行う事に“洗練”されている

「なんだ、そんな理由があるならハッキリ言やいいじゃん。最近、妙に他所他所しくて付き合い悪いから、さ。……イラついたじゃん」

「いや、俺も今初めて聞いた……痛え！」ドスッ

「後輩にコキ使われてるなんて知られるの恥ずかしいですもんね？ いや、コキ使ってる訳じゃなくって手伝って貰ってるだけなんですけどね？ そんな訳でえ、暫く戸部先輩借りていきますね？」

そういつて可愛く掴んでいた彼の裾を思いつきり引つ張り、戸部たちは“おつと！”とバランスを崩しながらいろはちゃんに追従した。

「そ、そんな訳で、悪い優美子！ 終わったらずっと一緒な！」

「キモイからやめろし」

そういつて彼は引きずられながら私達から離れていく。

「……なんだよ。最近付き合い悪いって思ったら、そういう訳かよ〜！」

ホツとしたように大岡君が息を付いた。何が不安だったのか、ちよつと邪まな考えが頭をよぎります。

「戸部本当いろはに良く使われてるよな。色々二人で買い出しとか手伝わされてるの見るし」

「……もしかして、付き合ってるのかな？」

「ないない！」

そういつて再び戸部つちの恋愛事情が気になって仕方ない大岡君にどうしても邪心で包まれた。この関係、どこまで広がるんだよ！ って位。

大岡君が単純に戸部つちにだけは先を越されたく無いっていう小さい考えを持って

いると思うより、やっぱり大岡君が純粹に戸部つちにラブの方が綺麗な捉え方をしてるよね！

二人で笑い合いながら校門へ向かい歩みさる二人、  
そして戸部つちの様子を見つめる隼人君に優美子。その真ん中で、私は立ち止まった。

そうして今回もまた彼が離れて行って、いつものメンバーは揃わなかった。

戸部つちも、結衣もないこのメンバーは、二人の賑やか担当がない事でどこか寂しげで、何かがぼつかりと足りなくなってしまうていた。

私の幸せの時間は、大好きな皆と過ごす青春は、いつか終わってしまう物で、  
もう二年生も終盤で、来年には卒業で、クラスも変わって、結衣が最近私達と過ごす時間が減っていて、

終わりが、近づいているように感じて……。



………終わって。

「戸部っちー！」

どうあってもこれから少しずつ、変わっていく皆との、今の幸せの時間の終わりが垣間見えて、そんな想像が頭をよぎった瞬間には私はいろはちゃんに引きずられていく彼を呼び止めていた。

予想外に出た言葉が私が出す普段の音量と大きく違い、驚きの表情で二人は振り返っていた。優美子も隼人君も立ち止まり、目を丸くしている。

「……ど、どしたん？」

いろはちゃんに引つ張られていた彼がきよんとして私の言葉をただ待っている。つい発してしまっただけの呼び声、その言葉に一番驚いているのは私自身だった。

「あ、えっと、さ……」

思わず呼び止めてしまったけど、どうする？

なにか、堪らなく寂しくなまって呼び止めてしまったけど、なら“寂しい”って伝える？

それは、駄目だろう。どう考えても期待させてしまう。

私はまだ彼と一緒にいたくて、でも、それは“友達”としてであって、

だから彼の気持ちは受け入れられないけれど、でもまだ一緒に皆で遊んでいたくっ

て、自分の事しか考えない自分に吐き気がして。

「と、戸部つちき。忙しいと思うんだけど、最近一緒にいられなくって、ちよつと寂しいって感じてるんだよね」

何を言うか、考えもしてないのに言葉が勝手に出てくる。止めようとかそういう意識も無くただ口が動いて吐き捨てた。

「隼人君が」

消えてしまいたい。

いつも通りの言葉が出たのに何故か私はそう思った。

私の言葉に“えっ”と隼人君の方を見つめる彼。隼人君は黙って、私の言葉を聞いていた。私の口は全然止まらず、何時も通りの何食わぬ顔で腐の台本を読み続ける。

「もう最近戸部つちいないから、隼人君滅茶苦茶寂しそうなんだよ！　もう乙女の顔でつていうかさ！　もう見てられない位センチメンタルな愛が垣間見えてる位なんだよね〜！　だからあんまり正妻を待たせちゃダメだぞ！　って言いたくつてさ、うん！」

自分でもびつくりする位いつもの私だ。

完全にいつもの大好きな物を話す時の自分だった。

「え、マジ？ 隼人君が俺いなくて寂しがるとか、イメージ付かないんだけど！」  
「もうアンニユイだよ！超アンニユイ！ そうだよ隼人君！」

そしていつも通り、苦笑いで誤魔化す隼人君を求めて、そしていつも通りひっぱたいてくれる優美子を求めて隼人君に話を振った。もう、見せかけだけはいつも通りの風景なのに、私は堪らなく胸が痛くて、苦しかった。

しかし、帰ってきた返事は、今私が求めている何時もの言葉では無い。

「ああ、寂しいな」

隼人君は普通に、はにかんだ笑顔でそう答える。

「なんだかんだ言っても、やっぱり戸部がいると楽しいし、一緒に居て心が安らぐ。だから、お前の用事が終わったらさ、また皆でカラオケにでも行こう」

「あくしも、アンタいなければいいんでないけど、いないよりいた方がいいし、それ

にやっぱつままないし。だからさっさと終わらせてきなよ」

優美子も、いつもと変わらず普通の態度で“寂しい”を伝える。

「マジか、いやぶつちやけ俺も超寂しいわ！　ほんと終わったら、マジでなんにでも付き合うから！」

言つて彼は二人に満面の笑みを浮かべた。そして飛びついて喜びを表現する彼に隼人君は困った顔をしながらおいおいと後退る。その後優美子にまで飛びつこうとするが優美子は容赦なく顔面グーパーンチ。

そんないつものやり取りなのにどこかいつもより温かい、そんな彼らを私は景色の外から眺めていた。

「……いや、本当、全部終わったら、絶対皆の事誘つから！　絶対カラオケとか行くべ！

それじゃ、俺行くわ！」

「え、ちよ、引つ張らないでくださいよ戸部先輩！」

二人の言葉を受け、元気に二人にサムズアップすると、彼はさらに元気になって一色ちゃんを引つ張りながら走り出す。何度も振り返りながら手を振って。

なんの事は無い。ただの言葉。ただの素直な気持ち。ただの本当の気持ち。それすらも、私は口にする事が出来なくなってしまったのだ。

「おい、行かねえの〜!」

彼と別れたからそのまま出ると思い先に校門へ向かっていた大岡君達が遠くで呼び声を上げている。その二人に「今行く」と隼人君が返し、そして私の肩を軽く叩き歩き出した。

……いや、まいったな。

あんなアツアツな言葉を向けちゃうなんて、これはこの三角関係の激化を辿る一方だね!

これは下手な二次や同人よりも目が離せない展開だよ!

ぐふふ、とにやけ、そしていつも通りの笑顔を優美子に向けて、私は歩き出した。

「参つたなく、これは暫く餌に困らなそうだぞ。毎日の学校に、楽しみが増えたねつ。男子が二人、または三人、仲良くそこにいればそれだけで幸せになれるのが腐女子の強みだね」

「姫菜」

私の手を引き呼び止める優美子。大丈夫、私だつて腐女子としての幸せとは別に、優美子と結衣がいる事も私の幸せだよつて伝えてあげなきゃ！ 優美子には、いつだつて本当の言葉を言える、大好きだなあ優美子！

「姫菜つてさ、たまに、その腐女子的発言で、相手も自分も誤魔化そうとするじゃん？」  
親愛を伝えようとする私に、

普段と変わらぬ笑顔で振り返る私に向けられたのは、とてつもなく寂しそうな顔。



「……まえの、旅行ん時はさ。あくし、何も知らないし、聞かなかったけどさ。無理に聞き出さないってだけで、いつでも本音とか、聞けるつもりだし。あくしはさ。姫菜の味方のつもりだから。……そんだけ」

不器用に、目を反らしながらも力強く訴えたその言葉を残し、優美子は隼人君達の所に歩き出す。

その言葉はまるで私を励ましている？ 慰めようとしている？ 何故？ 優美子の言葉の意図が理解できなかった。

私はいつも通りだ。いつも通りに振る舞っている。

腐っていて、優美子の友達で、進んではしゃいだりしないけど皆の中で笑っていて、いつも通りだ。いつも通りなのになんで優美子はある顔をしてしまったんだろうか。

……大好きな物で誤魔化す、か。

優美子の言葉を心の中でかみ砕く。そして、皆の背中がどんどん遠くなるのを見送ると、私の頭はどんどんクリアになっていった。

……そうだね。もう、止めよう。

私はため息をついて、そして肩を落とした。

最近付き合ひの悪くなつた彼。疲れ切つた様子。

結衣がタイミングをずらして同じく離れる理由。

その他様々な情報がソレだと告げているのに、私は無視をしてきた。見えないフリをしてきた。でも、それはもう見えないというにはあまりに視界の中にデカデカと映りこんでいて他の物が見えない位私の視界を奪っている。

だから、もう認めよう。

“ 奉仕部がまた、動いている ”

あの時の思い出がフラッシュバックする。

あの時私が壊しかけた大事な友達の居場所。

頼ってしまったばかりに傷付けた、大好きな友達の好きな人。

あの時の彼の、大切な友達の表情。

もう、認めよう。

彼らはあんな事になりながらも再びあの過去と向き合い、そしてやり直そうとしているんだ。あんな事になってなお彼は立ちあがったんだ。

自分の居場所を失いかけて、壊しかけて、それでもなんとか前に戻った彼は、再びまるで関係無いクラスメイトの為に立ち上がったのだ。

なんて、強いのだろうか。

だけど私はそれを望まない。

“今”が大事な。それをリスクヘッジしてまで他の未来を選ぶ理由なんて無い。さっきのやり取りで、言い放った言葉で、私の心はどこか冷えきってしまった。

もうあの時と同じ轍は踏まない。

奉仕部に行つて、結衣を巻きこまない。

隼人君に相談して、彼を、優美子を困らせない。

だったら、私が狙うべき急所は決まっている。

それは誰にでも公平で、繊細で、誰よりも優しい、あの男の子だ。

誰より痛みが解つて、そして誰も受け入れないけど拒絶しない、あの優しい男の子だ。

私は、冷めきつた頭を、固まった表情を再び笑顔に変えて、優美子達の所に走り出す。

――――  
平日 学校の教室内部。

休み時間の喧騒の中。

「でもとべっち最近頑張ってるんだよ！ 色々とき！」

「………？」

「色々って何さ？」

「へ!? あ、いや、えーつとね……」

皆がいつものように笑い合う最中、横目で彼がいる事を確認する。いつものように一人で頬杖をつき、机に座っている。大きなあくびを手で隠し、目をこすっている。

周りには誰もいない。戸部っちは机に突っ伏して寝ている。今なら優美子達も会話を止めない。離れない。

「まあ良いけど。戸部だし」

「そうそう！ とべっちだしっ！」

私の視線に彼が気付いたのか、驚いたような表情で私を見た。気が付いた。

わははと笑い合う彼等の隙間を縫うように、誰に聞こえるか否かの声で断り、メンバーから抜け出した。

普段はあんなに落ち着いてる彼が、私が視線を向けて向かっていくと急にオドオドとします。動揺しているのなら、それは好都合だった。軽く手を挙げて、決して好意的とは言えない笑顔で声をかけた。

「熱い視線を感じたよ〜？　もしかして隼人君に熱視線でも送ってたのかな？　そういう意味深な視線を送るなんて、腐適切だと思います！」

「止めてくれ……」

さて、優美子達も私達を気にしていない。それじゃあ、容赦無く釘を刺させて貰うね。君なら、きっと私の言葉を無下にしないから。

「ヒキタニ君。また、私が困っちゃう事してるでしょ」

私は自分でも驚く位冷たい声音で彼に「知っている」と告げた。